

# 食卓の聖騎士（ターフェル・パラディン）

紗代

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作知識ゼロの主人公がキャラに成り代わって食戟世界を生き抜く話。

原作よりオリジナル強め。

家族、過去捏造注意。

## 目次

一皿目	プロローグ	1
二皿目	家出？出家？いえ簡単ではありませんがしたつぱです。	4
三皿目	がんばれヒヨコ	7
四皿目	人生ってままならない	9
五皿目	波乱の顔合わせ	12
六皿目	再会時々胃痛	16
七皿目	十傑評議会はブラックです。	20
八皿目	宣戦布告	23
九皿目	月の宴くやや灰色風味く	28
十皿目	共犯者≡協力者	33
十一皿目	デート×麻婆豆腐×空	38
十二皿目	不審者には気をつけましょう。く編入試験ってなん だっけ？く	47
十三皿目	入学式からライフゼロ	52
十四皿目	身近な謎く同時刻の張本人く	56
十五皿目	最終選考	59
十六皿目	選抜の水面下	62
十七皿目	一度あることは二度あつて、二度あることは三度ある	65
十八皿目	下調べと準備、そしてルールの把握は必須事項	72
十九皿目	きやくよせぱんだ	76
二十皿目	所詮幼馴染みということ	82

二十一皿目	彼女の一端	87
二十二皿目	ストーリーカーⅡモテるの方程式は間違っている。	

92

二十三皿目	脱出計画	95
二十四皿目	希望のかけら	98
二十五皿目	朝の食卓の聖騎士	101
二十六皿目	怪しい誘いはフラグ：かもしれない	106
二十七皿目	安住の地をください。	110
二十八皿目	受難のち解決？	114
二十九皿目	まだ、皿に乗らない味	119
三十皿目	迷走からの終息…？	126
三十一皿目	極星寮	134
三十二皿目	疑心暗鬼って怖い	138
三十三皿目	緊急時にこそ人の本性の一端が顕れる。	142
三十四皿目	ホンネ	147
三十五皿目	甘さはまだ微糖	153

番外編

一口目	1 食事という名の事件	158
一口目	2 再捜査	161
一口目	3 真相と後日談	166
一口目	≡ 4 好奇心は猫をも殺す	176
IF	あるトリップ人のしくじり	183
IF	あるトリップ人のしくじり2	186

## 一皿目 プロローグ

私は死にました。享年がいくつだったとか、死因とかはわかりません。ただ「死んだ」という事実だけは把握しています。

【転生しますか?】

はい いいえ

なんていう選択肢があつたことと、そのコマンドを「はい」にしたことだけは覚えている。

「瑛璃、起きなさい。保育園に遅れるわよ?」

「はい……」

まだ寝ていたいと思いつつも仕方なくふわふわな寝心地のいい天蓋付きベッド（ちなみに私ではなく母親の趣味だ）から抜け出し姿見の鏡の前に立つ。

そこには、おおよそ日本人らしくない銀色の髪と真っ白な肌の色をした、眠そうにしている幼女が映っていた。

——司 瑛璃（つかさ えいり）、現在2歳。

まさか本当にもう一度人生を体験することになるなんて思っていなかった。

要約すると、現在、非常に混乱中である。

生まれた今世の生家は結構な金持ちで両親は両方とも日本人。ではなぜ私がこんな見た目をしているのかというと、それは母親の血筋が関係している。実は母方のご先祖（直系ではあるが祖母とかそういう近い血縁ではない）に北欧の人がいたらしく、私の見た目はその隔世遺伝らしい。俗っぽい言い方をすれば先祖返りというやつだった。両親は普通に接してくれるが、当然、他の子どもたちから見たら

私は毛色の違う子どもだった。そのせいか父親は特に私に対して厳しかった。甘やかすのと愛情は違うことだろうか。それとも実力をつけて他の子どもたちを見返してやれということだろうか。それとも、自分の血に非はないのに私のせいで嫌でも目立ってしまう我が家の世間からの風当たりからなのか、それはわからない。しかし「他人のものを奪ってでも頂点に立て、いいな!!」

それが父親の私に対する口癖のようなものだった。

「……はい」

思えばこの時、私は幼くして疲れてしまっていたのだろう。

そして、事件が起こった。

保育園の工作で好きなものを描くことになった時、私は空の絵を描くことにした。絵を描くことそのものに抵抗感はない。家柄的に英才教育のようなものの一環として絵画やピアノ、バイオリン、音楽、社交ダンス、バレエ、茶道や華道など和洋関係なく習い事を詰め込められているからだ（ちなみにそれらを一定以上こなせなければ講師や両親に怒られる）。この身体は滅法ストレスやプレッシャーに弱いけど耐えなくてはならない。他に生きる術なんてないんだし。

そして絵を描いていて思った。——あの綺麗な青が表現し切れていないようななんとなく物足りない気がする。

隣には「きれいな青ができた」と得意気に自慢している子のパレットがあった。——ああ、たしかに綺麗な色だ。

いいな。

魔が差した。

「びゃああああん!!えいりちゃんかわたしの絵の具とったー!!」

「ちよ……ちよつと瑛璃ちゃん!?駄目でしょ!!どうしてそんなことしたの!?!」

先生が私に問いかけてくる。なんで?父親は「奪え」って言ったし、先生だってこの時間が始まった時「みんな仲良く足りないところは分け合って良いところは真似してねー」って言ったのに。

「え?だって……その色があったらわたしの絵がもっとよくなるよ

思ったから」

それからお迎えの時間になって両親が保育園に呼ばれさすがに大  
事になってしまった。先生から事の概要を聞いた両親、特に父親は底  
冷えするような声で真顔になりながら静かに怒っていたが私が先生  
に言ったことをそのまま伝えると表情を変えた。父親のやや斜め後  
ろにいた母親も蒼白になりながら両手で口元を隠して驚愕に目を見  
開いている。

「瑛璃…まさかあなたお父さんの言いつけを守って…？」

「？うん、それに先生も『足りないところは分け合って良いところは真  
似してね』って言ってたから」

ますます顔色が悪くなっていく二人。私はそのままお手伝いさん  
によって別室に移され、習い事の中でも一番好きな料理教室へ両親と  
顔を合わせることなく出向くのだった。

二皿目 家出？ 出家？ いえ簡単ではありませんがし  
たっばです。

あの絵の具の一件から、両親は私との距離感を図りかねているよう  
だった。おかげで三歳の誕生日は両親なしでお手伝いさんしか祝つ  
てくれる人がいないなんていうことになってしまった。それからも  
月日だけが過ぎていく。

私はその間も習い事や最早趣味になったフランス料理に打ち込み  
続けた。転校先の幼稚園で何かあったからとか、家族仲がどうかそ  
ういうのは習い事には関係ないのだ。確かに講師の人たちの憐れみ  
のような視線は感じるけど。

これからどうしようか、私は別に両親を追い詰めたかったわけでは  
ないし、かといって私が話しかけると下手したら今よりこじれそうだ  
し…

そんな風に考えていると講師の一人として来ていた華道の先生（こ  
の場合は家元と言うべきだろうか？）にある提案をされた。

「京都の祇園…ですか？」

「そう。そこに私のお家の本家…「一色家」があるの。「一色家」は有  
名な料亭でね、和食が専門だから瑛璃ちゃんの好きなフランス料理と  
はジャンルが違うけれど料理の勉強になるかもしれないし、ちょうど  
瑛璃ちゃんと歳の近い子がいるの。もし今のお家に居づらいのであ  
ればどうかしら？」

「でも、わたしが行ってもめいわくじゃ…」

「大丈夫、私から話は通しておくから」

「…じゃあ、おねがいます」

はつきり言ってそこに行つて馴染めるかは微妙だが今の私にとつ  
ては渡りに船だったので素直に甘えさせてもらった。

—————



そして紆余曲折ありながらも私は四歳にして京都の「一色家」にお世話になることになった。

一通り見て思ったこと。一色家はなんていうか、総じてレベルが高いがその分敷居も高ければプライドも高い。みんなそれなりにいい人だったりなんかもあるのだが職人気質で完璧主義。私もとりあえず形式上は丁稚奉公である。

ここまではいい。余所者で子どもだからと舐められ冷たく当たられることもあるがまあそれは仕方がない。こっちは居候の身だし、実際の現場を見れるのだ。多少苦しくたってこのまま家に返品されるよりずっとマシである。

ただ、やっぱり気になるのは先生の言っていた歳の近い子。——  
ここの跡取りである慧君である。

慧君はなんていうか、こういう言い方はあまりよくないのかもしれないがまさに天才だった。一度見たものは大抵何でもこなすし、料理だって並みの料理人以上の実力はある。しかしここではそれが通用しない。名門ゆえに「そのぐらいできて当たり前」で流されてしまい、誰もそれに見向きもせず評価さえしなかった。素直に認めればいいのに。

今日時間ができたので慧君が練習している調理場に来てみた。覗いてみるとやっぱりいた。あれは…飾り切りだろうか。

「慧君」

「…えいりちゃん」

「飾り切り？すごいね」

「別に、すごくないよ」

「え、すごいよ。わたし今のところ花しかつくれないもん」

「でもえいりちゃんはフランス料理がとくいで、それにみんながこのくらい当たり前だって」

「それは大人の勝手な考えであって当たり前なんかじゃないよ。そんなことしたら料理がへたくそな人が泣いちゃうよ」

「あ」

「雑誌で読んだんだけどね、ある有名なタレントの人は有名な洋食の

店に生まれたけど食べることの方が好きすぎて料理なんてからつきしだったからけつきよく店を継がずにタレントになったって書いてあったよ?」

「え」

「料理の家に生まれたからって必ず料理がうまいわけじゃないし、わたしだって家は料理店じゃないよ?…だからさ、十分すごいんだよ、慧君は」

「そ、そう、かな…」

「うん」

ほんのちよつと照れて赤くなっている慧君。よし、ちよつと元気でたかな?

…と思っていたら焼き魚の香ばしい香りが。

「じゃあちよつと遊んでみましようか」

「え?」

このあと和食にフランス料理のソースを使って二人で美味しくいただきました。

### 三皿目 がんばれヒヨコ

あの飾り切りの一件以来暇さえあれば慧君は私のところに来るようになった。そしてヒヨコの刷り込みのように私の後ろを付いてくる。可愛い。

そうなる私と私も嬉しくてつい甘やかしてしまう。

あのときのソースを付けた焼き魚に味をしめたのか慧君は私に和洋折衷な魔改造料理をねだるようになった。私もほぼ思い付きと息抜きで作っているくらいなのだ。だがこれが結構美味しいので不思議である。

慧君が喜んでくれるのでやめる気は更々ないが、一回この創作料理がばれて店主や女将さん（慧君のご両親）に大目玉をくらい酷い目にあつた（雑用や皿洗いの量を増やされた）のでそれからは人の目を気にしつつ二人で作るようになった。

食材を無駄にしてるわけじゃないんだけどなあ…

でも一色家の人たちにとってはそれ以前に跡取りの慧君への影響が心配なのだろう。伝統ある祇園の老舗割烹の跡取りが和食以外の研鑽どころかでっち上げのような創作料理の方に傾倒するなんて…とか思われてそうだ。下手するとこの店継いでもらえなくなるかもしれないんだし。

そうこうしているうちに私は五歳になり、慧君も四歳になった。

一色家では跡取りが四歳になると故郷を離れて修行するという仕来りがあるらしく、慧君も例に漏れず同じ名門である「紀ノ国家」に行くらしい。

私はというと現在保留中だ。私としては少し寂しい気もするが私がかここで働く期間は決まっただけで幼稚園卒園までだ。どうやら両親も心の整理がついたらしい。あと約一年しかないのだし、このまま一色家に居続けるのが無難だという周りの意見なのでおそらくそうなるだろうと思っていた。のだが

「えっ…えいりちゃんが行かないならばくも行かないよ」

ということでも私も行くことになった。え、本当に？

いくら跡取り息子の初めてのわがままだったにしても創作料理の味を教えた輩を修行に同行させていいんですか？え、構わない？もつと和食を骨の髄まで叩き込まれてこい？あはは、やっぱりそうですよねー…

そんな私にひきかえ慧君はルンルンで楽しそうに荷造りをしている。というか私がついていくことになったのを聞いたあたりからご機嫌だ。まあそりやあそうか、いくら交流があるっていつてもそれは家同士のことであって慧君個人じゃない。これから知らない人たちのところに行くわけだし一人だと心細いんだろう。

そして行き先の紀ノ国家で今度は寧々ちゃんとの出会い、二人から三人になってこの一年間を楽しく過ごすごことになるのを新幹線に乗ったばかりの私はまだ知らない。

## 四皿目 人生つてままならない

一色家と紀ノ国家にお世話になり、やがて幼稚園を卒園し小学校に上がると同時に元の家に戻るようになった。

『泣かないで、寧々』

『な、ないで、ないっ、もん!!』

『慧』

『ねえ、瑛璃ちゃんはまだ料理続けるの?』

『うん。お父さんとお母さんにはまだ言っていないけど、料理人になりたいんだ、私』

『そっか…ならいつか会えるよね?』

『ふふ、その時にはフランス料理も和食も今以上にレベルアップしておくから』

『うん、楽しみにしてるよ!』

あれから、約6年――

「え、あれ…次の実習の調理棟ってこっちじゃなかったっけ?」

私は学校の広い広い敷地で迷っています。

ここは遠月茶寮料理学園中等部。あれから私への態度が軟化した両親に料理人になりたいことを話し、ならばと勧められたのが遠月だった。

料理の勉強で学生生活を送れることはとてもうれしい。しかし私は元々高級レストランとかの出自ではないのでそれを言うとな部の人間は無理難題を押し付けて食戟に持ち込もうとする。最初は断ろうとしても部下?取り巻き?みたいなものも加勢して逃げ道を無くそうとしてくるのだ。見せしめの意味合いもあるのかも…

ああああああ、想像しただけで胃がマツハでやられていく!そのうえ私は寮生であり…というか唯一の寮生なのだが。その採算が取れてないとか因縁を付けられて寮に立ち退きという名の襲撃にくるのもやめてほしい。

元々細かい神経がガリガリ音を立てながら削られていつている気が

してならない。追い返してくるふみ緒さんありがとうございます。でも懲りずにやってくる人たちに辟易としていた私の胃は既に限界を迎えていたので食戟をすることにした。その時相手がどんなことを言っていたとかさっぱり覚えてない。相手の要求も聞いてなかった。私の条件は「今後一切私と私の周りに関与しないこと」とにかくそれが一番だったのでそれ以上の要求はしなかった。そのときもなにか言っていた気がするけど料理のことじゃなかったから覚えてない。

それで勝つてからというものの、食戟の申し込みが増えた。なんでだ。痛いよもう胃薬が手放せない毎日が続いているんだ。

それでも食戟の申し込みは減らないので片っ端から受けることにした。そして食がすべてのこの学園で生き残っていくにはどうしたらいいのか悩んで、悩んだ末に——私は一から学び直し講師の人々に試食を頼んで毎日試作品を振舞った。

講師の人々にはA判定や太鼓判をもらっているが私は納得できない。中等部はまだ本格的な篩い落としはないらしいが、高等部に上がると激化し最終的に無事卒業できるのは十傑以外に二十人いないくらいが良い方だと聞いたのだ。それがデマではないことは同じ敷地にある高等部の先輩たちの数の減りようを見ていれば一目瞭然である。両親や寧々ちゃんや慧君に宣言してしまった以上、後に引けない私はとにかく作って作って作って作って作り続けた。

「おーいそんなところに一人でなにしてんだー？」

「え」

声のした方を見ると赤毛に八重歯が目立つ少女が立っていた。

「って、おまえもしかして司瑛璃？」

「な、なんで私のこと知ってるの？」

「なんでもなにも有名だぜー、食戟の負けなしで講師をノイローゼに追い込む「講師潰し」！」

「え!？」

たしかに私の試作に携わった講師の人たちは一度付き合ってもらったらその日以降二度と会わなかったけど、まさかそんなことに

なってたなんて…

「どうしよう…」

「ま、いいんじゃないの？もう終わったことなんだし。と、それでそんな司がこんなところで何してんの？」

「え、つと。その、道に迷って…」

「ふは！なんだよそれ！いいよ、ここで会ったのもなんかの縁だし一緒についてく」

「あ、ありがとう…」

「あ、そーいやあたし、まだ名乗ってなかったっけな——あたしはりんどー。小林竜胆！あんたと同じ一年生!!よろしくなー司!!」

「——うん、よろしくりんどウ」

これが私と後に第二席になる相棒のような少女——小林竜胆との出会いである。

「で、行きたいのってどこ」

「次のイタリア料理の実習の調理棟」

「それなら反対方向だぜ？ちなみにあたしも取ってる！」

「ええ!?!それってまじいんじゃない？」

「一緒に怒られようぜー司ー♪」

「…うん、そうだね…」

## 五皿目 波乱の顔合わせ

中等部から高等部に上がり、宿泊研修に秋の選抜、実地研修が終わりひと段落した頃。

「紅葉狩り会？」

「おー、つーか司、おまえ選抜優勝してんのになんで知らねーんだよ」「今私のマンションに郵便届かないようにしてあるから」

「あー、そっか…ストーカー対策か」「うん」

隠すまでもないことだが私はストーカーされやすい。最初は自分だって自意識過剰だと思ってた。でも違ってたんだ：始まりは食戟の申し込みの手紙に埋もれてた名前のない手紙。「好きです」の一言のみの手紙だった。物好きなのか間違いなのか：その時は気にしていなかった。でもそれから内容は日に日に過激になっていった。ついには私の行動を監視しているような旨のものになっていったのだ。手紙の内容も私の名指しだったし。そのうち食べ物とか変なにおいにする小包とかが届いた。やばい。

これはもう勘違いでは済まない、このまま寮にいたらふみ緒さんにまで迷惑をかけかねないことから止む負えなく退寮することにした。中等部の一年間だけというなんとも短い間だった。ふみ緒さんの作るブリ大根、好きだったんだけどなあ…

両親に連絡し、二人は心配してくれたが実家を補足されては不味いのでセキュリティの万全な物件が見つかるまで周辺のホテルを転々とする生活をしていった。そして入居したはいいがストーカーが増えていた。なぜ増えたと分かったかというとそのストーカーのうち一人が私の部屋に入ろうとして逮捕されたからだ。それでも来る手紙が止むことはなかった。その手紙をDNA鑑定にかけてほかに目撃証言などをしていった結果、学園の高等部の先輩（面識なし）だということが発覚し前の食戟と同じ条件で叩き潰した。これで心安心…と思ったがまた別の手紙や差し入れのようなものが届くようになった。念のため探知機で盗聴器を探したらあったし、どうやって



入ったんだ。

なので今住んでいるのは更に嚴重なマンションの一室であり、郵便物も実家以外から届かないようにしてある。

「現十傑と来年の十傑候補の顔合わせか…なんかあるのかな…も、もし失礼なこととして退学なんてなった日には…」

「だいじょぶだって！本当に顔合わせの茶会みたいなもんらしいし、それに本選出場メンバー皆いるってことはももとか女木島とか齋藤とかもいるってことなんだし。」

「そ、そつか…なら大丈夫かな」

「そーそー」

そして待ちに待った（待ってない）紅葉狩り会——

なんか十傑の人たちって我が強いというか…個性的な人が多い。あとなんかこの集まりそのものに興味ないけど仕方なくここに来た、みたいな感じがバリバリ伝わってくる。うええー、やっぱり場違いだったのか私!? って思っても、そんなふうにいるのは私だけのようでリンドウは運ばれてきたお菓子のかわり貰ってるし、他のみんなもいつも通りだし…

「失礼のないように失礼のないように失礼のないように失礼のないように…」

「ほーら司！先輩たちの前だぜ？しっかりしろって!!」

「あいた!?り、リンドウー…」

隣にいたリンドウから背中に手痛い檄を入れられて我に返る。痛い…でもありがとう。そう思っていると入場してきたときから私のことを睨んでいた五席の男子生徒が怒鳴り出した。

「つかさ…? 司っておまえ司瑛璃か!」

「は、はい」

「なんでこんなやつが紅葉狩りにきてんだよ?!」

『ええっ』

秋の選抜で優勝したからだよ!!とその場にいる全員が心の中で突っ込んだ。

「ああそういうえば、屋切の弟はその子に食戟申し込んでこてんぱにされたんだっけ？」

「おまえのせいで弟は！退学になって引きこもりになったんだぞ!!」  
「え……？」

凄いい剣幕で怒られているのは分かる。分かるのだが…

「誰だっけ」

「ごめんなさい。まったく思い出せません。リンドウなんかは私の心情を察しているのか呆れ気味にわざとらしくため息をついた。

「ほらアイツだよ、司のことストーリーキングしてて食戟で負かしたやつ」  
「屋切：そういうえば茜ヶ久保と実習のクラス一緒だったやつじゃないか？」

「…司のことつけ回すようなやつなんて知らない。大体、スタジエに行く時点でクラス、半分もいなかったし…」

「おまえな…」

みんなが話で盛り上がるなか、ついに堪忍袋の緒が切れたのか屋切先輩がキレた（いや、元々怒鳴ってたけど）

「ふっぎけん!!表出る一年坊!!」

「いえ、あの…ここ、外です」

「あーらら、言われちゃったね、屋切」

「…っ、こうなったら——食戟だ!!」

あ、やばい。訂正したら揚げ足取りみたいになってしまった。他の十傑に煽られて先輩は臨戦態勢に入っちゃってるし…

「十傑の方から食戟の申し込み？受けるよ司く♪」

「ええ!!そんな無茶なっ」

「おもしろそーじゃん」

「ああ、別に逃げたいなら逃げてもいいいぜ？どうせ俺に負けたら退学になってもらおうと思ってたしな!!」

「…なんだよそれ」

屋切先輩の言葉に悪乗りしていたリンドウの雰囲気が変わる。他のメンバーもだ。

「……あんななんかに、司、負けないもん」

「なんだとチビ!!こうなったらおまえら全員退学にしてやるぞ!!」

「：わかりました」

「司?」

ももに突っかかっていく屋切先輩の方を向く。視線を合わせると先輩が反応していたけどそんなのどうでもいい。

「その食戟、お受けします。」

こうして、私は屋切先輩を完膚なきまで叩き潰し、第五席の席次に就くことになるのだった。

## 六皿目 再会時々胃痛

あれから学年が上がり、私たちは無事二年生へと進級することが出来た。そして——迎えた入学式と始業式。

「多いね…」

「んーと、たしか今年の新一年生は812人だとかって言ってたっけな」

「812…!?!」

「おう、っていつでも全員内部進学だから目新しいってほどのやつはいねーけどな。つーかこれでも減ったらしいぜ？最初は900人近くいたらしいし」

「これでも減った方、なんだ…」

私たちが話しているうちに式が始まった。十傑は一般生徒とは違う場所に席を設けられているが始業式はともかく入学式は新一年生の総代と総帥が話すだけなのでそこまで緊張しない。いや、十傑専用席に居る時点で目立ってるんだけどさ…

『新一年総代——紀ノ国寧々』

「はい」

え

今、なんていった？

紀ノ国、寧々って、そう、言った？

呼ばれて壇上へと登っていくその女子生徒は、眼鏡やおさげなど記憶の中の幼い少女とはやや差違はあれど、彼女は間違いなく——私の幼なじみの一人、紀ノ国寧々だった。

「寧々!!」

「おねえちや…コホン、司先輩」

あ、言い直された。

「久しぶり。高等部進学おめでとう。あと普通に昔みたいに瑛璃でいいよ」

「いいえ、一応公の場ですし、先輩は敬わないと示しがつきませんから

…それと、ありがとうございます」

「そうかな？」

「そうです」

寧々ちゃんは極めて公平だが結構頑固なところがあるのできつとこれは譲らないだろう。

「というか中等部からいたならもつと早く再会しててもよかったんじゃない？」

「なんだか先輩は食戟とかで忙しそうにしていたので、中等部と高等部の校舎も離れてますし…」

「…そういえばそっか」

いや私の場合は食戟だけじゃないんだけどね。むしろ食戟よりそっちのほうがやばいんだけどね。…う、思い出したらまた胃が痛くなってきた。

「先輩、大丈夫ですか？顔色が良くありませんけど…」

「ああうん…大丈夫…ちよつと、思い出して胃が痛いだけだから」

「え、ちよ、本当に私たちがいない間に何があったの？」

「いや…ストーカー、みたいなものに遭ってさ…おかげでせっかく寮に入ったのに中等部の一年間しかいれなくて…今まで食戟で全部なんとかしてきたんだけど…」

「ストーカー!?お姉ちゃん大丈夫!？」

「はは…」

もう既に素の口調に戻ってしまっているけどそうやってしまうくらい突拍子もないことを胃痛交じりに私も話しているので致し方無いだろう。

「…今のところは、結構嚴重なマンションに住んでて郵便物も届かないようにしてるから前ほど気になることは無くなったんだけど…時々視線を感じたり、私物が無くなったり…あ、でも常に特注の小型盗聴発見器は持ち歩いてるから盗聴器見つけるのはうまくなったよ」

「お姉ちゃんもういいから!!それ誇っていいことじゃないよ!!」

「そ、そう?…そういえばリンドウからも似たようなこと言われたなあ…」

あの時は無言で頭撫でられてももと斎藤と女木島にタルトと手鞠寿司とラーメン恵んでもらったんだっけ。ふみ緒さんといいみんなといい優しいなあ…。そんなふうに思いふけつていると後ろから声がした。

「あ、いたいた紀ノ国くん！一体誰と話して——」

声のした方を振り返る——とそこには端正な顔立ちの男子生徒がいた。あれ、かなりガタイが良くなって昔のような可愛らしい顔じゃなくてイケメン化してるけど…慧君、だよね？

「慧、くん…？」

「おそろおそろ名前を呟くと慧君（仮）が固まった。すると寧々ちゃんのため息を吐いて助け船を出してくれた。

「…お姉ちゃんよ、一色。返事くらいしたら？」

「…ああ！うん、久しぶり。ごめんよ。前に別れた時よりもずっと綺麗になっていたものだから」

「いや別にいいんだよ、忘れてたって…」

「そんなじゃないよ！ところで二人でなんの話をしていたんだい？」

「えつと…」

「お姉ちゃんがストーカーに遭ってるっていう話」

「ちよ、寧々!!」

「大丈夫よ、一応信用できるし。何よりちよっと協力してほしいことができたから」

「ふうん、ストーカー、ね…詳しく聞かせてもらってもいいかい？」

「はい…」

慧君ののほほんとした爽やかイケメンスマイルが一瞬氷の微笑に見えたのは気のせいだと思いたい。

結局、私の知る限りすべてを二人に話した。今日は入学式だけで二人はもう自由だが私は十傑のメンバーなのでこれから仕事の予定が詰まっている。

名残惜しいが別れることになり、そのあと二人が色々話し合っ

たのは残念ながら聞こえなかった。

この数日後、同級生の一部が謎の失踪を遂げることになるのだが私には知るよしもないことである。

## 七回目 十傑評議会はブラックです。

突然ですが皆さん。私は十傑の三席になりました。リンドウやももちちゃんも十傑のメンバーに入っています。自慢かって？うん、私の友達TUEE!!ってほしいし言いたい。でもね、私自身は違う。だって単純に食戟とかある傾きかけだった店とか放っておけなくなつてプロデュースしたりしただけだ。そしたらいつの間にかこの席次になつてたんだよ：元々リンドウと一席と二席になる約束をしてたからいいといえがいいのだろう。でもね…：仕事多すぎるんだよおおお!!生徒に学校の運営任せるってどういうこと!?!味見役に視察に会食、講演にコンテストや大会の審査員、スピーチに：切りがない。そのうえ席次が上がれば上がるほどその仕事量が増加していくんだ!だって五席の時より明らかに増えたもん!!事によっては休日出勤も辞さないし、予算を使えるといつても忙しい時期にぶち当たると使う時間がない!!ただでさえストーカーの後遺症でますます弱つた胃が!胃痛が既に慢性化してるんだよ!!

…本当に権力と報酬に見合つた仕事なのか疑わしいところである。

「司この束も追加だつてよ」

「ええ!?!」

「何が『屋切先輩と並樹に勝つた司三席なら大丈夫』だよ!完全に逆恨みと妬みとサボリじゃねーか!!」

「ああ…一席と四席か」

あのいつも明るい猫のようなリンドウが珍しく不機嫌そうに書類の束を持ってきたので受け取ると愚痴り出した。ああ、やっぱりその人たちだったか。

実は私は(ひよつとしたら私たちは)今の三年生の十傑メンバー(一部を除く)に嫌われている。らしい。

というのも私は今のところ料理と自分と親しくしてくれる仲間と興味を引くものしか眼中にない(らしい)。洞察力に優れたリンドウのいう事なので本当かもしれない)ので、嫌がらせの犯人とかどうでもよかつた。つい最近知つて「ど、どうしよう…」とか怯えてしまつた



けど逆にみんなに「今更?!」と驚かれたのは記憶に新しい。

ちなみに私が三席になったのは前述のことに加えて元三席（現五席）の並樹先輩と食戟して勝利してしまったのも大きい。

私が一年の紅葉狩り会で倒した屋切先輩の勇猛果敢（？）に密かに憧れていたらしい元三席はそれを倒してしまった私を目の敵にしていたらしく、まあ、かいつまんで話すとやっぱり食戟になったわけだ。

そのテーマが「和食」。私の得意分野がフレンチだと分かっていたからか、正反対の自分の得意ジャンルをわざわざ三席の権限を使って設定したらしい。

結果、私が勝った。相手は「なぜだああああ!!」とかジーザス!!つてなりながらオーバーリアクションしてたけど知らない。相手がゴロゴロ転がっている隙に私も相手のスペシャリテだとかいう蕎麦を食べた。——おいしいといえはおいしいが「寧々の打つ蕎麦の方が美味い」。たぶんこの人、もうこの現状で満足して適当に課題や食戟をこなしていたんだろう。教員や講師たちは十傑に甘いところがあるし授業をサボったところで十傑から降ろされることはない。そもそも十傑に食戟を挑もうとする生徒がいないのだ。寧々の蕎麦を食べさせたら一体どんなリアクションになるのか、見物である。と思っていたら相手は真つ白になって倒れ伏していた。南無。

その後、私は一気に三席へと駆け上がった。ちょうど私の五席が空席になったので席次チェンジである。てっきり恨まれているのかと思っていたが杞憂だった。どこで頭を打ったのか、元三席の並樹先輩は超いい人になっていた。いわく「私のおかげで目が覚めた」んだとか。その先輩とはそれ以来うまくやってくるがそれに黙っていないかったのが一席・四席の先輩である。屋切先輩との食戟でへし折られると思っていた私に逆へし折り切ってしまう飛び入りで五席に、元三席の並樹先輩と食戟することになってやっとかと思ったらそれにも勝利した飛んで三席に。そのうえリンドウたちが十傑に入ってきた挙句、並樹先輩は私側に寝返ったので勢力とか自分たちの席次死守のために私を厄介者として扱い、嫌がらせをしているらしい。

ちなみに時間がないのも大抵この人たちの仕事を押し付けられて

いるからである。

「今頃新一年生は合宿か」

「きつとあの二人なら大丈夫だと思うけど…怪我したりしてないかな…風邪とか…五月っていつてもまだ寒いし…」

「大丈夫大丈夫。いーからおまえはこっちに集中しろって、終わんねーぞ?」

「はい…うう」

リンドウに急かされて机の上に積まれた書類との格闘を再開する。

「今年の紅葉狩り会…荒れないといいけどな」

そんなリンドウのつぶやきは、私に届くことなく空気に融けていくのだった。

## 八皿目 宣戦布告

再びやってきた秋の紅葉狩り会。

「何事もなく終わりますように何事もなく終わりますように何事もなく終わりますように何事もなく終わりますように……」

「そろそろ時間だつてのに……去年とまんま同じじゃんかー」

「だ、だっていくら二人がメンバーの中に入ってるっていつてもあと六人もいるんでしょ？こ、怖い子とかいたりしたらどうしよう……わ、私元々こういう顔合わせとか得意じゃないのに……」

「だが、これも十傑の務めだと総帥は言っていたぞ」

「でも……」

「もー、これ終わつたらももが直々にザツハトルテ焼いてあげる。……正直言つて、ももも面倒くさいと思うけどちよつとの間だけだし……がんばれ司」

「……頑張る」

「現金だなーおまえ」

みんな「やれやれ」っていいながらも私に付き添ってくれる。うう、おかげでちよつと楽になつてきたかもしれない。

「時間だ……それじゃいこうか」

『おう！（うん）』

「仕切つてんじゃねえよ二年が」

「……」

「っ」

「女木島ー？」

「……ああ、今行く」

なんか一席と四席の先輩が女木島から凄い速さで去つて行つた。顔色悪いけど大丈夫なんだろうか……まあ私に言われたくないだろうけど。

「遠月十傑のおなあくりいーっ!!」

太鼓の音に合わせて私たちも席に着く。うんうん、寧々ちゃんに慧君に——他にも名前を聞いたことのある子たちばかりである。

「じゃあ、お茶とお菓子お願いします。」

「かしこまりました。」

私が声をかけると給仕の人たちは一礼して去って行った。

「あのー、誰か俺と食戟してほしいんだけどー」

「あ、私で良ければいいよ」

言い出したくてうずうずしていた一番身長の高い男子の挑戦に手を挙げて応えると好戦的な目でギラギラとこちらを見てくる。うん、ちよつと怖いけど陰湿なストーカーよりずっといいな。…なんか舐められてる気がしないでもないけど。

「マジ!? やりい!! ねえねえねえいつにする? 明日?」

「何時でもいいけど…出来れば秋のうちにしてもらえると助かるかな。進級試験とか色々行事が立て込んで食戟できる余裕すらなくなるから」

「ふうーん…」

男子生徒が考え込むと戻ってきた給仕の人がお茶とお菓子を配っていく。今回は栗きんとんかー、とお菓子を眺めてから一緒に運ばれてきたお茶を一口飲む。あ、これ玉露だ。それもかなり高いの。さすが総帥、出し惜しみせずに提供してくれるのに感謝である。

「すいませーん、おかわりー!」

「リンドウ食べ終わったの!?!」

「だって二つしか乗ってねーんだもん。仕方ないだろー?」

運ばれてきたばかりの栗きんとんを既に食べ終わったリンドウが給仕の人におかわりを催促する。

…なんかこれ去年と変わらなくないか?

一年生は…あんまり仲良くないんだ…まともに会話が成立しているのは寧々ちゃんと慧君だけで、なんかすぐくピリピリしてる雰囲気伝わってくる。ひよつとして個人主義が多いのかな。

「お久しぶりです。司先輩」

「久しぶり、一色、寧々」

ニコニコと挨拶してくる慧君とペこりと会釈する寧々ちゃんにこちらも和む。ちなみに三人で話し合った結果、二人は私を「先輩」と

呼ぶ事になり、私も慧君を寧々ちゃんに倣って「一色」と呼ぶ事にした。慧君は納得していないようだ。だが寧々ちゃんが私が親しい人と興味を持ったもの以外の男子を「名字＋さん（またはくん）」で呼んでいると言ったらやや渋りながらも納得した。そんなこととしてるつもりはないんだけどな…

「そいつらが噂の幼なじみか？」

「そうだよ」

「ふくん？…よし！あたしは小林竜胆。気軽にりんどう先輩でいいぜ」

早速二人に構い倒し始めるリンドウと殺伐とした空気の中話し掛けてもらえたことが嬉しかったのか、和やかに会話する二人。ああ、ここだけ別世界みたいだ。

「おいおい、ここはただの顔合わせであって必ずしもここにいる奴らが十傑に加わるなんてわけじゃないんだぜ？仲良しこよしとか引くわー」

せつかくの雰囲気が一席の放った言葉で一気にぶち壊された。

「あ？？」

「……」

「…どういう意味ですか？」

やはりこれに一番反応したのは一年生たちだ。大半は黙ったままだけどころからさまに顔を歪めているし、さっき私に食戟を挑んできた子なんかは立ち上がって今にもカチコミそうな空気を醸し出している。

「秋の選抜なんてのはただの目安だ。オレら十傑は学内評価トップの十人、それに対しおまえらはまだまだ世間知らずなアマチャン。そんな奴らと仲良くする気なんて更々ないね」

「大体、こんな顔合わせになんの意味があるっていうんだ、高等部に来て一年足らずの君らとの交流で得るものなんてたかが知れてる。まさに百害あって一利なしもいいところだ」

「二人ともやめないか、三年生が料理も出さずに一方的に一年生を詰るなど…情けないぞ！」

「並樹、てめえ…」

「それに、おまえたちは間違えている。高等部に来て一年足らずであらうがなかるうがここでは料理がものを言う——たとえばそれが一年生であつたとしてもだ、現におまえたちは見ているはずだぞ」

「っ…」

仲裁に入ってくれた並樹先輩の言葉に俯く四席と悔しそうに顔を歪める一席。

「うるさい！大体おまえだつてこいつに負けたから五席になつたんだろう！」

「ああ確かにそうだよ。俺は彼女に負けた。でもな、俺はそれでよかったと思つている。」

「く、くそっ」

四席が立ち上がったって私を指差すが並樹先輩は意にも介さずお茶を啜つた。

「そういえば一年の一色と紀ノ国は司三席と顔見知りだったか」

「ええ、幼馴染みですよ」

「ふーん…ふっ」

一席が私たちを見て笑つた。

「一年生に和食の凄いのがあるって聞いたんだが…まさかこの二人だったとは、特に片方は跡取りのくせに「一色家の落ちこぼれ」なんて言われてるらしいじゃないか。ま、類は友を呼ぶなんて言うしこの魔女にはさぞお似合いだろうさ」

「おまえいい加減に…」

バシヤ

「…すみません、手元が狂いました。」

私は一席の頭上にもう冷え切つてしまつていたお茶をこぼした。お茶は一口しか飲んでいなかったので、そのせいで一席は上から下までずぶ濡れである。あーあ、せつかくのお茶が勿体無い。

「な、なんのつもりだ司三席!!」

「こんなことをしてただで済むと思つているのか!?!」

一席と四席が喚くが私はそんなこと知つたことではないし、周りの

他の十傑や一年生も目を見開いている。

「私のことをどう扱おうとかまいませんが、その対象が私ではなく友人や先輩に向けられるというのであれば、私は手段は選びません。そんなに納得がいかないのであれば——食戟で決着をつけましょう。ね、いいでしょう？条件としては…そうですね、私が勝つたら『二年生十傑と並樹五席、一年生に謝罪することと自分の十傑業務はなるべく自分ですること』、私が負けた場合は『私は十傑第三席の座を降り、退学する』。これでいかがでしょうか？」

「え、あ…」

「食戟…」

一席と四席の表情が凍り付いたかと思えば直ぐにどこか怯えを含んだようなものに変わっていく。どうしたんだろうか？私は三席だ。彼らがさつきまで延々と語っていた地位も年齢も下の存在だということに。

「受けてください、食戟。ここにいる全員に勝つ勝算があるのでどう？だからわざわざこんな公の場で全員を敵に回すような態度が取れるんですよね？逃げちゃだめですよここに居る全員が目撃者です。なんなら私のボイスレコーダーの音声を然るべき機関に引き渡したっていいんですよ——で、受けてくださいますよね？食戟」

そして私は一年生の男子生徒と一席と四席の先輩に勝利し、これまた一気に念願の（あまり嬉しくないが）一席に昇格したのだった。

## 九皿目 月の宴くやや灰色風味く

紅葉狩り会を発端として起こった食戟三連戦に勝って休む間もなく我が校の一大イベントである学園祭——月饗祭が始まろうとしていた。

かくいう私はというと——

「司一席、今日の予定は○○社新商品の試食、十一時半から料亭□□の秋の新作の味見役を。午後には——」

「……はい」

十傑の業務に追われている。山の手エリアにある自分の出店する店の準備をしながら。…自分個人の時間がシャワーを浴びる時間だけってどういうこと？

十傑の仕事を終わらせて予約の受付や準備を進めていく。

「去年より予約者が多いな…ホールは多分大丈夫だけど調理が追い付くかな…」

私は厨房にあまり人をいれたくない。やむを得ない場合は仕方ないがそれでも十傑と寧々ちゃんと慧君以外をいれたくない。理由は単純に他人を信用できないからだ。中等部一年の初期はそうでもなかった。普通に小学校の調理実習と似たようなノリでペアで調理していた。

しかしある実習のペアでの調理の時に事件は起こる。その時の担当講師が太っ腹な人で実習がちょうど昼休みの手前なので食材を多めに用意し賄いを作っていると言ってくれたのだ。私はその頃には既にストーカー被害に遭っており、私物が無くなるというのも日常茶飯事で弁当が無くなり代わりにだれが作ったのか分からない弁当が入っていたりしてお昼抜きなんてこともあったので素直に嬉しかった。

もう提出用の料理も私の賄いも出来て全て皿に盛り付け終わり、私が料理を提出しようと席を外した時、背後で大声が聞こえた。振り返ると私たちの調理台のところ人に人が集まっているし、周りのクラスメイトたちも顔を真っ青にして震えている。ただ事ではないと私と担



当講師は調理台に駆けつけた。

そこには、今回ペアになつた生徒が指先から流れ出る血液を私の賄いにたらし混ぜるといふ奇行を行う光景があつた。

——異物混入ダメ絶対。

それ以来、私は厨房にあまり人を入れなくなつた。俗に言うトラウマ、というやつである。

「どうしようかな…」

でも出店の申請した時点でどつと予約がきちやつたし、提携を組んでる企業の人とかも来ることになつてるから今更調整なんてできないし：助っ人、とか？でもリンドウ以外はみんな出店するだろうし、となつたら十傑のみんなには頼れないから…

「そうだ！」

思いついた私は早速打診するためにある場所へと急いだのだつた。

——そして月饗祭当日。

「あの、予約していた紗々原です。」

「——紗々原様ですね。お待ちしております。ご案内いたしません。」

「あ、え、ええ！お願いします」

予約していた女性のお客様は声をかけられて頬を朱に染めながら返事をする。

「席はこちらになります。ご利用の際はテーブルの上にある呼び鈴を鳴らしてお呼びください。では」

「は、はいいゝ」

女性客のハートをがっちり驚掴みにして彼は厨房へ戻ってくる。

「紗々原様到着しました！」

「了解！」

私は早速調理を再開しコースを仕上げていく。彼もウエイターの服の上からエプロンを身に付け調理に移った。

おかげで料理は順調に捌けている。この分なら今日は間に合うだろう。

協力を要請しておきながら結局彼に厨房だけでなくホールの方にも出てもらっていることにやや罪悪感を感じるが今はそういったことにかまけている暇はない。とにかく、素早く正確に手を動かす！私も頼ってばかりいては不味いので料理を給仕する。と声をかけられた。たしか：前に一席としての仕事でロスに行った時に私の料理を食べていた美食家の一人、だったっけ。

「やあ！久しぶりだね」

「——お久しぶりです。ウイリアムス・アスクール氏」

「そんなに畏まらなくていいよ、私とキミの仲じゃないか！」

—— 需要<sup>客</sup>と供給<sup>料理人</sup>の関係です（しかも二回くらいだったはず）。

「にしても学校の敷地内にこんな建物を建設してしまうなんてさすが遠月！」

「山の手エリアは大体このような個人経営の店舗が多いですし、他の十傑もほとんどこちらに構えていますからお食事がお済みになられましたらどうぞ他も回ってみてください」

「いやあしかし、キミ以上の料理なんて食べられないだろう？なんてたってキミは一席なのだから！」

「——」

「まただ。」

ギリ

思わず拳を強く握る。やっぱり食べにきたのは司瑛璃<sup>わたし</sup>の料理じゃなくて——遠月十傑のブランドか。

「それにしても前回はだが今回も素晴らしい！次も期待しているよ第一席！」

「…ありがとうございます」

「ああ、大分長く引き止めてしまったね」

「いえ、それではごゆっくりおくつろぎください。」

やっとこさ解放された私は走らないように気を付けながら厨房に戻って行った。

「……」

そんな私の姿を彼がじつと見ていたことにも気付かずに。

今日の分の食材を捌き終わり、山の手エリアとしてはやや早めの閉店となった。まあ今日の分の予約は全部消化できたのでよかつたよかつた。

「今日はお疲れ様。ありがとうね一色」

「いえいえ、こちらこそ僕を指名してくれてありがとう」

そう、私が協力を仰いだのは慧君だった。本当は寧々ちゃんも誘つたのだが既に出店を申請した後だったので引き抜けなかつた。しよぼくれて帰る私に思うところがあつたのかその時慧君を紹介されたのだ。「一色ならきつと全面的に協力してくれるでしょうから、馬車馬のようにこき使つてやってください」寧々ちゃん……。元々慧君のところには行くこうと思つていたので私は極星寮に電話を入れて向かつたのだつた。

極星寮には相変わらず気が強くて優しいふみ緒さんと慧君がいた。どうやら慧君は帰つてきたばかりだらしく着替えたかつたのかネクタイが歪んでた……。なんかごめん。ふみ緒さんもそんな慧君を見て溜息吐いてるし。とにかくこれ以上長居して迷惑になってしまう前に用件を話そう。私も自分の店の内装とかも確認しに行かないといけないし。

そして用件を話すと慧君は快諾してくれた！ああ、やつぱり持つべきものは友とはよく言つたものだ！名言を遺した人に感謝する。「多少思い違いはあるようだが……。まあよかつたじゃないか。司、なんかあつたらいいなよ。あんたも元とはいえこの極星寮の一員なんだから」と言つてくれたふみ緒さんにじーんときてしまったのは不可抗力だ。

「なにかお礼がしたいんだけど何がいい？」

「別にいいよこれくらい。」

「私がしたいんだよ」

私が引く気がないことを察してくれたのか慧君は考え込む。

「そうだなあ…一番ほしいもの…いや今はいいか…！じゃあ月饗祭の最終日、ちよつとお店早めに閉めてくれる？」

「今日みたいに早めに在庫が無くなればできるだろうけどなんかあるの？」

「最終日は一緒に回りたいたいんだ…だめかな？」

「そういえばこれ学園祭だった。自分の店の切り盛りですっかり忘れてたけど。」

「そうだね、私たちも学生でいられるうちに今を満喫しないとね。」

「——ううん、楽しみにしてる」

## 十回目 共犯者≡協力者

月饗祭最終日。初日から慧君のおかげで集客も料理の提供や回転率がスムーズだったためか連日山の手エリア売り上げ第一位を獲得し、残すは今日のみである。予約者と飛び入り両方込みでかなり多めに発注をかけておいたのでラストスパートをかけるにはちようどいいかもしれない。余ったりしたらちよつとした料理を作つてこの間一目惚れして買ったランチボックスに詰めて、極星寮でつまんでもいいだろうし。

と少し考えてリンドウの顔が浮かぶ…余る、かな？余るよね？

見た目に合わず大食いチャンピオンも真つ青な顎と消化器官を持つている友人に、去年の店のフルコースを十周させられるという暴挙に出られている(ちなみにフルコースの料理を十個ずつ食べたばかりであるというのに「じゃ、あたし他にも回つてないところあるから」と軽快に去つて行つた。)前例があるので油断はできない。

「まあ、リンドウに食べてももらえるのはとつても嬉しいんだけど」  
リンドウは美味しそうに食べてくれるのだ。そのうえ味の感想や次は何が食べたいとかこつちの方が好みだとか、そういつた我儘も言つてくれる。みんなや寧々ちゃんや慧君も、我ながら友達には恵まれていると思う。

——あんな、味わいもしない人間たちと違つて。

「(考えても仕方ないけど)」

そう、考えても仕方ないのだ。人の価値観なんてそう簡単に変えられるわけもないのだし。

もうこの考え事やめよう。まだ料理を作っている途中なんだから、萎えてしまつてはダメだ。

「司先輩」

「何？一色」

「竜胆先輩が来ましたよ」

「もう？今年はちよつと早いね」

今の時間帯は昼より早めなので客足もバラつきがあり、予約者もほ

とんどいないのでちよんどのいいのかもしれない。

「じゃあ余裕も出てきたし、一緒にリンドウのところに行きましようか」

「はい」

「おー、司ー！今日のコースも美味かった!!」

「ありがとう。あ、でも…リンドウがいるならもうちよんと室温調節した方がよかった？大丈夫？寒くない？」

「はは！だいじょぶだよ、じゅーぶん快適快適♪そんじやコースもう一回りくれ！」

「はいはい、あ、一色。まだ昼前で客入りまばらだから休憩入っいいよ。そうだな…ランチタイムの始まる十一時半までに戻ってきてくれればいいから」

「はい、わかりました。」

にっこりと笑顔で手を振る慧君とにんまりと次の獲物を待ち構えるリンドウを背に私は厨房へと戻って行った。

\*\*\*\*\*

「一色」

「なんですか竜胆先輩」

「司の料理来るまでのあいだ、暇だから話し相手になってくれよーいいだろー？」

「いいですよ、ちよんどの僕も暇なので」

「よーし、立ったままってのもあれだし、ほーら、すわれすわれー♪」  
「ありがとうございます」

ガタガタとあたしが自分の向かいにあった椅子を引き促すとそこに一色が座った。

「ここに来る前に寧々のやってる蕎麦屋に行ってきたよ、なんで寧々はお店しておまえは出してねーんだろ？って思ってたら『司の店に行けば分かる』って言われてなー面白そうだからすっ飛んできたんだよ。」

「そうだったんですか」

「ああ、寧々、すっげー悔しそうにしてた。『私だってお姉ちゃんの店手伝いたい…なんですぐに申請書類提出したんだろう』ってぼやいてたぜ？おまえら司のこと好きすぎだろ!!」

ははははは！とあたしが笑うと一色も穏やかな、悪く言うことやや胡散臭げな笑顔を浮かべる。

「そうですね、僕らはいつも彼女にくつついてあちこち遊びまわってましたから、それはもう実の姉弟のように…」「けど、おまえはそれだけじゃない。そうだろ?!」

一色にとつては寧々も含めてのことに聞こえたんだろう。ま、実際あたしの聞き方もそんなふうに聞こえるだろうしな。

だから言い切る前にはつきりと、でも声を低めて一色にだけ聞こえるように言うと、反応した。いつも何考えてるか分からない分こんなふうに分かりやすく反応するとか、おもしれーなこいつ。

「…知ってたんですか」

「ああ、司の奴とか寧々以外の他の奴らはたぶん気付いてない。けどさ、司と話するとき一番優しい顔してるよ、おまえ。それに今回手伝うのだったって満更でもなかっただろ?」

「ええ、これでも抑えてたつもりだったんですけど」

「ばーか、りんどー先輩を甘く見んじやねーよ。分かりにくそうに見えるて分かりやすいぜおまえ?司のことにに関して、だけどな」

「参ったなあ、さすが竜胆先輩ですね」

「へへーん、もつと褒め称えてくれてもいいんだぜ?」

困ったような笑顔を浮かべる一色と得意げに腕を組むあたし：おっと、流されて肝心なこと言うの忘れてた。

「一色、おまえ二年に進級したら絶対十傑に入れよ」

「そんな、まだ月饗祭の途中で、進級試験に受かってすらいのに気が早いですよ。」

「いや、おまえや寧々は確実に進級するってあたしも司も確信してる。まあ十傑については寧々は必ず入るだろうけど、こうやって釘でも刺しておかないときつと誘いがあっても断るだろー、おまえ。「僕は青

春を謳歌したいだけで学校の仕事なんてやっている暇はありません」  
みたいなふうにしる」

「…たしかに、そうですね。正直言って、僕は料理を楽しめればそれでいいので」

「あー、それ司も。あいつの場合は必要に迫られてとかキレてとか、そういうどうしてもって時しか今のところしてないしな」

それでもここぞって時にはちゃんと決めるし、負けなしだから大したもんだよな。さすがあたしの司。そんなことを言ったら目の前の奴や寧々に警戒されるかもしれないけど。

「あたしは別におまえが嫌だっていうなら強制はしない。けどこれからも司の傍にいるんだつたら入っとけよ。今や望まない形だったとしてもあいつは一席だ。今まで以上に付きまとわれることになるし、求められることも多く高くなる。そんなときにタダの一般生徒だったりした日には、きつとおまえは司を守れない。それでも、後悔しないって断言できるか？」

あたしが言い終わる頃にはもう余裕のあるいつもの笑顔はなくて、ただただ言葉を吟味し理解している真剣な顔つきの一色がいた。

「——竜胆先輩は、なぜ僕にこの話を？」

「んー、司やあたしの味方は多い方がいいと思ってさ。特に司のやつ溜め込みやすいから、そんなときに寄りかかれる奴がいてくれると助かるなって。あ、心配しなくてもおまえの恋路の邪魔なんてしないからなー。むしろ応援する!!」

「ありがとうございます」

「おう、どんどん頼れ!!」

その後あたしの料理が来た後も一色と話は続き、結局一色の休憩時間が終わるまで続いた。悪いことしたかなーとほんのちよつと罪悪感があったが、一色本人は司に呼ばれて機嫌よさげに厨房に消えていったので大丈夫だろう。

なあ一色、正直言ってあたしはおまえになら司をやってもいいと思ってるんだよ。



だからこそ強くなれ。それこそ、あいつを守れるくらいに、な。

## 十一皿目 デート×麻婆豆腐×空

月饗祭五日目、最終日の夕方。最後の予約者も帰って、食材も使いきったので初日の約束通り早めに閉めた。

「お疲れ様、一色」

「お疲れ様です。司先輩」

「それじゃあ行こうか」

私たちは着替え終わって店から出た。まだ開いている他の山の手エリアの店の灯りに沿って歩いていく。

「そういえば今日はリボンなんですね」

たしかに学校では基本的に制服指定のネクタイ姿のことが多い。なので慧君にリボンをつけている姿を見せるのはこれが初めてかもしれない。

「ああ、うん。今日はなるべく早く着替え終わりたかったからこっちの方がいいと思って。…似合わない?」

「似合ってますから大丈夫ですよ」

そんな他愛ない会話をしながら歩く。

なんだか視線を感じるなーと思っていると慧君がこっちを見ていることに気が付いた。

「私の顔になにか付いてる?」

「いいえ、何も」

「…ならいいんだけど」

もし本当に変なことになっていたらまずい。二年生に進級してからというものの、ストーカーによる被害は一旦落ち着いたがいつ再発するのか分からないのだ。弱味を見せて今度はそれで脅迫なんてされた日には…。それに私の見た目は目立つので、もし何かあって遠スポなんかに乗せられたりしたら：「新聞の人」とかって後ろ指さされるんだろうか…そんなの嫌だ。

内心そんなふうに考えながらみんなの店を目指した。

「結構回りましたね」

「ん、十傑の所は回りきったしね」

どれも美味しかったなー。元一席と元四席の：誰だっけ？まあいいか。その人たちに怯えられたけど二席の木久知先輩には歓迎されたし、コースのデザートにおまけでもう一品付けてもらおう（そのうえ席が一番眺めのいい特等席と言える所に通された）という破格の待遇でもてなされた。あの人気が弱そうだからあの二人に色々鬱憤とか溜まってたんだろうな…。

大体そんな感じで山の手エリアを抜けて現在いるのは中央エリア。寧々ちゃんが出店しているのはこのエリアであり、ついさつき食べてきたばかりである。寧々ちゃんは私の店を手伝えなかったことに申し訳なさそうにしていたけど、別に気にしなくていいよ。蕎麦美味しいし。寧々ちゃんの店の回転率を下げないためにも名残惜しいが食べ終わってすぐに店を出た。

そこからしばらく歩いていくと——人の行列がまさしく蛇のように長くうねり続いている。

「すごい行列だね」

「ああ、そういえばこの近くには久我くんの店がありましたね」

「……久我、くが…えーと、一色と同じ一年生、だっけ？」

「そうですね、僕たちと一緒に紅葉狩りにいた——この間司先輩と食戟した一年生です。」

「…ああ！あの中華の子か」

やっと顔と名前が一致した。あの子の中華も美味しそうだったなー。審査員が病み付きになって食べてたのを見てたからどんな味なのか気になってたんだよね。

私の忘れっぽさに苦笑している慧君。いやごめんね、人覚えるの苦手なんだよ。

「あれ？でも個人出店者に久我君の名前はなかった気が…」

「中華研で出してるんだから当たり前っしょ」

不思議に思っただけで慧君に聞こうとしたらどこからか声がした。振り返るとそこには——この間食戟した一年生、久我照紀君がいた。

「やあ、久我くん！元氣そうだなによりだよ！」

「うるさい一色！…珍しくお前が誰かと来てると思ったら、まさか女王様のエスコートしてるなんてね。俺もびっくりして思わず飛んできちちゃった☆…でうちになんか用？女王様」

「いや、私たちは通り掛かっただけなんだけど」

「へえ、通り掛かった、ねえ？ふーん…」

うわあ、見るからに敵意剥き出しなんだけどこの子。こういう時なんて言ったらいいんだろう。

「彼女の言ってることは本当のことだよ。僕らは山の手エリアからここまで食べ歩いて来ただけさ。そしたらこの長蛇の列を見掛けて立ち止まったんだ。ね、司先輩」

「うん、そう、なんだけど…この行列って一体…」

「ああこれ？ぜーいん俺特製の麻婆豆腐目当てに並んでる客だよ」

「これ全部…」

「君は作業に戻らなくていいのかい？」

「大丈夫大丈夫。特訓して中華研のほぼ全員俺の麻婆豆腐作れるようにしてあるから、今十人体制で厨房まわしてんの」

「凄い…」

「まあね…で、食べてくの？」

「僕はちよつと食べ歩きで入りそうにないから遠慮しておくよ。司先輩は？」

「私は食べてみたい、かな」

私がそう言った瞬間、久我君の目がキラーンと光った気がした。

「へえ、いいよ。じゃあ女王様は特別に俺が直々に作ってあげる」

「え、ええと…ありがと…？」

いきなりとてつもない笑顔を向けられて困惑気味の私をよそに久我君は背を向けて再び私の方を見た。

「ついてきなよ。俺の麻婆豆腐、食べたいんでしょ？」

言われるがままに従業員用の入り口から席（おそらくVIP）に案内された私たちは麻婆豆腐がやって来るのを待つ。

「はい、おまたせ。」

「わー、あ？え…」

「俺特製麻婆豆腐スペシャルバージョン——召し上がれ〜」  
ちよつと待つて

さつきチラツとみた店内のお客さんの麻婆豆腐と色違うくないかこれ。どうみてもこつちの方が色濃くないかこれ!?豆腐との色の対比がしっかりしているね!目と鼻に沁みるくらい!!消化器官全部爛れそうだね!!

ギギギ、と麻婆豆腐から視線を上げて久我君を見る。

「く、久我君…」

「何してんの?早く食べないとせつかく出来立ての熱々が冷めちゃうよ?」

「け、けどこれ…」

「いいから、俺の奢りなんだしがつつりいきなよ。ほら」

最後の助けと言わんばかりに慧君を見た。でも慧君は苦笑し肩を竦めた——あ、これダメなやつだ。

「辛いなんて一瞬だから。一口いけばもう後は…ね?ほら早く食べてよ。さあさあさあさあ!!」

怖いくらい満面の(真つ黒な)笑みで迫ってくる久我君に押されて覚悟をきめ、蓮華を構える。

「——いただきます。」

香辛料香る深紅の一口を口に入れた瞬間から

「っ——あ、あぁっ」

焼けるような辛さが痛みが——後に来る旨味が身体を駆け抜けて——そのあとの事は覚えていない。

「ひ、うあ——あ…?」

気が付いたのは全て食べ終わって水を飲んだ時。空になった皿を見て自分を褒め称えたくなった。というかよく完食したな自分。

汗と涙の量が尋常じゃなかった。いつの間にかブレザーの上着脱いでるし、調理場でもないのにリボン外しちゃってるし。余程熱かつたんだろう。汗のせいでシャツもぐっしよりで気持ち悪いし。「ごちそうさまでした。」

カラン、と蓮華を皿に置いた。——んだけど周りからの反応がない。どうしたんだらうと顔を上げると、二人は固まっていた。

「い、一色ー?」

「は!?あ、ああうん。食べ終わったんだね」

「うん」

敬語じゃなくて素に戻ってるよ。もうあの赤い怪物は私の胃の中で渦巻いているというのになぜ固まる必要があるんだらうか。

「久我君。麻婆豆腐ありがとう」

「え?!い、いや別に!?!:コホン。こつちもおかげでヒーヒーいつてるあんたを見れたし:まあこれでひとまず八つ当たりはやめておくか?」

「なーんでもなーい。:こないだの食戦では負けたけど、次はそうはいかないから。首洗って待っててよね。来年絶対に十傑入りしてあんたを引きずり降ろしてやるからさ」

「:うん」

ああ、この子は、こんな私さえ目標の一つにしてくれるのか。負けず嫌いで頑固。——強くなるな、この子。

「じゃーね、司<sup>つかつ</sup>さん。今度は十傑の席でね」

「うん、それじゃあまたね。久我君」

こうして私たちは中華研の模擬店を後にした。

模擬店を一通り回って極星寮に着く。ふみ緒さんは快く受け入れてくれて、それどころか元の私の部屋まで貸してくれた。

「私がいた時と全然変わってませんね」

「そりゃあそうだよ、いつ戻ってきてもいいようにしておいてるんだから」

「そうなんですか!?!ありがとうございます、ふみ緒さん」

「ふん、いいよそのぐらい。そのかわり、あんまりハメ外すんじゃないよ!特に一色!あくまでも私はあんたたち二人の祝勝会としてこの部屋を貸したんだ:何かあったらタダじゃおかないよ!」

「心得てますよふみ緒さん。それに僕も同意なしは嫌ですし」

「ああそれと、あんたの癖は出さない方が賢明だろうねえ。少なくとも司に嫌われたくなけりや、大人しくしてるんだよ」

「はい」

「そういえば、ほら司」

ふみ緒さんに差し出されたのは——私が恋しく思っていたブリ大根だった。

「お、覚えててくれたんですか!?!」

「昨日作っておいたのを思い出してね、ま、肴の一つにでもすればいいよ」

「ありがとうございます!!」

「それじゃ私はもう行くけどなるべく静かにしなよ、あんたたち以外にも中等部の寮生が帰ってくるんだからね」

「はい」

そうしてふみ緒さんは扉を閉めて去って行った。

「それじゃ、始めようか」

「そうだね」

運よく残っていた私の店の食材で作った料理を並べていく、大型のランチボックス持ってきといてよかった。全部並べ終わったらそれをつまみながら色々な話をする。昔の事、近況、今の極星寮の事、料理の事——

「ね、一色は——何のために料理を作ってる?」

「え?」

「何でもいいの。誰かのためとか思い出とか、自分のためとか——  
そういうの」

私の雰囲気を感じ取ったのか慧君は真剣な、けれど優しい目で答えてくれた。

「——僕は楽しいのもそうだけど、たった一人のために作り続けている。今も昔もずっとね。」

「そっか、もしかしてそれって好きな人？」

「そうだね……」

なんとなく聞いてみると慧君は少し言い淀んでいるようだった。  
……凶星か。

「ああ、ごめんね。詮索するつもりはなかったんだ」

「ううん。いいんだ。その子はきつと僕のことをそういう対象として見てないから」

「……友達、みたいなの？」

「うーん、もうちよつと近いかな。でもそのせいかな、そういう眼中に入っていないみたいなんだ」

「ふーん……かっこよくなったのに、勿体無い。」

はは、と慧君は力なく笑った。友達より近い……となると私、寧々ちゃん、あとは寮生の子たちだろうか。

まず私はないな。男の人は守ってあげたくなる子の方が好みらしいし、私は確かにこの数年間で前にもまして弱っちくなってしまったが、そういう可愛いらしいものじゃない。周りが気を遣うほどの情緒不安定であり非常に面倒くさい性格だ。それに年上としてもあまり頼りにならないので巷で言う姉さん女房には成り得ない。というかそもそも慧君が「一色家の落ちこぼれ」とか言われる一端を担っているのはおそらく（というかほぼ確実に）創作料理を教えた私である。

次に寧々ちゃん。よく一緒にいるし私より可能性がある。ただなんていうか、幼馴染とか友達とかそういう雰囲気しか漂ってこないんだよね。いや真面目な寧々ちゃんをからかう慧君が寧々ちゃんにキレられるというケンカツプルなんていう可能性もあるか？あ、でも一時期その噂が流れて不愉快そうに同級生を冷徹とも言える態度で論破していた寧々ちゃんを見かけたから無しか。

そういえばこの間、私の店でリンドウと楽しそうに話してたな。リンドウも猫みたいなのらしくらりと食えない性格をしてるのでニコニコしている者同士で案外うまくいくのかもしれない。



次に寮生の子たち。って言ってもその子たちどころか慧君が入寮する前に極星寮から退寮してしまっているので詳しくは知らないのだ。慧君によればみんな努力家でいい子らしい。でも口ぶりからして普通にお兄さんのな先輩として接してる感じなんだよね。誰かの話をより長く詳しく話してるわけじゃなかったし。

とりあえず候補としてはリンドウと寮生かな。まあ慧君は校内では料理の腕とかルックスとかで結構有名だからファンの子は結構いるだろうし…考えても迷宮入りしそうだな。というかこんなほぼ完璧な慧君からの好意に気付かない子って一体…

「一色はいい子なのね」

「…いい子？僕が？」

「うん、昔からずーつといい子。周りにどう見えてるかなんて知らないけど、少なくとも私にとっては大切な人には変わりないよ」

「…そっか」

「そうだよ」

よしよしと頭を撫でる。年頃の男女のくせに距離が近すぎる、と言われても仕方がない。私と慧君なのだから。

頭は昔より大きくなった気がするけど触り心地は昔と変わらさずふわふわのクセっ毛のくせにツヤツヤのサラサラである。羨ましい。そのアホ毛引き千切りたい。

「ねえ、でもなんで『何のために料理をするのか』なんて聞くんだい？」

「んー…今なんていうかスランプに近い状態だね。ちよつと、聞きたくなつて…あ、別にストーリーとかに遭つてるわけじゃないよ？ただ…」

ただ

「——『美味しい』の言葉が、薄っぺらく感じちゃうだけ」

「！」

慧君が息を？む。私はそんな彼と視線を合わせたくなくて料理に視線を落としたまま続ける。

「この間私の店に来てた美食家の——なんて言ったっけ。…そうそうウイリアムス・アスクール氏が来てたんだ。あの人はこの間十傑の仕

事で料理を振舞った人の一人だね。『十傑の第一席の私の料理は美味しい』つて。でも、美食家つて言う割に何も感想をくれないの。みんなそんな感じ。それでもゆっくり味わって食べてくれたらよかったんだけど、よく噛みもしないで味わわないまますぐに次を要求するの。そしたらさ、もう料理に拘ることもより美味しいレシピを開発することも、なんだか意味のない空しいものに思えてきちゃって、ね——ダメね、私」

それを料理を楽しく真剣に取り組む慧君に言ってしまうあたりも、人としてどうなんだろう。情けないな。

「でも、僕は瑛璃ちゃんの料理、好きだよ」

「え？」

「竜胆先輩にも聞いてごらん。きっと同じことをいうと思うから」  
「……そっか」

その時、窓の方が光った、とそれにつられるようにして轟音が響いた。私と慧君は窓を開けて外を見上げる。そこには——夜空に咲く大輪の花火がいくつも花開く幻想的な景色があった。

「今年は豪勢だね。誰かのリクエストかな？」

隣で言う慧君に目を向ける。誰かの：『たった一人のために作る』。今の私にそんな相手はいないけど：いつか、いつかそんな人が現れたその時は、私もこのジレンマから抜け出せるのだろうか——。

「今日はありがとう、一色」

この明るい夜空を見上げながら、私たちの今年の月饗祭最終日は過ぎていくのだった。

十二皿目 不審者には気をつけましょう。く編入試験  
つてなんだつけ？く

一色とリンドウのおかげでこの頃気分的に楽に料理できるようになった。相手の好みに合わせて料理するのってこんなに楽しかったんだ。今更気付いた。レシピ開発も苦にならないし、自分のスタイルも両立させながらできるので相手の反応とか見るのもおもしろい。

今のところ順風満帆と言っても過言ではない。もう私何も怖くない!!

…はい、思いつきりフラグですねーわかります。

「司瑛璃さん。君が皿に込めた熱量は——会場に居た豚共の何奴にも届いてなかったよ」

▶目の前に黒服の男が現れた！

ここ私の控え室だよな？リンドウがいるのは分かるけどなんで年齢不詳っぽそうな胡散臭げな人がいるんだ？

リンドウは警戒しているし、私も突然の事でどうしたらいいかわからない。コマンドは…

?にげる

おびえる

すたんがん

みなかったことにする

碌なのがない。え、すたんがんってスタンガン？いやたしかに持ち歩いてるけど。でもまだ話しかけられただけで何もされてないからこの場合私が悪くなりそうだし…。そんな私の葛藤をよそにえーと、便宜上黒ずくめXは話を続けてくる。

「今日君が作ったメインの皿——自分では100点満点だと思っていない…そうだね？」

え、なに当たり前の事言ってるのこの人。

「はあ…まあそうですね。現状に満足しては先に進めませんか」

気のない返事になってしまったのは仕方がないと思う。

「：誰かと思えばあんた、月饗祭の時司の店にいた奴じゃねーか」

「おや、気付いていたのか」

「当り前だろー。司のことずっと見てたくせして」

「え?!」

サアつと血の気が引いていく。え、なに。この人もストーカーなの!? ついに学生以外にもストーカーが流行り出したの!?

「どこのどなたかぞんじあげませんが、きょうのところはおひきとりねがいます。」

「そうだそうだー!!」

「今日は顔を見に來ただけだったしね、わかった。では失礼するよ」

そう言つてXは去つて行つた。全身黒ずくめだったし目は死んでたし、まさに死神・・・いや不審者だった。これからあんな不審者にまで命を狙われるのかと思うと急激に体調が悪化していく。

「うえプ：り、リンドー：」

「うお!? おい司だいいじよーぶか!? 真つ青だぞ!」

「気持ち悪い：おなかいたい：は、吐く：っ」

「わー!! 待て待て待て!!」

そんなこんなで、私と黒ずくめX——薙切薊との邂逅は最悪の形で終わったのだった。

\*\*\*\*\*

あれ以来、私は学園の外に出る時は必ず小型のスタンガンか肉叩きを装備するようになった（必然的に肉叩きの素振りが日課の一つになった）。そしてそれらしい人物を見つけては隠れて撒くので、今のところあの不審者とのエンカウントはゼロである。

しかし——

「受験生全員逃走つて：」

私は今、十傑の仕事の一環として今年の編入試験の試験官をしている。

・・・はずだった。

遠月から遠い地方の方でも受けられるようにしてはどうかと評議会で提案し、日にちをずらして各地の試験会場にそれぞれ十傑や名のある講師陣を配置したのだが…結局合格者は現れなかった。

人は集まるのだが私が試験官として入室した途端に目を白黒させて全員逃げるのだ。十傑に入ってすぐに提案したことなのでうまくこれこれ二回目だ。実食を楽しみにして朝ご飯をカロリーメイトで賄い、昼頃の試験に臨んだので絶賛空腹中である。今回の試験会場が学園の調理棟で助かった。物も揃ってるし、人によっては使うことになるということで最新の調理器具（遠心分離機などの機材含む）も設置したので調理に困ることはない。食材も余ったら好きにしていいと許可をもらっているので大丈夫だろう。

「（無難にポワレにでもしようかな）」

せっかくなので旬の食材が使いたい——あ、ヒメダイあった！ラツキー。

まずはヒメダイに塩と胡椒をふって、フライパンにサラダ油を熱してさっきのヒメダイを皮目から中火で焼いて——

『不味いわよっ』

この聞き慣れた声は———そういえば隣の調理室でも試験やっていたんだっけ。たしか試験官は———薙切えりなだったはずだ。にしてもあの子がこんな感情的な声を出すなんて何があったんだろう？ポワレは二人分追加して出来上がったら持って行ってみようかな。

\*\*\*\*\*

焼きあがって盛り付けし、隣の調理室まで運んでいく。するとやはりそこにはこの調理室の試験官であった薙切えりなとその秘書・新戸緋沙子がいた。…なんかえりなは調理台に突っ伏して震えてるし、新戸さんはそれをなだめようとしてるように見える。

「失礼します。」

「！司瑛璃一席」

新戸さんが私に気付くとえりなもこちらに気付いた。

「っお姉様!!」

「私のところは私が自己紹介と試験内容話終わったらすぐにみんない

なくなつてね。何も食べられなかつたから手の付いてない食材でポワレ作つただけけど…食べる？」

「是非！」

「新戸さんも」

「わ、私の分まで用意してくださつたんですか!？」

「うん。はい、召し上がれ」

「いただきます」と二人ともポワレを口に入れる。私もそれに続いて食べた。うん、我ながら美味しくできた。二人とも感極まつたように味わつてくれているしよしとしよう。

「ごちそうさまでした、お姉様。今日の品も美味しかったです。」

「ごちそうさまでした。」

「二人とも味わつてくれて何より。さつき声が聞こえたから何事かと思つたけど…多めに作つて正解だつたね」

私が食べ終わった皿を下げながら言うと二人は固まり、それからえりなの方はわなわなと震え出した。

「き、聞かれてた…?よりによつてお姉様に…つあの男!!」

「ね、ねえ。なんだかえりなが燃えているように見えるんだけど…本当に何があつたの?」

「そ、それが実は先程の編入試験で唯一受験した者がえりな様に対し無作法を働きました…」

なるほど、だからか。というかあのえりなに対して料理を出せるなんて相当の実力を持つているのかそれともただの無鉄砲な子なのか…今年こそ何事もないまま終わりたいものだけだ。

「無理だろうなあ…」

怒り震えるえりなを見ながら私は呟くのだつた。

+++++

お姉様と緋沙子と別れ、私は誰もいない廊下を踏みしめ歩く。

何よ!何よ!!何よ!!!

思い浮かぶのはあの赤毛のへらへらしたイラつく顔の男。

「あんな偉そうな物言い…この薙切えりなに対して!」

そのうえあの不祥事の一部始終をよりによって憧れのお姉様司瑛璃に聞かれてしまっていたなんて…

許せない！

代わりに壁を殴った手の痛みにしやがみ込む。

幸平創真：君のような人間は遠月学園には必要ありません!!

そして私は電話の受話器を取り――

「もしもしえりなです。おじい様に――学園総帥につないで下さい。」

「本日の編入試験。合格者は――0名です。」

## 十三皿目 入学式からライフゼロ

編入試験からひと月と少し経った四月某日。桜咲き乱れる遠月学園高等部始業式。

『在校生代表——十傑評議会第一席・司瑛璃』  
「はい」

名前を呼ばれて今日のために用意した原稿を持ち壇上へ上がる。

「本日はお日柄もよく——」

「おい見ろ、第一席の司瑛璃だぞ！」

「うはー、今日も美しい〜」

「いつ見ても綺麗な銀髪、羨ましいわ」

「あんな女神みたいな人が彼女だったらなく」

「バツカ、あの完璧超人美女が振り向くわけないだろ」

「あー：そういうえば今年の編入試験でも担当した会場の受験生全員逃げ出したとか」

「そーそー俺たちにとつちや雲の上の存在だよ」

と一般生徒たちが話す中、少し離れた十傑専用席では——

「：なんてこと言われてんのも知らずに内心『噛まずに詰まらずにく』  
とか思ってたんだぜ？おつかしいだろー？」

「まあでもそれが司さんだからって言ったたらそれまでだけどね〜」

「：司先輩の話が終わったんですから静かにして下さい。」

「はあ？もう総帥の話も司さんの話も終わってあとは閉式するだけなのに。これだから真面目おさげは」

「あなたには言っていない。うるさいわよ久我」

「何ピリピリしてんのー？食あたりー？あ、それとも生理ー？」

「消えろ」

「ぎーんねーんでーしたー消えませーん！ていうか司さんまだー？」

「もうそろそろだと思っよ——ほら」



私はやつとの思いで話し切って檀上から降りると十傑専用席へ向かう。私が席に着くと同時に閉式の言葉により無事始業式は終わった。

「や、やつと終わった…」

「残念だがまだ終わっていないぞ」

「え」

「…始業式が終わっても、ももたちはこのまま入学式に出席する」

「そ、そんなら、今日はゆつくりできると思っただのに…」

「はは♪ま、諦めろよ司。それにほら、今日は薙切ちゃんの晴れ舞台だぜ?」

「!そ、そっか。ならもう少し頑張る」

「その意気その意気。それに入學式は総帥と薙切ちゃんと——編入生以外しゃべらなくていいんだから」

リンドウの言葉に内心首を傾げた。編入生?

「え?——編入生って誰も合格者出なかったって聞いたけど」

「それが一人だけ出たらしいんだよ。あたしもさつき聞いたばかりで詳しくは知らねーんだけどな」

「ふうん…」

うちの学校に金持ちはごろごろいるので寄付金で入学出来るほど甘くないし、大体高等部の本格的なふるい落としを知ってて高等部からの編入にしたのだろうか?下手すると入ってすぐ退学とか経歴が中卒とかになりかねないのに。凄いな。

在校生が全員去った後、中等部からの内部進学者たちがやってきた。

「今年も多いね」

「ああ、ざつと980人あたりいるらしい」

「去年より多いんだ」

「この中の一体何人が卒業するんだろう」

「んーまあ、何事もなければ十傑はほぼ確定だろ。他はそいつ次第」  
「身も蓋もないな」

「だってよー斎藤、現にあたしらの学年はもう進級試験が終わった時点で三十人いるかどうかじゃんか。なー司」

「たしかに授業と一緒に受ける人ほとんどいなくなったような気がする。でも私、大体リンドウと組んでるし、なんか他の人と組もうとするとみんな私のこと避けるから…あんまり印象にないな」

「だめだこりゃ…と、そろそろはじまるぞー」

リンドウの声に姿勢を正し椅子に座り直す。

そして入学式は例年通り何事もなく進んで行った——  
はずだった。

『高等部から編入する生徒を1名紹介します』

アナウンスとともに壇上に上がった一人の赤毛の男子生徒…  
で遠月の制服きてないんだろう？

「やー…なんか高い所からすいませんねーへへ…所信表明でしたっけ？まいったなーやんなきやダメすかー？だ壇上でとかこそばゆいっすわー」

『いいからさつきとしなさいっ』

司会の先生がイラついて急かし始めた。あ、あれーなんか、なんでだろう嫌な予感がするなー？なんて…

「じゃー手短に。一言二言だけ…」

「えっと…幸平創真っていいです。この学園のことは正直——踏み台としか思っていないです。思いがけず編入することになったんですけど、客の前に立つたことでもない連中に負けるつもりは無いっす。入ったからにはてっぺん獲るんで」

「3年間よろしくお願いまーす」と壇上から降りた編入生は何事もなかったかのように去っていった。

「なっはっはっはっは！おもしろいこというなあ今年の編入生!!」  
「なにあれ」

「あ、あんな大勢の前で宣戦布告なんて、すごいなあ…私なんか…あ、でも今ので食戟増えるのかな…そしたら今よりもっと忙しくなるん

「じゃ…つど、どうしようっ」

「どうしようも何もないだろー、もう言い終わったんだし。そんじゃ、入学式も無事に楽しく終わったし帰ろーぜ」

「た、楽しくないよ〜」

みんなそれぞれ散らばって行く中、私はこれからのことに顔面蒼白だ。

「過ぎたことだろー、つーわけで今日は進級祝いでこととで付き合えよ司。木久知先輩に開店祝いで買物に付き合っつて銀食器プレゼントしたの知ってんだからなー」

「ふあ?!なぜそれを!?!」

「ふっふっふ、あたしの情報網舐めんなよー」

ぐえっ、と襟を掴まれてカエルが潰れたような情けない声を出しつっつりンドウに引き摺られていく。

「寧々も一緒来いよ。今日は司の奢りだぜ!…あ、そーだ。一色はどーする?」

「僕は寮に新しい子が入るらしいので、その歓迎会がありますから今日は遠慮します」

「ふーん、そっかー。じゃ、またなー」

「はー」

こうして私は慧君に見送られながらリンドウと寧々ちゃんと行き付けの料亭に行くことになったのだった(十傑待遇で急遽予約を取り付け懐石を味わい、なんとなく悪徳官僚や悪代官の気分になってしまったのは私だけだろうか…)。

## 十四皿目 身近な謎く同時刻の張本人く

極星寮に入ることになり、田所や他の寮生たちと歓迎パーティーで盛り上がると同時にこの学園での頂点にいる「十傑」の存在。そして歓迎パーティーを開いてくれた一色先輩がその七席だという事を知った。

『その学園で生き残れないようじゃあ、俺を越えるなんて笑い話だな』  
——親父を越えるためにもこの学園でてっぺんを取る。というわけで

「勝負だ！一色先輩!!」

と勝負を吹っ掛けてみたものの、見事に断られた。なんでも十傑に挑む場合の賭けの内容としては「俺の退学」を賭けても「食戟」が成立しないらしい。十傑ってそんなにすげーもんなのか…。

ふみ緒さん曰くこの極星寮は毎年のように何人もの十傑を輩出してきた黄金時代があったらしい。

「それに比べてあんた達の情けない事!」

「ああもう聞き飽きたっての!」

「一人はいるんだから我慢しろよふみ緒さん」

「それに僕だけではありませんよ、僕の前にもいたじゃないですか」

「…ああ、あの子かい。」

一色先輩の言葉にふみ緒さんが反応する。

「あの子?」

「?なんだ、田所たちも知らねーのか?」

「う、うん。私たちが寮に入った時には一色先輩しか寮生はいなかったから…」

『あの子』って誰ですか?卒業生?」

「ふふ、そのうち分かるよ」

「教えてくれてもいいじゃんつ、一色先輩とふみ緒さんのケチー!!」

結局その時はいくら聞いても答えてもらえなかった。

「つくしゅ！」

「おいどーした司、風邪かー？」

「わかんない…」

「…噂されてたりして」

「司だからなー」

「こ、怖いこといわないでよ」

風邪も噂も困るがリンドウともものせいで後者の方が怖くなってしまった。まだ書類整理の途中で結構な量があるのに夕方とか夜までかかったらちゃん自分のマンションにたどり着けるんだろうか。また宿直室のお世話になるわけにいかないだろうし。えりなには敷地内にある雑切邸に出入りしてもいいって言われてるけど、まさか帰り道が怖いからなんて理由を言うわけにもいかない。

「…そういえばそろそろ一年は合宿か」

「あ、話逸らした」

「逸らしたな」

「もういいでしょ!!…この合宿での成績は秋の選抜出場者選考の要素のひとつなんだから他人事じゃないしね。もしぱつとしないような生徒を出したら審査員の人たちからブーイングが来るのは最終的に絞った十傑私たちなんだから」

「え、なに？今年の審査員そんなきびしい人になんの？」

「なるかどうかはわからないけど…叡山君が声かけた人のリストの中にあの千俵姉妹がいたから」

「あーなるほど…」

察したのかリンドウと声には出さないがももめんどくさそうにしている。

「…でもお題が「カレー」にでもならなきゃ来ないと思う」

「ももーそれはフラグっていうんだぜ」

「リンドウも不吉なこと言うのはやめて」

「しっかし選抜かーまた月天の間でやんのかー」

「変更が無ければそうなる」

「やったなーもも、また気合の入った司の肖像画見れるぞー」

「!?わ、私だって知らなかったんだよ、あんなでかでかと載せられるなんて!」

久我と食戟する前に先輩たちに勝つて一席になったからバタバタしてて月天の間の話を聞いてなかった。一年の選抜の時は緊張して周り見てるどころじゃなかったし、十傑の先輩たちと食戟したときも食戟のことしか頭になかったからなあ…

『あのー司一席、月天の間の件なんです…』

『すみません、今手が離せなくて』

『分かりました。では写真で代用しておきますね——絵の方は一年生との食戟後に伺います』

『はい』↑聞いてない

一週間後

『約束の通り伺わせていただきました♪』

『え、は、はあ（約束ってなんだっけ?）』

そして状況が飲み込めないまま椅子に座らされ巨大なキャンバスに描かれていくのだった…

「やっぱりやだ!会場の仕事じゃなくて裏方になる!!」

「おいおい司、もし千俵姉妹が来た時だれが相手すんだよ。来てくれたとしても姉の方なんて確実におまえ目当てだろーが」

「そ、そこはきつと叡山君と一色がなんとかしてくれるよ!それにほら、妹のおりえさんは一色を付けておけば、ね!」

「…そんなうまくいくかな」

「……それは聞かないで、もも」

そして、夏が来る——

## 十五皿目 最終選考

地獄の宿泊研修が終わり学園は運営の関係上連休になる——のだが

「選抜、かあ…」

私たち十傑は休日返上で秋の選抜の最終選考のためにおなじみのラウンドテーブルで書類を広げている。一般生徒にとってはゴールデンウィークや夏休みのように心躍る連休だろうが高等部に入ってから私のにとってはまったく喜べない連休である。連休は毎回こうして十傑の仕事に追われて満喫できた試しがない。え？一年の時はまだ十傑入りしてないだろうって？うん。でもさその時ってまだストーカー被害に遭ってた時期なんだよね…あれ？そう考えると碌な連休を送ってないんじゃないのか私。あ、あれー？去年の夏休みが初めてのちゃんとした長期休暇だったのかもしれないな…：学生生活ツテイツタイナンナンダロウネー。

「二色、えりな、叡山君は？」

「薙切ちゃんはそろそろ来るんじゃないの？」

「一色と叡山ももうじきだと思います。」

「じゃ…あともう少しか」

全員揃うのを待つ。待ってる間は暇なので出場者予定者の顔に目を通しておくことにした。

…！

「(編入生の子、リストに入ってる)」

えりなどの間にある因縁、入学式の時の所信表明という名の宣戦布告——ただ腕に自信があるだけの子に見えたけど…

「(食戟はえりなの派閥だった水戸郁魅との井研代理、合宿中のタクミ・アルディーニとの課題。それぞれ勝利と…預かり？引き分けていうこと?)」

水戸郁魅にタクミ・アルディーニも高等部に入る前からある程度有名だった有望株だ。その二人と入学からこれまでの短期間でぶつかり、そのうえ合宿での課題を高評価でクリアしビュッフエでも土壇場

で200食達成。風の噂では元一席の四宮シェフと食戟して引き分けたとか。こんな子が生き残っているなんて…

「これは評価を改めないといけないな」

名前は…幸平創真。ゆきひら、そうま…幸平、ね。——覚えた。「?何ニヤついてんだよ司」

リンドウに指摘されて自分の口角が上がっていることに気付く。おっとこれじゃあ危ない人になってしまう。

「なんでもないよ」

その後も一色たちがやって来るまでリンドウに質問攻めされたが「なんでもない」で押し通した。

そして始まった秋の選抜出場者最終選考。それも終わりに近い。

「あと残すは一人、今年の編入生——幸平創真について」

「私は反対です!」

私が議題に出すとほぼ同時にえりなが発言する。

「この生徒の選抜入り…審議をやり直すべきです!!」

「しかし…その生徒については先日可決を」

「いいえ!彼の素行には問題がありますわ!由緒ある美食の祭典にふさわしいとは言えません!!」

因縁のことがあるからかえりなはいつもより感情的になりながら洩る。しかしそれは慧君によって論された。

「雑切君、料理に対する君の意見は常に正しい…なのに何故か創真くんの事になると、どうも非論理的に感じるね。——彼と何かあったのかな、例えば…個人的に?」

「……つ別に…ただ私はこの男が不適格だと…」

圧されていたえりなも負けじと慧君に対して反撃する。

「一色さん…貴方こそ、ご自分の寮の後輩を優遇なさってるんじゃないやありません事?」

「ふふ…そんな事はないさ」



火花が散り始めてるしここは私が出るべきだろうか…と思っていたら以外なところから助け船が出た。

「幸平創真…面白そうな野郎じゃねえか——俺は推すぜ？」

第九席の叡山枝津也君。珍しいな…

「……！」

「確かに学園での実績は少ねえ、遠月に入って日が浅いようだしな。けど合宿では土壇場の機転で200食達成…初日の課題でも高評価を得てる。こういう型破りな素材こそ、祭典を盛り上げてくれるんじゃないかねえか？——何が不満なのか俺には分からねえなあ」

「……っ」

ここまで言われるとさすがのえりなも黙った。でも…なんだろう。いつもより饒舌なせいかわ違和感があるのだ。口では認めているように言っているけど本心は別にある、みたいなの。…いや、邪推か。

「——よし。ではこれで最終決定としよう」

評議会による最終選考は終わった。

気になるなあ——幸平創真。

## 十六皿目 選抜の水面下

夏休み明け——秋の選抜会場。

「ほ、本当に出なくてよろしいのですか？お姉様」

「うん。今回は裏方に行こうと思ってね、後でみんなに気付かれない程度に十傑席回るから」

「は、はい！では後ほど」

意気込むえりなの頭をよしよしと撫でてAブロック会場を後にする。たしか組み合わせでは幸平はAブロックのはずなのでBブロック会場に行った後にまた戻ってこよう。…たしかBブロックは、慧君たちだったか。

「準備はAもBも大丈夫そうね…あ、一色！」

慧君を見付けたので声をかけると気付いたのかニコニコいつもの笑顔でやって来る。

「司先輩」

「最終確認しに来ただけ大丈夫そうだね」

「ええ、もちろん」

「Bブロックといえばみんな雑切アリスか新戸さんだけど一色はどう思う？」

「…参考にならないかもしれませんが？」

「一色の目利きは確かだからその心配はしてないよ」

「そうですか…なら」

そう言つて慧君が指差した名前は吉野悠姫と田所恵——  
どちらも同じ極星寮の寮生か。

「吉野悠姫は肉、特に禽獣の扱いに長けた子だったね。田所恵は——  
あの幸平創真のペアで乾シェフの課題で見事なサポート能力を発揮、そのうえ四宮シェフとの食戟の噂が本当なら幸平創真がサポートに入り彼女がメインで引き分けたって聞いている。合宿だって乗り切った。でもなんでそんな子が高等部に上がるまで無名だったのか、私はそれが不思議でならないよ」

「ふふ、田所ちゃんはあがり症でプレッシャーに少し弱い所がありますから」

「…もしかして今までずっと、実力を発揮できずにいたってこと？」  
「どうも人の目や評価を気にしてしまうようなんですよ。遠月の学生や講師陣は高圧的な人物が多いこともあって萎縮してしまうんです。」

けど、その殻はきつとそろそろ破れる。完全に外界へ出るのは自身、けれどそのきっかけになる穴を開けたのは――

「幸平創真」

「？司先輩」

「たしか彼も一色と同じ極星寮だったっけ」

「はい」

「そう、そっか――ふふ」

彼はその性格からか、人の潜在能力を引き出すことにも長けているらしい。いいなあ、幸平。

連休は潰れるし、プレッシャーとかで選抜が面倒くさいと思っただけど――前言撤回。

裏方に回りはしたけど、今年の選抜もちゃんと見ておこう。

――  
楽しみだなあ。

「10時58分――そろそろか」

タイムテーブルや出場者の名簿などの書類を見つつA会場に目をやる。皆独自に考えたカラーのベースともいえるスパイスを合わせている。

「…あれ？」

審査員席が一脚だけ空いてる…？どういうことだろう。開始は11時だからもう審査員は出揃ってるはずんだけど…今回の審査員のリストを探し人物たちに当てはめる。港坂巻人、香田茂之進――  
千俵なつめ！

じゃああの空いている席はなつめさんの席か。

「お題が『カレー料理』になった時点で予感はしてたけど…これは一年生にはちよつと難関かな？ま、でも…」

こんなところで終わるような子じゃあないよね。

私は気を取り直して本格的な調理に移行する前にある程度仕事を片付けようと書類に目を通した。

\*\*\*

「それで、あの子はどこ？第一席なんだからこの運営に関わってないわけないでしょ？」

「…司一席なら今回は裏方に回ってますからここにはいませんよ」

「!?なんですって!!…せつかくあの子に会えるチャンスだったのにな」

千俵なつめは悔しそうにショックを受けた後思い切り叡山を睨むが叡山本人のどこ吹く風のような態度を見て諦める。

「まったく…叡山クンの口車に乗せられて来たけど…しよせん学生が本当に私を楽しませてくれるのかしら」

「けつ、金だけよこせばいいのによ」

「何か言ったかしら？」

「いいえ？心ゆくまで秋の選抜をお楽しみ下さい。なつめ様」

この時点で既に心が折れかけている生徒もいるが二人は気にも止めずに話を進めていく。

「一言」

「ハイハイ」

『——いいこと？この国のカレー産業は戦後拡大の一途を辿り…今やカレーは国民食として完全に成熟した！この現状に…私は退屈しています』

『求めているの！経営者としてカレーを愛する者として日本のカレーの未来を切り開く発想を——』

『さ、みせてちょうだい？私をゾクゾクさせてくれるカレー料理…』

——秋の選抜の火蓋が切って落とされた。

十七皿目 一度あることは二度あつて、二度あることは三度ある

私にとって地獄のようだった秋の選抜の優勝は葉山アキラ。黒木場リヨウ、幸平創真は準優勝だった。あれは甲乙付け難いもの揃いだっただけからな…

「想い、ね…」

きつと葉山はあの教授のために戦っていたんだろう。だからあそこまでたどり着けたのだ。

『——僕は楽しいのもそうだけど、たった一人のために作り続ける。今も昔もずっとね。』

あの時に聞いた一色の声を思い出す。一色と同じように、たった一人の想い人のために作り上げた必殺料理スベシヤリテになり得るもの——  
「私もまだまだね」

溜息を吐いて自分がないものを確認し欲しがらる。と言ってもそんな簡単に手に入るわけもないので今回はそれについて考えるのをやめた。そして別の思考に移る。

「にしても、幸平のおじや美味しそうだったな…頼んだら作ってくれないかな？」

まあ一方的に知ってるだけで直接会ったことはないんだけど。——まあいいか、どうせ近いうちに会うんだし。

燃えるような赤毛の誰よりも優しく強靱な強さを持ったあの子も思い浮かべた。その前に「実地研修」…スタジエールがあるけどきつと大丈夫でしょう。

「早く会いたいな」

例年の憂鬱な紅葉狩り会が今年は楽しくなりそうだ。…秋の選抜でのことについても色々言いたいことはあるけど。

スタジエを終えて一年生は504名のうち210名が脱落し、294名の生徒が生き残った。その生き残りの中には幸平創真や本選出

場者も残っている。

「ふふ」

「?おまえが機嫌いいなんてめずらしいな司」

「そう見える?」

「おう、この時期のおまえって紅葉狩り会の事とかで凄い具合悪そうにしてんのに…なんか悪いものでも食べたか?」

「…今年の一年生に興味のある子がいる。それだけだよ」

リンドウは口をあんぐりと開けて驚いていたけど…たぶん直接会えば気に入るだろう。

そして今年も毎年恒例の紅葉狩り会の日がやってきた。

「…ねえなんか司さんの機嫌凄くいいようにみえるんだけど気のせい?」

「あー、なんか気になる一年生が来るんだってよ」

「え、りんどー先輩それマジ?!」

「マジマジ。だって司から直接聞いたもん」

リンドウや久我がゴソゴソと話し込む中、他のみんなは無言である。あれ?いつもはもつと賑やかなはずなのになんでだろう?」

「——それじゃあ、行こうか」

太鼓の音と共に私たちは歩き出した。

「遠月十傑のおなあゝりいーっ!!」

自分の席にそれぞれ着く。

一年生の視線が刺さる。結構好戦的な子もいるから、もしかしたら去年の久我みたいに食戟の申し込みがあるかもしれない。

「ねえねえねえあのさあー!」

「?」

「今日はこれで解散にしね?それで来年は廃止にしよっぜこの会!」

久我：初っ端から先制攻撃とか：田所さんとか引いてるよ

「心底マジめんどくせえし意味なくない!? って思わね? どうかなあ皆? あ、そこのおさげちゃん! ねえ、どうどうどう?」

「へえああ!? あ、えつとあのそのお」

「総帥からの直々のお達しなのよ。参加しない訳にはいかないわ：廃止なんてもつての外だし」

ナイス寧々ちゃん! 「こつちのおさげには聞いてないんだけど!? 勝手に話に入らないでくれる。俺が下級生と話してるんだからあ」ノオオオーせつかくのフオローをぶち壊すな久我ア!!

「本当にうるさい…」

「なあんかいつにも増してイラついてんね。生理いー?」

「しね。：いい加減にしないと司先輩に嫌われるわよ」

「!! べ、別に司さんのことなんてどうも思っていないしー?」

言いながらチラツとこつちを見てくる久我。：そっか仲間だと思ってたのは私だけだったのか：ならもう目を合わせるのも、ね。

プイつと目を逸らした。バイバイ久我：これからもがんばる…

「う、うわああああ!? ごめん司さん!! 嘘だから! 冗談だから! お願い嫌いにならないでー!!」

変わり身早!! まあいいか大人しくなったし…

「あのー。俺今すぐ十傑に入りたんですけどお、誰か俺と食戟してくれる先輩いないっすかねー?」

—— ああ、やっぱり君か。 幸平

「わた「受け（ないわ（ねえよ）」…」

さ、遮られたあー?! なんで!? どうして!? 私の発言の自由は!?

「やーごめんねー。俺たちこの時期ってちよう忙しいわけよ、だから君らを相手にしてる余裕とかないからさー来年にしてくれるうー?」

あ、再来年でもいいよー、尤も俺らないけど♪」

「：先輩も、十傑としての自覚を持ってください」

「…はこ」

去年は何も言わなかったのに：寧々ちゃんと立場が逆転してきているような：まあ他にも言いたいことはあるから言うけどさ。飲んで

でいた玉露を置くと幸平たちの方を見る。

「……幸平創真」

「！」

「……そしてタクミ・アルディーニ」

「……!？」

「あ、あと美作昴も」

「……は？」

「秋の選抜で——食戟なんかしないでほしかったよ……」

「……へ？」

私がああの時の忙しさを思い出して溜息を吐く中この三人に自覚はないようだ……はあ……

「こつちは選抜が悪く終わるよう苦心してたのにまさかの食戟2連発って……諸々の手続きで奔走してタイムテーブルとにらめっこしてさ……本気で肝を冷やしたよ」

「だから、司先輩は会場の仕事をやればよかったのに。裏方は僕らに任せて」

「わ、私は人前に入るタイプじゃないんだって……!そういうのは一色たちに任せるって言ったでしょ!大体、まさか審査員にあのなつめさんとおりえさんだなんて思ってなかったし。なつめさんはいい人だけど押しが強くて断りにくいんだよ……」

「いい人……?あの千俵なつめが……?」

叡山君なんでそんな信じられないみたいな顔してるの?いい人だよ二人とも。特になつめさん。リクルート熱が半端ないけど。

「はあ……参るよね。私なんかが一席だなんて……いろんな責任や重圧ものしかかかってくるし気が重いよ正直……」

「先輩もう少ししつかりして下さい」

「ごめん寧々……でも一席がここまでなんて思ってなかったんだよ……」

本当に……あの一席と四席の先輩たちに仕事を押し付けられていた三席時代よりは仕事量が減ったけど、その分人前に出ることが増えたからなあ……



「最近ため息が増えたなって自分でも思うし…」

「げ、元気出してくださいお姉様！お姉様は一席としての責務を十二分に全うしていますわ!!」

「お姉様？」

えりなも慰めてくれる。いい子を後輩に持ったよねほんと。一年生が状況を飲み込めてないようだけど…ごめんねこんな先輩で…

「ほーら司、しっかりしろって!!」

「あいた!?!り、リンドウ…」

あれ？デジャヴって思うくらい一年の時と同じように綺麗に背中ヒットするリンドウの檄で現実に戻った。

「…そうだね、ありがと」

「はは、いーって!!」

みんなのおかげで落ち着いたのでそのまま会を続行する。

「そういえば司、声かけなくていいの？」

「ああ、そうだね。危うく忘れるところだった。」

私は姿勢を直し向き直る。

「会いたかったよ——幸平創真」

ガタツ ピシツ バリン ガシャン！ ボタボタ

——その時この空間だけ時間が凍り付いた。

十傑のみんなの席から聞こえる破壊音や緑茶をこぼす音は幻聴だろう。そう思って話を続ける。

「え？」

「最初はえりなどの事や入学式の時の所信表明の時の事もあって目立つ印象しかなかったんだけど…これまでの食戟や合宿での評価、ビュッフェ課題の機転を利かせた200食達成に非公式の食戟。秋の選抜、そしてスタジエール…君は本当に毎回驚かせてくれる。いい意味でね。だから書類とか秋の選抜の時のような高みの見物じゃないくて、こうして直接話してみたかったんだ。」

「いやー、そんなに評価してもらえるなんて光栄っすわー」

田所さんは状況に付いていけずオロオロしているが、その隣にいる当の本人の幸平は照れたように頭を掻きながら笑っている。

「あ、そうだ！なら司先輩がしてくれませんか？——俺と食戟」

「ええっ?!」

「はあ!？」

十傑と一年生両方から声上がる。

「む、無茶だよ創真くん」

「そうだぞ幸平!!よりよって一席に勝負を挑むなんて…!」

「えくだって他の先輩たちが受けないって言うんだから他にないだろ」

「ふふ、やっぱり交流会はいいね!」

「って言いながら湯?にヒビが入ってるわよ一色」

「ライバル出現かく?」

「食戟…私と君が?」

「そうっすけど」

「ふふふ…やっぱり面白いなあ。いいよ、何を賭ける?」

「そっすねー…「ええ!?!だめだめだめだめ!!」

「!久我」

「食戟するのは俺のが先約なんだから!!」

私と幸平の会話に割り込むようにして久我が口を開いた。

『…こないだの食戟では負けたけど、次はそうはいかないから。首洗って待っててよね。来年絶対に十傑入りしてあんたを引きずり降りしてやるからさ』

去年の月饗祭の時の事を思い出した。まだ私との再戦を望んでくれているのか。

「とにかく…これからも十傑の仕事とか行事とかでもっと忙しくなるんだしおまえらひよっこに構ってる余裕なんてないの!!…ま、おまえらに何かひとつでも俺に料理で勝てるものがあるなら食戟受けてやってもいいけど」

「……今の話はホントっすか、久我先輩」

「マジマジ…でも司さんはだーめ!!司さんは俺が倒すんだから!!…はいこれでもうお話は済んだよねー。じゃ、解散ってこと!!」

みんなが席を離れていくのを私も付いて行こうとする——あ、そ  
うだ。

「じゃあね、幸平。——また会えるのを楽しみにしてるよ」

私はそれだけ言うとその場を後にした。

## 十八皿目 下調べと準備、そしてルールの把握は必須事項

「はい、今の図面通りをお願いします。——はい。では失礼します」

今年の月饗祭の出店届は既に提出しており、去年と同じく山の手エリアに出店場所を確保した。と言っても場所は山の手エリアの中でも奥まったところなので奪い合う必要性なんて欠片もない所だから確保、というのもいささか語弊があるかもしれないけど。

今日は既に会期の店に関しての指示は出し終わっているので十傑の仕事に戻る。書類の山は少なくなっているが、それ故に今のうちにこなしておかないと後々に響く。

「やつほー司ー!」

「リンドウ、どうしたの?」

「ん?追加の書類持ってきた!」

「…そう」

ため息を吐きたくなりながら書類を受け取る。…あれ?途中から紙の色合いが違う?

「リンドウ、この書類って…」

「おー、なんかここに来る途中叡山の奴に会ってなー。司に提出する書類がどうか次の会議に関わるとかなんとか言ってたからさー。一緒に持って来てやったんだよ」

「ふーん、あの叡山君がねえ…」

となるとおそらく叡山君の持っていた書類というのはいつもの書類より硬めで白い方の書類、という事だろうか。急ぎの書類なら先に片付けておくか…と、叡山君の書類を机に置いた瞬間。背後からの突風に書類が散らばる。私のコーヒーも勢いに負けて倒れた。

犯人は分かっている。分かっているんだけど敢えて後ろを振り返った。

「…リンドウさん」

「な、なははくほ、ほら、締め切ったままだと気持ち的に沈むだろーだから空気の入れ替えしてやるーかなーって…」

「…」

「……わるい」

「…いいよ。でもそのかわり書類集めて仕分けるの手伝って」

「はーい…」

渋々ながらちゃんと手伝うリンドウを横目に私も書類を仕分けていく——と、手に横に倒れた私愛用のティーカップが当たった。あれ、そういえばあの強風で倒れたんだっけ？割れてなくてよかったー…と思ったのも束の間だった。

——待てよ、たしかあれってまだ一口しか飲んでない飲みかけだったはずだ。

心臓が嫌な心音を立てる。

嘘であつてくれと、そーっと机の上を見た。

「!!」

結果、えーざんくんのしよるいは、見事に全て私のコーヒーに侵食されてしまったとき。

「リンドウー!!」

「おわ!?司、悪かったって!!」

あれから数日後、店舗の下見が終わり順調に作業が進んでいるのを確認して他のスペースも見に行ってみる。たしか久我と出店しないリンドウと叡山君以外はみんな山の手エリアなんだっけ。ちなみに私が今回奥の方に店舗を構えたのは客足を制限したからである。今年はずちちゃんはまだ個人で、慧君は極星寮で出店するので調理のヘルプができる人がいないのだ。なので来てくれた人には申し訳ないが事前に予約してくれた人たちに客層を絞ることにした。しかしおかげで規模は縮小したし、会期中は早めに閉店して自由時間もあるのでもスタッフのみんなから賛同を得ることができた。よかったー。

とりあえず一通り見終わったので、出店者の顔ぶれを見るために受付に行ってみよう。

と、歩いていると何やら声がする。気になるので行ってみると、そ

ここには幸平がいた。ああ、なるほどね、幸平も出店するのかな？

「え!?ほ…本当にここでいいんですか!？」

「？」

「中華料理研究会の真ん前ですよ!!？」

「!!」

いきなりか。いきなり十傑に食らいついてきたのかこの子。――

――あ、でもそういえば

『とにかく…これからも十傑の仕事とか行事とかでもっと忙しくなるんだしおまえらひよっこに構ってる余裕なんてないの!!…ま、おまえらに何かひとつでも俺に料理で勝てるものがあるなら食戟受けやってもいいけど』

『……今の話はホントっすか、久我先輩』

なんていうやり取りが紅葉狩り会の時にあつたような…

――なるほど

「え?空いてないんすか?」

「い、いえ、しかし――「空いてるよ!あ、あなたは」

「――司先輩」

「中華研の両隣、真ん前は空いてる。久我のリピーターでごった返すし、中華の強烈さに客を奪われるからあまり客が寄ってこないこともあつてみんな避けてるの。だから書いて出す分には食戟も必要ないしすんなり受理される。で、料理のジャンルは?」

「ああ、俺も中華で行きます」

「ふうん…真つ向勝負ね」

「これで勝ったら食戟してくれるらしいんで」

「席次を賭けてもらえる保証もないのにな?」

「いいんすよ別に。いや、確かに十傑には入りたいですけど、それよりもとにかく強い奴と食戟したいだけなんで」

ああ、そういうこと。いいな、こういう野性味溢れたまさに「生きてる」って言っているような感じ。

「…そっか、じゃあこの欄に中華って書いて渡して、そうすれば受理完了よ」

「うす」

そして幸平は記入して受付で申請し、受理された。

「あざっした、司先輩。」

「いえいえ」

あ、そういえばドキドキさせられることが多くてすっかり忘れてたけどこの子今年が初めての月饗祭なんだよね——聞かなくてもたぶん分かってると思うけど、一応聞いてみるか。

「ねえ、幸平。一つ確認したいことがあるんだけど」

「?何すか?」

「赤字を出したら退学って…知ってる、よね?」

「…え?」

「え?」

もしかして一番危ないところになるんじゃないだろうか、なんて最悪の予感がした私は間違っていないと思う。

## 十九皿目 きやくよせばんだ

幸平の模擬店申請が終わって約二週間後——  
ついに遠月学園学園祭——月饗祭が始まった。  
調理に影響を及ぼさない程度に考える。

——幸平大丈夫かな…あんな自信満々で久我の向かいに出店するっていうから、てつきり何か秘策があると思って出店促したんだけど…その前にまず「赤字を出したら退学」っていう前提すら知らなかったみたいだったし…

うあー！なんか考えてたらこっちが具合悪くなってきた!!

…まあ、だからと言って久我に負けてほしいわけじゃないんだけどね。あの子の作る中華、大好きだし。あの子本人も負けず嫌いで向上心のあるところとか、明るいところとか人間的に好きだから。

「…店閉めたら行ってみるか」

幸平のところって、たしか予約しなくても食べられたはずだし。

「…というわけで来たんだけど」

予想通りというか。客でこった返す中華研と客がいないわけではないがちらほらとしかいない幸平の店。…やっぱりこうなったかー。

とりあえず久我の方には既に予約を入れておいてあるのでそっちから先に行く。あらかじめ予約しておいたので今回もVIPっぽい部屋だ。

「はい、俺特製麻婆豆腐。お待ちどおさまー」

「いただきます」

VIPゆえなのか給仕まで久我がこなしてくれるのはいささか気が引ける気もするが、まあそこはそれということだ。

蓮華で掬い上げ一気に口へ持つていく

「~~~~~ん——」

「んっ…司せん」



「ふおいひー」

「でしよー?」

辛さに隠されていた旨味が、私の全身を駆け巡っていく!これ、去年のより更に美味しくなってる!!辛さ||痛覚だから辛いものの好きはMだとか言う人もいるかもしれないけど——今この瞬間だけなら、この美味しさを直に感じる事が出来るなら…:そう言われてしまっても全然構わない——…

「ご馳走さまでした」

「毎度ありがとうございます☆」

「今回も美味しかった…あ、持ち帰り二つお願いね」

「はいはい」

「にしても初日から絶好調だね、久我」

「んーまあね、でももうちょいほしいかなー。司さんはいいの?」

「ああうん。私は今回事前に予約してくれた人以外は受け付けてないから」

「…あ、そっか。今回は一色たちも出店してるんだっけか」

「そ、だから前みたいに関方引き入れるなんて無茶は出来ないから、私一人で厨房を回せる程度の数に抑えたんだ。だからこうして早めに閉店して食べに来てる」

「ふーん、ま、いいけどさ。それじゃ寛いで行ってー」

「持ち帰りのうち片方スペシャルバージョンでお願い」

「…りよーかい♪」

私の注文に得意げに笑って久我は去って行った。これは相手にさえしてないな…:

私も麻婆豆腐を食べ終わると中華研を後にした。

中華研から出て幸平の出店場所である向かいに行く。——あれは石窯付きの屋台か。そして客が持っているのは台湾の「胡椒餅」——なるほど。

「ごめんください」

「あ、第一席の…」

「司先輩、どもつす」

「やあ、幸平に田所さん。胡椒餅もらえるかな？」

「はいよー!」

田所さんにフードチケットを渡すと幸平は焼きたての胡椒餅を持って来てくれた。

「おあがりよ!司先輩」

「じゃあいただきます」

一口噛むと分かる。外はパリッと中の生地はもっちり、インパクトの強い肉ダネから溢れんばかりに湧き出る肉汁が口内を充たす——  
—ああ、なんて美味しいんだろう。

「美味しいっ」

「へへっ」

「これ持ち帰りで二つももらえる?」

「あ、ありがとうございます!」

嬉しそうにいそいそと包んで袋に入れたのを田所さんが渡してくれた。

「そーいえば先輩はどうしてここにいるんすか?」

「!そっか、たしか司先輩も出店してるんですよ?」

「ここじゃなくて山の手エリアにね。今年は助っ人がいないから事前予約分しか用意してないんだ。だから時間帯の指定された予約がない限りはこうして早めに閉店して月饗祭を回れるの」

「ほーなるほど」

「でもいいんですか、その、私たちのところに来て。同じ十傑の仲間：なんですよね?」

「大丈夫、君たちのところに来る前に久我のところへ寄ってきたから」  
ほら、と持ち帰りの麻婆豆腐を見せると二人は納得したようだった。

「場所の申請に付き合っておいてなんだけど大丈夫?その…採算、とか」

「あ、あはは…」

「いやー、全然っすわー」

幸平はへらりと言つて退けるけど田所さんは若干笑顔が引きつてる…見事に予想が的中してしまったとかかなんというか…

「…大つぴらに味方することは出来ない。でも——この現状をなんとかできるかもしれないヒントをあげることならできるけど、聞く？」

「ヒント？」

「…なんかあるんすか？」

「うん。たとえば、私たち料理人や専門の人間でもないただの一般人が食材を買うとき何を気にすると思う？」

「…そっか！見た目」

「そ。いくら今がオーガニックブームで健康志向の世の中だったとしても見目が綺麗な方を選ぶの。私たちがからみれば使える、美味しいと思えるものもなんの知識もない人から見たら歪で値段の価値を見出せない。だから安全そうな、見た目で味を想像できるようなものが市場に出回るんだ」

「なるほど」

「今回のにしても、久我の作るあの麻婆豆腐は見るからに真っ赤で香りも強い、食べる前から味が想像できる。それに対してこちらは台湾料理の胡椒餅。韓国料理や中国の中華ほど日本には浸透していないし、見た目から味は想像し辛い。代金を払ってからじゃないとその美味しさにありつけない、ということなんだ。だからみんな躊躇してしまうつていうこともあるんじゃないかな」

「……」

「ネームバリューに関しては二人とも秋の選抜の本選出場者だから問題ないけど、久我の実績と十傑の肩書きに圧されてるから…これが目抜き通りであれば違ったかもしれないけど、ね」

「ネームバリューに見た目のインパクトか…」

「でもネームバリューや見た目に負けないものを君たちは既に身を持って知っているはずだよ」

「？、知名度や見た目に負けないもの？」

「匂い、き。体験したでしょ——秋の選抜で」

「!!」

「匂いってというのは生物学上最初にくるものなんだ。人の情報の大部分を占めるのは視覚情報だけどその取っ掛りは嗅覚。異性や同族を認識するフェロモンを無意識のうちに嗅ぎ取って分類しているのもこのため。そのくらい嗅覚は、匂いは重要なもの」

私がそう言うのと二人とも考え込んだけど暗い雰囲気はあまり感じられない。打開策を見つけれそうな感じか…?

「…あざっす、司先輩。お礼に胡椒餅もう一つどうつすか?」

「え、いいの?」

「どーぞ、思いつ切り食べてください。それで『美味しい』って言うってくれたらもう一つ差し上げますよ」

「美味しいって…そんなのこの胡椒餅だったらいくらでも言えちゃうけど」

「ぜひぜひ!その方が作ってる方としてもありがたいんで!」

「?分かった」

田所さんが焼き立ての胡椒餅を私に差し出す。

「熱いので気を付けてくださいね」

「ありがとう」

目の前には出来立て熱々の胡椒餅。おいしそー。

「いただきます」

そして齧り付く。パリ、モチっとした食感に肉汁が溢れて口の中を支配していく——たまらないっ!!

「美味しいっ」

ザワツ

「ねえあれって…」「間違いない!司瑛璃だ!!」「え!?第一席がなんで一年生の屋台に!?!」「司様♡」「行ってみようぜ!」

え

学生、一般客様々な人が幸平のブースに雪崩れ込んできた。え、え

?!

一気に満員になり客の視線は私に刺さる。ひ、ひええええー!!美

味しかったはずの胡椒餅が途端に味を感じなくなった。視線が痛くて味わえない。

「やー、ネームバリューって聞いたとき閃いてさ。ほんと、司先輩いてくれて助かったわー」

「そ、創真くん!!」

う、うわああああ!! 嵌められた!!

「…ぐす」

その日は泣きそうになりながらマンションへ帰る私なのでした…

でも麻婆豆腐と胡椒餅美味しかった…

\*\*\*\*\*

今日の売り上げは司先輩のおかげでなんとか黒字になったものの、久我先輩には追い付けないままだった。

「にしても今日は凄かったなー、田所」

「そ、そうだねおかげでなんとか赤字免れたし…やっぱり先輩はちよつと可哀想だったけど…」

「お、お姉さ、つ、司先輩を客寄せに使うなんて!なんてことを考えるの君は!!」

「いーじゃんか、それにお礼に胡椒餅三個あげたし司先輩も許してくれんだろ」

「(正確に言うとか創真くんが押し付けてたんだけどね…)」

ここで今日司先輩に言われたことを思い出す。

「ネームバリューに見た目に匂い、か」

「うん。たしかに今日は司先輩のおかげで売り上げが好調だったけど、明日も来てもらうわけにはいかないし…」

「一席パワー凄かったからな…やっぱりなんか考えねーと。おし、とりあえず明日の仕込みしようぜ田所」

「う、うんー!」

知名度はともかくまだ何か改善点はあるはずだ。司先輩の言葉を頭の中で反芻しながら田所と調理室へ向かうのだった。

## 二十四目 所詮幼馴染みということ

今日も予約を消化して閉店すると他の店に繰り出す。初日は久我と幸平のところに行ったので、二日目からは他の十傑の店に顔を出している。

「うん、やっぱり寧々の打つ蕎麦美味しい」

「ありがとうございます。…おかわりは？」

「！ありがとうございます！」

しばらくして寧々ちゃんの持つて来てくれた蕎麦のおかわりに手を付ける。うーん、やっぱり蕎麦って言ったたら寧々ちゃんの打つのが一番に出てくる辺りが贅沢なんだよね、私。

再び蕎麦を口に運ぶ。まずは何も付けずに蕎麦単体を食べる。蕎麦独特の香りがいい。次は蕎麦の先だけ付けて、その次は全部付ける。あ、ワサビと葱入れとかなないと、こうするとより美味しくなるんだよね。

「…初日は驚きました」

「ああうん…まさか私も巻き込まれるとは思ってなかったからさ…」

あれから幸平の店は初日の赤字を回避したらしいけど、二日目は少し売り上げが落ち込んだ。うーん…でもこれ以上私が立ち入れば鼻屑になるし、そもそも幸平の店ではなくなる。この局面をどう挽回するのか…それも興味あるなあ…。

「ふふ…あ、そうだ寧々」

「なんですか？」

「この後一色の店に予約入れてるんだけど、一緒に行かない？」

「すみません、この後も予約が入っていて店から離れられないんです。」

「あー…そっか、ごめんね。」

「いいえ、今度必ず埋め合わせしますから。また誘って下さい」

「うん」

寧々ちゃんはキリツと、でも嬉しそうに言葉を返してくれた。それに釣られて私も口角が上がった。

月饗祭もあと二日。私の学生生活もあとわずかだ。だからこそ楽しませてくれよ――

十傑の店では最後になる慧君の店・芋煮会に着いた。出店場所が極星寮なので下手すると私の店より遠いのだけれど：慧君が先生をしている料理教室の生徒さん（ほとんどがご婦人）でほぼ満席である。マダムの追っかけパワーって凄いなあ：見た感じ私の席があるのかどうかは分からないが、そろそろ夕飯の時間だし、ここまで来たのだ。何としても食べなければ!!

意を決して極星寮前の看板が掛かった仮設テントに歩み寄る。

「あの」

「はいはい、今うかがが…え」

シニヨンの子が明るく駆け寄って来てくれたけど、私と目が合った瞬間固まって予約表(?)らしきものを落とした。

「どうしたの、悠姫。一体何が…」

「りよ、涼子！涼子!!だ、第一席が!!私たち極星寮の模擬店にー!!」  
「!!?」

シニヨンの子は怯えながら心配して駆けつけてきた同じスタッフの子のところに戻って行った。駆けつけてきた子も私を見て顔色を変える。

…あのー、別に君らを食べるわけじゃないんだからその化け物を見るような形相するのやめない?他の人たちの視線も気になるし……シヨック、だし。

…もしかして予約に入ってたんだらうか、たしかに正式な手順を踏まずに慧君に「一色の店に行くから」ってしか言ってたけど…あああああ!!どうしよう、きつとそれが原因なんだ!!…ここなら他の十傑のみんなの店と一緒に落ち着いて食べられるとおもってたんだけどな…

「あの…」

「は、はいはい!!」

すっごい反応された。そんなに嫌なのか…

「予約、したんだけど…一色呼んでもらえるかな」

「はい、只今!!」

物凄い速さで二人とも去って行った。いたたまれない…  
しばらくすると慧君がやって来た。

「司先輩!」

「…一色」

「ようこそ! 我らが極星寮の芋煮会へ! 席までご案内します」

「…うん」

なんとなく、泣きたい。

慧君に連れられてきたのは川に近いが水はねが来ない程度の距離にある席で、極星寮の周りの景色も相まって眺めが良い所だった。あれ、ここってひよっとして一番いい席なんじゃないのだろうか?

「どうぞ」

「ありがとうございます」

さっそく芋煮に手を付ける。おお、牛肉に濃いめの醤油、まさに芋煮だ。けど宮城や山形の庄内地方なんかだと豚肉に味噌で色々論争も起こってるらしいけど、美味しければどっちでもいいと思う。ちなみに私は牛肉に醤油派だ。慧君が覚えててくれたのかもしれない。

——あ、この芋煮の汁飲める。いくら基本的なレシピは一緒だと言っても家庭によって具材や味付けの濃さは違う。特に河原で作るときなんかは目分量も良い所なので必然的に濃くなって飲めなくなることもある。でもこれは違う。ちゃんと飲めるし味も滲みている。じっくりにこんだのか葱は形を保ちつつも柔らかくて甘いし、牛肉の脂が融け込んだ汁にマッチしている。気になる里芋も柔らかくてホクホク。がそがそいいくない。

美味しい!!

「おいし…」

「それはよかった」

ニコニコと慧君が見守る中、私は芋煮を食べきった。



「今年の極星寮も選り取り見取りだね」

「はい、自慢の後輩です」

「そっか——で、一色の好きな子はどの子？」

「は？」

間の抜けた返事が返ってくる。え？

「いや、去年『友達より近い距離で気付いてもらえない』って言ったから」

「だからってなぜ寮生なんです？」

「消去法。あ、それともリンドウ？」

「違いますよ」

「そっか…せっかくだし一色の恋に協力しようと思っただけけど」

うーん、じゃあだれだ？心無しか慧君の笑顔が若干ひきつってる気がしないでもない。

「…そういう先輩も最近随分うちの寮生に御執心ですね」

寮生——幸平のことか。

「そうだね、面白いとは思ってるよ。今回巻き込まれるとは思ってなかったけど…まだ何か考えがあるみたいだったし最低でも退学にはならないでしょ」

「ひよつとしたら売り上げ一位になるかもしれないね」

「…それは久我が負けるってこと？」

「いいえ、そこまでは言ってません。大体久我君だって今年こそ月饗祭で五日間売り上げトップになったら司先輩にリベンジの食戟を申し込もうと躍起になってますし」

「そんな制約作らなくても久我だったらいつだって受けて立つけど」

「そこはやっぱり意地なんでしょうね」

「ふうん」

よく分からないが料理人としてのプライドを賭けるのであれば私も納得する答えだった。というか幸平の話題に移ってから慧君は笑顔なのに目が笑っていない。

「もし、創真くんが久我くんに勝ったら。司先輩はどうしますか？」

「そうだね…まだはつきりとは考えてないけど、ますますほしくなるかな」

「…そうですか」

一瞬、慧君が整った顔を寂しげにしていたように見えた、でもすぐに元の笑顔になったのできつと慧君にとつていい返答だったのだろう。幸平には慧君も一目置いてるみたいだし。

「まあ、月饗祭も今日で3日目。ちようど折り返しの時だ。今日、もしくは明日までのうちにある程度の成果が出せなければ周りや中華研のラストスパートに巻き込まれて終わる」

「それはどうでしょう」

「…ふふ、やつぱり一色もそう思う？私も、彼が——幸平がただで転ぶようなやつではないと、そう思うんだ」

久我と幸平、面白い組み合わせになった。ああ見えて久我はある程度相手を認めると世話焼きなところがあつたりするから、どっちが勝って負けても決してマイナスにはならないだろう。

「それじゃあ、私ももう帰るよ」

「はい。出口まで送りますよ」

「いや、いいよ。これ以上一色の時間を独占したらお客様に悪いし——あとそれから、幸平の事気にしてるみたいけど…心配しなくとも私の弟分は一色だけだから」

それだけ言い残すと私はその場を後にした。——さて、私も明日に備えないと！

## 二十一皿目 彼女の一端

月饗祭最終日。あーあ、今日で月饗祭も終わりか…

確か今日の予約にリンドウが入ってたな。とりあえず去年と一昨年の教訓から少なくとも20人分は用意しておく。余ったら私からもらって試作に使えばいいし。と思っていると私の携帯が鳴った。着信は…リンドウからだ。

「はい？」

《おう、司。今日のあたしの予約のことなんだけど》

「ああうん。テーブル一つ取ってあるけど」

《あー、そのことなんだけどな。連れて行きたいやついるから二人分席追加してくれ》

「できるけど…連れて行きたいやつって？」

《ゆきひらそーまと田所ちゃん》

「…いいけどその分リンドウの取り分減るからね」

《えー》

「だって去年と一昨年食べた分でしか想定してないし」

《うー…わかった。じゃ、今日の夜な》

「ご来店お待ちしております」

そして電話を切り気合いを入れ直す。

よし、最後まで駆け抜けますか！

\*\*\*\*\*

「いらつしやいませ。お名前をお伺いしてもよろしいでしょうか」

「小林竜胆！」

「小林竜胆様ですね、お席にご案内させて頂きます」

「はい、よろしくー」

ホール担当のスタッフが予約表を確認して先導するのに着いていく。あたしはもういろんなところに行ったり、司の店だって毎年通ってるからこーゆーのに慣れてるけど、連れてきた二人はやっぱり慣れてないのか幸平は時々キョロキョロしてるし、田所ちゃんなんかは可哀想なくらい挙動不審になってる。気持ちは分からなくもないけど、

ここは外のちゃんとした店じゃなくて司の店なんだからそんなガチガチに緊張しなくていいのに。

案内された席について料理が来るのを待つ。

「あの、りんどう先輩。質問いいですか？」

「んー？どーしたゆきひら、あたしで答えられることならいいぞー」

「第一席の司先輩ってどんな人なんすか？」

「あれ、おまえ司と何回か会ってんだろ？」

「たしかにあの紅葉狩り会の後も出店の出店場所とか一日目の時とかでアドバイスもらったりはしましたけど、それでもいまいち掴めない印象なんすよ。」

あーなるほど。

「掴めない、かー…そうは言うけどあんもんだぜ？気弱で情緒不安定、料理しか取り柄がないって嘆いてる、苦労性で心配性なあたしたちのトップ。それがこの学園の頂点——十傑評議会第一席、司瑛璃だ」

ま、仲間と認めたやつしか認識しないのは玉に瑕だけどな

「あ、そういえばアドバイスってどんなのだったんだ？」

「どんなって…普通に場所取りのときと模擬店の久我先輩に対抗するための秘策とかですけど」

「ふーん、司が二回もねえ、はは！やつぱすげーよおまえら」

「？どういうことすか」

「どうもなにも、ここだけの話司は滅多に人の顔覚えなくてな。酷い時は食戟に集中するあまり対戦相手を覚えてねーなんてこともあるんだぜ？そんなあいつが名前覚えてるうえにアドバイスとか、よつぱど気に入られてんだな幸平!!」

「(対戦相手を忘れる!?)」

「ああ。って言ってもあいつ作った料理の方の事は覚えてるから、その料理と照らし合わせればある程度思い出すんだけどな…と、料理来たぜ。とりあえず話は食べ終わってからな」

運ばれてきた料理に手を付ける。んー、やつぱり司の作る料理はうめーよなあ!!幸平と田所ちゃんも味わってるし、連れてきた甲斐が

あつた。

コースを全て食べ終え、食後のコーヒーが出された。えーっと、去年と一昨年ので計算されててそこから幸平たちの分と今食べてる分を引いたら…

「そういえば…司先輩のお店ってなんだか本当に隠れ家的っていうか、結構落ち着いててこじんまりとした印象なんです。よく見るとテーブルの数も少なめだし…」

「たしか初日のランキングでも山の手エリアでは5位だったしな」

「んーなんていうかそれにはちよつと事情があつてなー、司は基本厨房に人を入れたがらないんだ。だからホールは任せられても調理は自分一人で回してるから客に出せる数に限りがあるんだよ」

「人を入れたがらない？」

「秘密主義つてことすか？」

「いや？単純にトラウマだよ、トラウマ」

「トラウマ？」

「そ、あれはたしか中等部の時だったっけか。あいつこの料理の腕にあの見た目だろ？十傑に入る前から色々有名だったんだよ。それで追っかけとかフアンのやつらも凄くてな、中にはストーカーじみた陰湿なやつもいてさ。ある調理実習の時に運悪くペアになったのがそういう類のやつだったらしくて、司が料理提出に行ってる隙を狙って司の賄いに自分の血混ぜ込んでたんだと」

「血!?!」

「そのせいで益々人間不信になってそれ以来十傑以外のやつとペア組まなくなつたんだよ、あいつ。去年は一色が手伝ってたから予約なしでも受け入れてただけど、今年は一色のやつも出店するっていうから事前予約分しか受け入れなかったんだ」

二人ともなんとも言えない顔になってた。まあそうだよなー。いきなりこんな話されたら。よし、ここは話題を変えてみるか。

「それよりも、うめーだろ？司の作る料理」

「あ、はい！食材の魅力を最大限に引き出しているというか…本当に「命」を感じるような、そんな料理でした」

「おう、いいこと言うなあ田所ちゃん♪」

幸平も言葉にならないって感じたな。よし、ここはあたしが解説してやるかー。

「田所ちゃんの言う通り、司は『食材を見極めそれを最大限に引き出す』ことが得意なんだ。最初に出てきた桜エビなんかもあいつの目利きだからかなりいいもんだったし。さすがだよなー。」

…ゆえに、世界の食通たちからは食材に傅きその身と誇りを奉じる者「ターフェル・ヴァイスリッター食卓の白騎士」、またある者はその食材に寄り添い真に引き立てる献身とその見た目から「サント・ブランシュ白き聖女」、そんでいつの間にか両方ともまぎって「ターフェル・バラディン食卓の聖騎士」…なーんて言われてんだぜ？初めて見た時は思わず腹抱えて笑っちゃまったよ！はははっ」

お、噂をすれば…ってやつか。司があたしたちに気付いて近づいてきたのを見計らい会話を切り上げた。

「よう司！今日のも美味かったー！」

「ありがとう、リンドウ。次のも作るから待ってて」

「おう!!」

「まだ食べるんですか!?!」

「?そーだけど」

「リンドウは基本私の店でコースを10周くらいしてから帰るんだよ」

「いーじゃんか、うまいんだからー」

「はいはい…幸平と田所さんもいらっしやい。大してもてなせないけどゆっくりしていいってね」

「あざっす、司先輩」

「は、はい!!」

「ど、どうしたのあんまり顔色良くないけど…!も、もしかして空調効きすぎてる!?!それとも暗い所ダメだった!?!」

急にわたわた慌て始める司を見て小さく溜息を吐く。あーあ、せっかくの見せ場なのによー。

「ほーら、あんまり構いすぎると逆に引かれるぜ」

「え、えええええ!?!で、でも顔色悪いし…つわ、私はどうすれば…」

「だから堂々としてろって言ってるだろー、それに二人の顔色悪いのはこのせいじゃない」

「そ、そうなの？…じゃあなんで？」

「あー…話しちゃった、おまえの「調理実習事件」」

「!!そ、そんな…」

「悪かったって!!もう大丈夫だから、な!な!!」

「う、ううう…わかった、もう、もどるよ…じゃあ三人とも、またね…」

よろよろとその場を去る司に内心謝った。悪いな司ー、後でちゃんと書類整理するからゆるせー。

「…田所、気が付いたか」

「え?」

「あんな気弱そうな人なのに、味に関しては何も聞かないし言っけなかった」

——さすが幸平。やっぱり気が付いたか。

「ま、聞くまでもないってことなんだろうな」

——でも、うまかっただろ?

その言葉を飲み込んで、あたしはしばらくしてから幸平たちを見送り司の店のコースをまた味わうのだった。

二十二皿目 ストーカーⅡモテるの方程式は間違っている。

月饗祭が終わってすぐに緊急の会議が行われることになった。議題は——新総帥薙切薊（十傑の合意が出ていないため立候補しただけの宙ぶらりん状態）について。

ていうかさ…この人ってあれだよな？私の命狙ってる死神真っ黒ストーカーだよな？ていうか薙切？あの薙切家の一員だったの？じゃあ何、私学園ぐるみで命狙われることになるの？

「おーい司。気持ちは分かったけどおまえが仕切らないと会議始まらないから戻ってこーい」

「！そ、そうだね…！こほん、それではこれより緊急の評議会会議を始めます」

しかし、資料がない。

「ねー司さん、緊急会議は別にいいけどさ。資料一枚もないんだけどー、おかしくない？」

「…資料の方は俺が事前に渡しておいたはずですが？」

みんなからの苦情…特に叡山君の視線が痛い。話すからそんな睨まないでよ！頼むから！

「それがその…たぶんそれっぽい資料のこと、なんだけど、ね…」

私は言いながらリンドウの方を見る。その視線を察してか、みんなもリンドウに視線を移す。

「ん？ああ、あの資料ならないぜ」

「俺はおまえに渡したはずだよな？あの資料にはこの件に関しての詳細と著名書類があったはずだ」

「だからないんだって」

「はあ？おまえはともかく司一席が知らないわけ…」

「わりーなえーぎん。あの資料と書類、全部司のコーヒーぶちまけて使えなくなった」

「は」



「実は、その…」

そして私は気まぎれになりながら事の詳細を話すことにした。

月饗祭の前にリンドウが持ってきた書類は、気を遣ったリンドウに開けられた窓からの強風で倒れた私のコーヒーに水没し全て滲むどころかシミになつて使えなくなつてしまったこと。

まだ内容を見る前だったので著名書類の存在も総帥交代のことも知らなかったこと。

伝える前に月饗祭の準備でお互いに手一杯でそのことを伝えられなかったこと。

「ご、ごめんね」

「」

ああ、叡山君が真っ白なつて魂が抜けてる…本当にごめんね…

「ま、それはそれとして！要はあの新総帥をあたらしが認めるかどうかだろー。因みにあたしは反対、あと司も」

「!!」

「だってあいつ来たら司の料理が食えなくなるとかそんなのやだ」

「どういうことですか？竜胆先輩」

「ああそっか、おまえらに話してなかったっけな。あの新総帥な去年の月饗祭の司の店に来てたんだよ。司のことずーつと見てるけど声掛けてこなかったし、実害無さそうだったからほつといたんだ。でも今年の編入試験のちよつと前にあった司の仕事に付いていった時、仕事終わった後の控え室にいたときはさすがのあたしもやばいと思つた」

う、あの時のことを思い出したら悪寒が…

「司ー、また吐くならここ出て右突き当たりのトイレなー」

「…わかった、大丈夫」

「本当かー？しつかりしろよマジで」

「うん…」

「そんなわけであたしと司は薙切薙の総帥就任断固反対、拒否派だから」

リンドウがそう言うのと他の十傑のみんなも声をあげた。

「司がそつちに行かないならももも反対」

「それなら俺たちもだ。大体、むこうの考えと俺のラーメンじゃどうあっても対立するだろうしな」

「全く、いい大人が女子につきまとうなど…」

「俺も俺もー！司さんと勝負できないんじや一席になったって意味ないじゃん」

「僕らもですよ、もっと頼って下さい」

「台詞は取られてしまいましたけど、困ったときは言ってください。あとそれからそのストーカー被害についてのちほど詳しくお願いします」

「よし、てなわけで…これで十傑の過半数、意見出揃ったぜ、司」

「うん…では反対派多数により、雍切薊総帥就任は棄却、ならびに今回の緊急評議会会議を閉会します。——みんな、お疲れ様」

こうして、一部の人間たちを置き去りにしながら新総帥就任の件は見送られることになった。

## 二十三 皿目 脱出計画

最近学園でえりなの姿を見かけない。思えばあの緊急会議の時、私よりも顔を悪くしていたのはえりなだった。たしか総帥に立候補していた薙切薊はえりなの実の父親だったはずだ。薙切家で、いやあの親子間でなにかあるのだろうか。

「人の家のことに口を出す筋合いはないのだろうか」

——なにか引つ掛かるな。

そう思った私は新戸さんのところに行くことにした。

「えりな様の居場所、ですか」

「うん、この頃見かけないし、この間の緊急の会議の時なんだか様子がおかしかったから…どうしたのかなって思ってた」

「…ですがこれは、司一席に言っただけのものなんでしょうか…」

「…なにか、あるの？」

「ああ、誰かと思えば秘書子チャンじゃない！」

新戸さんが後ろを振り返るのと一緒に私も声のした方を見ると、そこには薙切アリスと黒木場リョウがいた。

「だ、だれが秘書子だ！私は緋沙子だ!!」

「ハイハイ、司先輩もお久しぶりですわ」

「久しぶり、薙切さん、黒木場君」

「それで、お話は聞かせていただきました！えりなは今、薙切邸のある部屋に閉じ込められていますわ。そうでしょう、秘書子チャン」

「っ…そうです。えりな様は今、薊様によって部屋に閉じ込められ外部との接触を禁じられています。かく言う私も、それと同時にえりな様の秘書から外されてしまって…」

そういうことだったのか…私の小さい時の父親以上に過干渉なのだろうか。いや、ひよつとしたら私たち評議会で総帥就任を見送ってしまったのが一番まずかったのかもしれない。

何か私にできることはないだろうか…と思っていると黒木場君が

持っているものに目が行く。

「あの…なんで黒木場君はロープなんて持つてるの？」

「お嬢が使うからって…」

「使う？なにに？」

「それはもちろん、えりなの脱走にです!!あの子のことだから自分から薊おじ様に反発したりはできないでしょうし、ならこちらからほう助してしまえばいいと、そう考えました!!」

「おお！なるほどね!!さすが薷切さん、大胆だ。」

「司先輩も如何ですか？」

「あ、アリスお嬢！司一席まで巻き込んではいりな様が…」

「あら、そのえりなは今一世一代のピンチなのよ？それにえりなだつて頼れる先輩の一人や二人、居てくれた方が安心するでしょう？」

「そ、それはそうですが…」

「うん、私も一緒に行くよ」

「！よろしいのですか」

「ひよつとしたら今回の総帥就任見送りのことも関わってるだろうし、それに——素直ないい子でしょ、えりなは」

——理由なんて、それで十分すぎるでしょ。

そして私たちは授業が終わると同時に合流し薷切邸へ向かった。

薷切邸には新戸さん、薷切さん、黒木場君が忍び込み私は外で待機する。しばらくするとバタバタと慌ただしい複数の足音が近づいてきた。

「お姉様!?!」

「よし、全員揃ったね。悪いけど雨も降ってるし説明は後ですから急いで！」

「で、でもここ以外に行く当てなんて…」

「いや、ある。学園の中で権力がいくらか届きにくい場所が、ひとつだけ」

ただもう私も退寮した身で、ある意味渦中の人間だから素直に受け入れてもらえるかどうかも怪しい、一種の賭けのようなものだけだ。

「とにかく、ここに居続けたらまずい。案内するから走って!!」

全員が頷いたのを確認し、私は学園の奥へと走る。息を切らしながら鬱蒼と生い茂る森を抜けてたどり着いたのは――

「着いた――極星寮」

かつての私の居場所、極星寮だった。

## 二十四皿目 希望のかげら

「まったく、この雨の中で脱走を手伝って薙切邸からここまで来るなんて。いくらアンタでも無茶しすぎだよ、司」

「すみません、ふみ緒さん。でもごこしか思い浮かばなかったもので…」

あれから私たちは極星寮の中に入れてもらい、えりなはお風呂に行き新戸さんと私はここに残って薙切さんと黒木場君は帰って行った。ちなみに他の寮生たちはひと塊になって私たちを遠巻きに見ている。あ、うん分かつてるよこの場で一番場違いだっていうことは…外の豪雨でビショビショだし、いきなり「開けてくれー!!」みたいな鬼気迫った勢いで突然入ってきたのだ。…傍から見ると軽くホラーだぞこれ。

「あれ、司先輩」

「ああ、幸平。久しぶり」

「どもつす。でもなんで司先輩が極星寮に？」

「えりなの家出の手助けをね。ホテルは足がつかもかもしれないから泊まれないし、総帥は十傑の会議後に仕事で海外に行ってしまったからえりなの現状を知らない。薙切家の関係者も総帥が不在の今、きつと薙切薊には逆らえないから…どうしても薙切薊の手が届かない場所がここ以外思いつかなかつたんだ。道は覚えてるし寮生のみんなには申し訳ないけど、ふみ緒さんに頼んで二、三日ほどえりなを泊まらせてほしかつたんだ。部屋に関しては私の部屋だったところがあると思つてさ」

「ほーって、え？私の部屋？」

「うん…あれ、言つてなかつたっけ？私が元寮生だつて」

幸平だけでなく周りのみんなも固まっている。え？え？どういうこと？

『ええええええええええ!!』

みんな一斉にさげんだ。ひええええ！

「い、一席が元極星寮生？」

「うそ…」

いや、嘘じゃないから本当だから!!

「あー、もしかして私のいた記録、全部なくなってる?」

「いや初耳っすよ」

「ふみ緒さんと一色は知ってるはずなんだけど」

「その通りだよ!」

「うわっ!?!い、一色!!びっくりしたあ」

「ふふ」

突如私の横に現れた慧君に驚いて腰が抜けそうになった。：椅子に座ってるからあんまり関係ないんだけどね。慧君は悪戯が成功した子どものような笑顔だ。でも心臓に悪いんで出来ればやめてほしい。

「一色先輩!!」

「聞いてないよ一席が極星寮だったなんて!!」

「あはは、ごめんごめん。紅葉狩り会の時にでも言おうと思ってたんだけどなかなか言い出せなかったものだから。じゃあ改めて紹介するよ。みんなも知ってると思うけど、彼女は高等部三年生の司瑛璃先輩。十傑評議会の第一席で元極星寮生だよ」

慧君に言われて席を立った。その場にいる全員を見た後、佇まいを正す。

「司瑛璃です。みんなのことは一色から聞いています。今回のことはごめんなさい、みんなには迷惑をかけるし凶々しいと思うけど・・・できればえりなと仲良くしてくれると嬉しいです。———どうかえりなをよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。あんなに騒がしかった寮内が静まり返った。誰かの息を?む音が聞こえる。

私は頭を上げ張り付く髪を整えると椅子に掛けておいたブレザーを持つ。

「ちよ、ちよつと、どこにいくんですか!?!今外は土砂降りなんですよ!?!」

「ブレザーがあるから大丈夫。実は今総帥が学園にいないから仕事の一部が一席の方まで回ってきててすぐ戻らないといけないんだ」

「待つて」

ブレザーを持って外に出ようとしたら、慧君に腕を掴まれた。

「待つてください、司先輩。」

「一色」

「僕も今出ていくのは反対です。大体、あの評議会会議の後から働きづめじゃないですか」

「うーん、でも働いてた方が気がまぎれるし…いざとなったらまた宿直室借りるよ、着替えもそこにあるから大丈夫」「大丈夫じゃない!!」

え

いま、慧君が、怒鳴った…？

周りのみんなも静かで、物音すらしない。

「こんな冷え切った体で一体何ができるって言うんだ、碌に休んでもないくせに無茶するんじゃない!」

「ごめ、ん…」

「…一人を抱え込んだりしないでもっと僕たちを頼ってください。少なくともここにいるみんなは先輩に対して何かするわけではありませんし、僕は先輩の味方ですから」

「…うん」

慧君が初めて声を荒げて怒った。驚いたけどでもそれは至極当たり前の事だ。真摯に怒ってくれる幼馴染、なんだか改めて慧君の一面を認識させられた。寧々ちゃんと慧君のことはこの学園の誰よりも理解してたつもりだったんだけどなあ…

「とにかく、そのままでは風邪を引きますから、今日はもう湯船に浸かって休んでください」

「わかった…新戸さんは?」

「あ、わ、私はそろそろえりな様が上がられる頃なのでこのまま待機しています」

「そっか…じゃあ申し訳ないけど、お風呂、先にいただきます」

そしてそのまま風呂場に向かって私は歩き出した。



## 二十五皿目 朝の食卓の聖騎士

朝目が覚めてやることと言ったらやっぱり――

そう、朝食づくりである。

昨日の夜寝る前にふみ緒さんに言って厨房を使わせてもらえることになり、みんなが起きてくる前に朝ご飯の支度を始める。

「はよっす、司先輩」

「おはよう幸平」

「その量：ひよつとして朝メシっすか？」

「そ、無理言っつて泊まらせてもらったんだしこのくらいはね」

「俺も手伝いますよ」

「ええ？でも…」

「一席の料理、もう一度味わいたいんすよ。それに――二人でやった方が早く終わるっしょ」

ニヤリと笑う幸平。どうしようかな…

いや、今までの彼を見る限りそういう警戒をする必要もないのかもしれない。

「あ、すいません。司先輩っつてそういうのだめなんでしたっけ？」

「…いや、じゃあ下ごしらえからこなしてもらおうかな」

「！――合点!!」

さあ、とびきりの朝食をつくるとしよう!!

「うひゃー、朝からご馳走だー!!」

「わがまま聞いてもらったからそのお礼。っつて言っても、途中から幸平に手伝ってもらったんだけどね」

「マジで!?!」

「おう、マジマジ。俺がやったのはあくまで下ごしらえだけだな」

「みんな席に着いて」

今回は普通に朝食なので形式を意識せずに朝から食べやすいものを作ったつもりだ。

「んー、おいしー!!」

「まさか朝から第一席の料理が食べられるなんて…」

「ふふ、おかわりもあるから」

「じゃあおかわりお願いしてもいいですか?」

「一色先輩食べるの早っ!?!」

空になった慧君の皿を見てみんなが驚く。ああ、お気に召すものを作れたようでよかった。

にしても幸平の手際、技術…どれもよかったな。…やっぱり欲しいなあ。

みんなが朝食を食べ終わって片付け終わった後、幸平に声をかけた。

「ねえ幸平、ちよつと話があるんだけど…いいかな?」

「はい?なんすか?」

「私と食戟してほしいんだ」

「!」

「今日一緒に料理してて、手際もスピードも技術もよかった…物凄くやりやすかったんだ。だから幸平には私の懐刀…助手になってほしいと思ってる」

「…その食戟を受けてなんか俺に得はあるんすか?」

「うーん、そうだね。…ああ!ならこうしよう。もし幸平がこの食戟を受けて私に勝ったら私の席次——第一席を幸平に譲ろう。それなら引き受けてくれる?」

「……上等!受けて立ちますよ、司先輩!!」

——そう言ってくれると思ったよ、幸平。

「よし、なら食戟成立だね。メインテーマと食材はどうする?必要であれば私の方から手配するけど…そうなるものによつては二、三日後かな」

「いや、今からやりましょうよ。食戟。テーマはフレンチで!!食材は…ふみ緒さーん!なんか余ってる食材とかないっすか?」

幸平に呼ばれて渋々といった表情で食堂にやって来る。みんないなくなったのを確認してから出て行ったから、ついさつき出たばかりなのに…呼び戻してごめんなさい。やっぱりまた今度にすべきだっ

たかな…。

「なんだい朝あれだけ豪華だったのにまだ食べるのかい？」

「いやー、これから司先輩と食戟するんでなんか食材もらえないかなーって」

「！食戟…あんたと司がかい？」

「ええ、私が勝ったら幸平には私の助手になってもらおうと思いましたが…テーマはフレンチなんですけどなにかありますか？」

「そういう事ならいいのがあるよ！ちよつと待ってな」

ふみ緒さんは食堂を出ていくと大きい包みを抱えて戻って来た。

「そらー！昨日知り合いから届いた鹿肉だよ！！」

包みを開けるとそこには美しい赤色の鹿肉があった。痛んでるところもない。さすがだ。

「じゃあメイン食材は鹿肉<sup>カ</sup>ってことで、どうすつか司先輩」

「うん。あ、そういうえば審査員。ふみ緒さんは決まりだとしても後二人…」

「ああ、それならテキストに声かけてきます」

そして食堂から出て行った幸平が引つ張ってきたのは田所さんと慧君だった。

「え、ええ？な、何々？どうしたの創真くん」

「面白そうな匂いがしたからついてきたんだけど…何をするのかかな？」

事情を話し、なんとか審査員になってもらった（慧君は笑顔のままだったけど、田所さんはかなり混乱していたので必死にだめた）。

…これで条件は揃った。

「それでは…調理開始！」

ふみ緒さんの声で私はまず鹿の背肉から一番いい所を切り出す。

切り出した肉は脂と分けて脂のほうを刻んでフライパンに敷き、その上に肉を乗せて焼いていく。

この時肉が乾燥しないように溶けだした脂を回しかけながら焼く。

——よしよし、おいで。そう、こっちだよ。

——いい子ね。

——どうか私の皿に宿っておくれ——

そういえば幸平の方はどうなってるんだろう？チラツと見ると何かを探していた。なんかスルメとか苺ジャムとかいろいろなもの飛んでくる。

「あつた！『甘栗むいちゃいました』!!」

え、『甘栗むいちゃいました』？

するとどこから持ってきたのか七輪で鹿のもも肉を炙る。

なるほど、もも肉か。いい部位を選ぶじゃないか。

さて、私の方も仕上げだ。

——さあ、勝負だ。幸平。

結果、食戟は私が勝った。——のだが。

「やっぱり、私の条件は取り下げてもらっていい？」

「え、なんでっすか？」

「幸平、君のことははつきりいうと今でも助手にほしいと思ってる。でもね、私が最も君に惹かれたのは囚われない自由な料理をする姿。私に合わせてその長所を潰してしまうことほど勿体無いことはないと思ったんだ。だからこの食戟の条件は取り下げ。よって非公式の食戟としてなかったことにする。炭火焼き美味しかったよ…また作ってね、幸平」

「!…あざっした、瑛璃先輩!!」

「!!」

い、今幸平が…幸平が名前呼んでくれた!?

「い、今名前…」

「え？瑛璃先輩でいいんすよね？司先輩の名前」

「うん、合ってる…覚えててくれたの？」

「まああれだけ有名なら」

」

「だめでした？」

「ううん！全然。よかったらこれからもそう呼んで」

「あ、はい。分かりました」

「…一色、司にも幸平にも他意はないと思うよ」

「何のことですか、ふみ緒さん。別に僕は気にしてなんかいませんよ」

「だったら今にも曲がりそうなくらいフォークを握りしめるのはやめるんだね」

「…おっと、僕としたことが」

「はわわわわわっ」

こうして慌ただしい朝は過ぎていくのであった…。

## 二十六皿目 怪しい誘いはフラグ：かもしれない

えりなの家出から約一週間が経った。私は時折寮に顔を出しつつ仕事や授業をこなしてマンションに帰っている。慧君は寮にいた方がいいと引き留めてくれたけど、直接対面したことのある十傑として難切薊に少なからず目を付けられているかもしれないので、一緒に固まっていた方がまずいだらうと辞退させてもらった。

「これで月饗祭の総決算書は終わりだから：そっういえばそろそろ進級試験か」

大丈夫かな：えりな。今日の帰りに極星寮に寄ってみるか。すると私の机の上にある備え付けの電話が鳴った。

——内線：：ならきつと進級試験についてのこととかそこまでにある外部での十傑宛ての仕事の調整だろうか？

「はい。こちら第一席執務室——」

《司瑛璃一席。只今お時間よろしいでしょうか？》

「？はい」

《実は急遽一席宛てに会食の依頼が入りました：：》

「私宛に？一体誰から：：」

《それが：：会場の料亭そのものからです。ただその会場となっている料亭「墨白（すみしら）」は元々こちらと提携がありますし、一席も含めた十傑の皆様がよく味見役や会食の場として縁のある場所ではあるのですが：：いかがなさいますか？》

「会食の趣旨は？」

《「墨白」の方からは「新作の味見を兼ねた新役員の挨拶」と伺っております》

「なるほど：：わかりました。それで、会食はいつですか？」

《——本日の正午になります》

同日、正午。私は約束の料亭に来ていた。移動中の車の中で渡され

た資料を読んだが電話口で聞いたこと以上の内容は記載されていない。何より引つ掛かったのは――

「…主催者の名前がない」

会食やパーティーなどの集まりではその内容並みに重要なところであり、一種のステータスとも言えるはずのそこは普通ならばどこぞの権威や有力者などが載っているはずである。誰だつて無名なよく分からない人物のところに行くより、著名人に招かれてコネを作った方がいい。

なのに今から行く会食はそれがない。試食と挨拶の依頼主であるはずの「墨白」の幹部の名前すら空白だった。

「でも、遠月と提携がある以上行かなければ」

ここで私は忘れていた。――相手が私を指名していたことを。

案内されて個室の襖を開けてもらおうと――私はそこで固まった。

私に用意された席の向かいに座っているのは――

「やあ、時間通りだね」

「っ」

薙切薊だった。

一気に血の気が引いていく。なんで、どうして遠月経由の依頼で彼がここにいるのか。

彼が秘書のような男性に声を掛けると、その人は領き他の黒服たちとともに部屋から出ていった。

「まあとりあえず座りたまえ、話は料理を食べながらするでしょう」

「はい…」

席に着くと早速料理が運ばれてくる。

どうしよう、いや、本当にどうしよう。

一応料理に手をつける。でもね、味がしないんだ。なんでかな？、死神みたいな人と二人つきりだからかな？それとも相手がストーカーかもしれないからかな？

…全部正解だよ私の馬鹿。

「あの…よく通りましたね…その…会食の依頼」

「僕自身もそれなりにコネクションは持っているからね。遠月の事だから僕の名前を出したらその時点で取り下げられると思って少し趣向を凝らしてみただ」

「そ、そうなんですか…」

か、会話が續かない。間が持たない…。

「この間の会食での料理も食べさせてもらったよ。実に素晴らしい料理だった…君は食材を誰よりも理解しているんだね」

「あ、ありがとうございます」

「…やはり欲しいな」

「？」

え、今なにか言った？

「君はあそこにいるべきではない」

は

「君は私の設立する真の美食の極み——美食機関にくるべき人間だ」

「美食機関、ですか」

「君の料理は既にあの学園の頂点であり、学園の枠を超える逸脱した品だ。故に惜しいと思ってるね…私の下に来る気はないかい？」

「すみませんがそのお話、お断りします」

何が悲しくて自分自らストーカーの下に身を寄せなくてはならないのか。ここに愛用の肉叩きがあれば取り出していたかもしれない（今日は執務室に置いてきた）。

「私は切磋琢磨できて融通の利く今の環境を気に入っていますから」  
「なるほど…まあいいだろう。残念ではあるが気が変わったらいつでも申し出てくれ、歓迎するよ」

「はい」

たぶん、それはない。

料亭から帰る際、私の迎えの車が来る前に相手側の迎えが来たので



見送ることになった。

「……最後に、聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「あなたの目的はなんですか？」

「…そうだね…君には尊敬する人はいるかな？」

「えっと、まあそれなりに」

「僕にもいたんだ。とても素晴らしい自分では到底たどり着けない境地にいる人だった。——言ってみればこれはそう、あの人をダメにした今の料理界への救済——と言ったところかな」

「そう、ですか…」

「それでは再び色よい返事がもらえることを祈っているよ」

ニツコリと笑顔で車に乗り込むと去って行った。

「(にしても救済、ね)」

それは動機的には救済というより復讐ではないのか、なんて思いながら再び迎いの車を待つのだった。

## 二十七 皿目 安住の地をください。

あの苦しみの不意打ち面会の翌日。マンションを出て学校に行くまでのうちに複数の視線を感じる。その次の日もそして今日も。これ三日連続でつけられている。中等部から高等部の二年生まで感じていた感覚だ、間違いようがない。どこまで行っても消えないその視線が怖いし、何かあつては不味いのでえりなのいる極星寮にも行けずじまいだ。

あとそれから、関係あるのかは分からないが今日の朝学校に来たら上履きが消えてた。

「(せめて犯人の狙いが分かればいいんだけどな…)」

私かえりなかそれ以外か、それだけにしても心の持ち様が違うのだ。一番いいのは犯人が捕まることだけど。

「司ー、昼一緒に食べよーぜ!!」

「ああうん分かった。ちよつと待ってて」

どうやら考えているうちにいつの間にか昼になっていたらしい。リンドウたちを待たせるわけにもいかないので弁当を出そうと鞆を漁った。…のだがない。弁当を包んだ布の感触どころか弁当箱の感触すらない。

…あまり考えないようにしてたけどまたストーカーだろうか。

「…ごめんリンドウ先に行つて。弁当忘れてきた」

「そっかー、じゃあ後でなー」

二年生に上がった時に会議で提案した購買部があるのでそこに買いに行くことにした。…購買部設置しててよかった。

それ以降(といつてもあの会食から一週間だけど)も現在進行形で続いている。今日は今日で盗撮写真が送られてきた。そろそろリンドウたちに相談してみた方がいいんだろうか…今日は金曜日なので週明けの月曜日になってしまうだろうけど。それでも言わないよりはマシだろう。

「(結構遅くまで残っちゃったな…)」

試作してその後十傑の書類整理をしていたらいつの間にかもう6時を回ってた。あーもう外真つ暗だ。

「そろそろ帰るかー…」

なんて呑気に伸びをしていると足音がした。だんだんこつちに近付いてくる。

「(まあでも私が一席になってからこの部屋も改装したし、大丈夫：)」私のマンション並みのセキュリティにさせてもらったので大丈夫だろうとたかをくくっていた。いや、ちよつと待て。

急いでさっきの盗撮写真を見てみた。授業中、プライベートに執務室での、居眠り……

まずい。非常に、まずい。

授業中はどうしようもない。でもプライベートと執務室は、ただごとじゃない。だってプライベートはマンションの部屋で寛いでるときの写真で、執務室も同じセキュリティにしてあるわけだから……

「まさかこのセキュリティを突破してくるなんて……」

相手は余程腕の立つハッカーらしい。…じゃなくて、マンションでも執務室でも気が抜けないということだ。それに気付くとさっきの靴音が嫌に大きく響く。間違いなくこつちに向かってきている。血の気が引く、冷や汗が伝う、震えが止まらない。荷物をまとめ、念のため盗撮写真を送られてきた封筒に入れてそれも鞆に入れて窓に向かった。十傑の書類も書類が悪用されないように片付けたので、とりあえずやり残したことはない。

「よし……っ!!」

私は荷物を持って窓から飛び降りた。

「い、……っ……」

足に衝撃はあったが少しぶつかった木のおかげで動けないほどじゃない。携帯で窓を自動で閉めて極星寮に急いだ。寮生でもないし、えりなのようにやむ負えない事情があるわけでもないので迷惑をかけてしまうのに抵抗があるが、今学園で必ず人がいるのはあそこである。…あの会食の後すぐに私がこうなったということはえりなもまずいかもしれないわけなのだし、えりなの様子見も兼ねて、少し遠

いが行った方がいいだろう。

えりなの家出の時のように、あの時以上に暗い道を走った。

なるべく落ち着いてからチャイムを押した。

「はいはい、誰だいこんな時間に…」

「ふみ緒さん！」

「おや、司かい…って大丈夫なのかい!？」

「えりなはいますか？」

「あ、ああ、いるよ。けどあんたその怪我…」

「お姉様？」

ああよかった。元気そうだ。被害は私だけだったらしい。するとえりなもふみ緒さんと同じく顔を青ざめさせた。

「お、お姉様、お怪我を…」

「？」

言われて視線を辿ると見事に右足から出血していた。それも結構な量だ。気づかなかった…もしかしたらあの飛び降りた時に引っかけたのだろうか。とりあえずこれ以上見せると精神的にきつそうなので通りかかった新戸さんが付き添ってえりなは部屋に戻って行った。

「これについては自業自得だから大丈夫。それよりえりなも寮のみんなもなんともなさそうではよかった」

「どういうことっすか？」

来客を察知してか幸平やみんなが集まってくる。ごめんよ、こんな時間に来て…

「どうしたんだいみんな、一体誰が来て…司先輩！」

「いっし…!？」

慧君の声がしてやつと本題について語れる、と声のした方を見る。

エプロン。かわいい熊さんのエプロン。とスリッパ。だけ。え

い、いやいやそんなはずないよ。きつと長いエプロンの丈から見えないだけでちゃんと着てるんだよ。やっぱりこの頃休めてないからそんな邪な結論にたどり着くんだよきつとそう!!

「怪我してるじゃないですか!!」

「え!? ああうん」

慌てて駆け寄ってくる慧君は、私の怪我の心配をしてくるか私に傅くような姿勢になる。童話のお姫様みたいで憧れてる女子だって多いシチュエーション。でも今の私にとっては一番してほしくない姿勢だった。

だって、上から慧君の後ろがほとんど見えているんだ!! 綺麗な背中にはエプロンのリボンしかないから空きだし。!? リボンの下の方も肌色…だと!!?

「は、はだっ、はは裸あああ

!!!?  
」

そこで私の意識は途絶えた。

## 二十八皿目 受難のち解決？

「ねえ、男子って、裸エプロン好きなの？」

「はあ？」

「……どういふこと？」

リンドウともにも話を振ったらわけがないと言わんばかりの反応をされた。地味に傷付く。

「いや…単に思っただけで深い意味はないんだけど」

嘘だ。本当は幼馴染の性癖？体質？…とにかくそういう結構ハードな内容のだが、ストーカーの事について語った後なので本当のことを言うのは気が引ける。というかお昼を食べながらそんな話をすべきではないと思う。

「んー、たしかに彼女にしてほしいコスプレでよく話題にあがるらしーぜ？」

「……でもあれってほんとにコスプレ？アニメとか制服とかそういうのじゃないの？」

「彼女、彼女か……あのさ、もし男子がそれをする場合って一体どういう状況にあると思う？」

「は？」

「……なんでもない」

やっぱり昼にする話じゃなかった………というかそうだよ。男子がしてるのなんて見たことないもんね。うん。私もつい最近まで見たことも想像したことなかったよ。

昼休みが終わってそれぞれの教科に別れた後、今回取っている教科は座学で誰ともペアを組む必要がないことから私は一番目立たない、というか人気のない上の端の席に座って考える。

慧君は一体いつからあーいう風な恰好をするようになったんだろう？少なくとも私が幼馴染として一緒にいた時は普通だった。私がいなくなつた後？なら寧々ちゃん……いや、もし寧々ちゃんも知らなかったらそれこそ慧君の名誉とか二人の関係性とか色々粉々にな

る。よって却下。

そういえば当たり前だけど評議会会議とか式典とかではちゃんと制服着てるんだよね…ただ学園内であんまり会ったことないな…なんでだろう？

あれ？今考えてみて思ったけどこの前の一面といい今回の…は、裸エプロン、といい結構私慧君の事知らなくないか？寧々ちゃんと一緒にいることはあっても慧君と一緒にいるってあんまりない気がする。となるともう私の記憶は頼りにできないから…極星寮に行ってみるか。

—  
というわけで放課後、極星寮にやってきて寮生の吉野さん、榊さん、田所さんに話を聞くことにした。

「一色先輩が裸エプロンを始めた理由…ですか？」

「って言っても私たちが寮に入った時点で既にあんな感じだったよね—」

「ええ、いきなりあの姿で出てこられたので一瞬本当に寮に入るべきか迷いましたけど…」

あ、よかった。私だけじゃなかったんだ。

にしても寮生まで知らないとは…じゃあ中等部一年の時までのうちになにかあったと考えるべきなんだろうか…

「でもなんでそんなことを？」

「もしかして先輩、一色先輩のこと気になってたりしますか？」

「気になっているというか…まあ気が気でない事は確かだよな。」

「あ…なんていうか結構初見の破壊力ありますから」

「先輩も結局倒れた後回復してからあんまり一色先輩の方に近づきませんでしたし…」

「いざとなるとふみ緒さんの後ろに隠れながらやり取りしてたし」

「うーん、なんていうか…威嚇し慣れてないチワワとかウサギが無理に威嚇しようとして失敗しても一生懸命強がってる感じ？」

「チワワ…ウサギ…」

もつと強そうな例えはいなかったのだろうか…でも結局慧君に圧

されて気味だったのは事実だ。先輩としてどうなんだろう…

「にしても司先輩って一色先輩と仲いいですよね」

「ねー、この前の先輩が怪我してた時もだけどえりなっちが家出してきた時も普段からじゃ想像できないくらいいの剣幕で止めてたし」

「そういうえば司先輩は月饗祭で一色先輩の芋煮会に来てたんですよね？」

「うんうん如何にも気の置けない仲ーって感じで親し気だったー」

「この手のノリは恋バナ…かな？」

「あのさ、期待させて申し訳ないんだけど…私と一色は幼馴染だから」「ええ!?!一色先輩と司先輩が幼馴染!?!」

「なにそれ初めて知った!?!」

「ああー、なるほど…あの確認させてもらいたいですけどうちの寮の幸平くんのことどう思ってます?」

「涼子?!」

「ああ、幸平ね。面白いよね、都合つくときだけでいいからまた助手やってもらいたいなあ」

「じゃ、じゃあ十傑の男の人たちは?」

「女木島と斎藤はいい友達だよ、たまに料理食べさせてくれるし、私が不安定になっても引かないで一緒にいてくれるし。久我は仲間って感じかな、あと第二の弟みたいなの…うん、かわいい後輩。叡山君は…正直あんまり関わり合いがなくて、でも彼のコンサルティング能力は凄いよね」

「…最後に、一色先輩は?」

「んー、一色はなんていうかやっぱり大事な「幼馴染」で「家族」で「弟」かな…うん、やっぱりこうして全部言ってみるとなんだか恥ずかしいね」

「つまりそれって…」

「?みんな大好きだよ」

私が答えるとみんな何とも言えない苦い顔になった。

「(ねえこれって…)」

「(うん…みんな友達、家族以上に見てない感じ)」



「(ええっ、でも一色先輩は目に見えて創真くんに嫉妬してたのに!?)」  
「(でも芋煮会に来た時弟の立場を幸平くんに取りられるのを危惧して  
るって司先輩は思ってるわよ)」

「あの、どうしたの?」

三人が身を寄せ合って小声で話しているため聞き取れない。

「あ、ああいえいえ! そういえばなんで司先輩は今回の裸エプロンに  
ついて聞きに来たんですか?」

「小さい頃一緒にいた時はちゃんと服着てたから、いつからああなの  
かなって思って:もしかして今まで抑えこんでたものが一気に解放  
されてあんな奇行に走ったのかな? でも寧々に聞くのもさすがに不  
味いと思つて八方塞がりで:っそれで中等部の頃から寮にいるから  
一緒に生活してるみんなならわかるかなって:ただの性癖とかなら  
ほら、そういうので片付けられるし:一色のファンとか彼女になる子  
には頑張つてっつてしか言えないけど:私も人の事言えないけど将来  
が心配で」

「:(やっぱりあくまでお姉ちゃん目線だー!:)」

「あ、あの司先輩は一色先輩のことを異性としてみたりしないんです  
か?」

「異性:一色が:うーん、客観的に見たらあの裸エプロンを除けば穏  
やかでムードメーカーだし、結構色々頼りになるし、小さい頃と違つ  
て身長も伸びて顔もイケメンになったから:うん、みんなの理想の王  
子様象だなーって思う。でも今までそういうふうに見たことない  
し、何より私自身かなり面倒くさい性格してるから、一生独身で料理  
を極めようと思つてて恋愛とか考えようとも思わなかったからなあ」

「:(ダメだこの人ー!:)」

「なんかさすがに一色先輩が不憫に思えてきたよ:」

「私も:」

みんなげんなりしたような目でこつちを見てくる。え、なんで? 聞  
かれた通りに答えたただだよ私!?

「じゃ、じゃあもし一色先輩に好きな人が出来たら先輩はどうします  
か?」

「うん？普通に祝いするよ？もし料理とか接客が分からないなら私も協力するし。裸エプロンについては…うんなるべくフオローするけど…やっぱり早々に慣れてもらうしか…」

するとみんなが絶望したような表情になってしまった。何も間違ったこと言っていないと思うけど…

「そうじゃない、いやそうなんですけどそうじゃないんです先輩!!」

「一色先輩前途多難ね…」

「やあ、みんな集まって何の話をしてるのかな？」

「い、一色先輩!」

「!!」

「あ！司先輩また隠れちゃダメです!!」

「うえ?!」

隠れようとしたら三人の前に出された。ひ、ひどい…

「一色…」

「なんですか？司先輩」

「大丈夫、もう少ししたら私も慣れるから!!応援するから頑張って!!」

「はい？」

「好きな人と一緒になれることほどいいことはないし、前にも言ったけど協力は惜しまないから！」

「えっと、何か勘違いしてませんか？」

「?…なにも」

何も間違ってなんかいないよ私。

答えると慧君は少し間が空いた後、私の手を取ってニツコリと笑顔に戻った。

「…じゃあその好きな人のことを守りたいのでまたストーカーや嫌なことがあったら逐一僕に言ってくださいね、司先輩」

「?…うん？」

そこでなんで私が出てくるんだろう?もしかしてその好きな子もそういう目に遭いそうになってるんだろうか、それともまさか私のストーカー(?)と関係があるんだろうか…

考えるのやめよう…

## 二十九皿目 まだ、皿に乗らない味

あの約束以来、慧君と一緒にいることが多くなった。私と一緒に居たら慧君の好きな子が勘違いすると思うんだけど…でもそのおかげで尾行とか視線とかそういうのは気にならなくなったし、盗撮とかも頻度が下がったのでこっちとしては大助かりだ。私ばかり得してごめんね慧君…

「いいんですよ。先輩が無事ならそれで」

イケメンオーラ全開の笑顔で言われた。だめだってそんなイケメンの無駄遣いしたら、私が慧君の想い人に勘違いされるんだよ!?

「でもほとんど付きつきりできてもらってるし…やっぱり悪いよ。慧君のおかげで盗撮とか盗難とかも減ったしもう大丈夫だよ、ありがとう」

「でもゼロではないんですよ?」

「それは…そうだけど」

「ならゼロになるまで付き添いますよ」

「うう…お願いします…」

結局最後まで付き合ってもらうことになってしまった。弱い自分が情けない…

授業や移動にはリンドウたちに付き合ってもらって何事もなく過ごしている。こんなにすがすがしいのはいつぶりだろう——と帰る準備をしていると忘れ物に気付いた。

「栄養学の教科書がない…」

でも記憶が確かなら次の移動の時に鞆に入れたはずだったんだけどな…

「忘れ物として届けられてることを願うか…」

尤もそれで戻ってきたことは皆無だけど。それでも試しに行っておくべきだろう。

「ん? 司どこ行くんだー?」

「栄養学の教科書がなくてさ…一応遺失物として届けられてないか見

に行こうと思って…まあそれで見つかった試しないけど」

「ふーん、じゃ、あたしも一緒行くー!!」

「ありがとう」

「ああ、栄養学の教科書ですか？ありますよ」

「本当ですか!？」

「はい、少々お待ちください」

今回は運よく届いていたらしい。これでまた新しい教科書を買わなくていいので大助かりである。私は手元に教科書が戻って来たの上機嫌になったが、それとは反対にリンドウは何とも言えない顔になった。が、普段通りのひ飄々とした態度に戻った。

「…まあ見つかってよかったな、司!」

「うん、本当に…あれ？なんか挟まってる?」

教科書のページの間に挟まっていたものを取り出す…とそれは手紙だった。

「《今日放課後第3調理室で待ってます》…呼び出しかな?」

「でもこれ文字全部新聞の切り抜きだぜ?どっちかっていうとサスペンスとかである脅迫状だろ」

「私もそう思うけど…名前も宛先も書かれてないから、調理室に返してくる。ホワイトボードにでも貼っておけば誰か気付くでしょ」

「…それもソーか、けどよりによって第3調理室とか結構遠いところに呼び出すなこの送り主」

「…やっぱリサスペンスの王道で人があんまり寄り付かないところってことなのかな?でも一階だし、いざとなったらフルスイングか感電させるから」

「ばーか、相手が何かしてこなきや過剰防衛になるだろーが」

「あ、それもそうだね。じゃあホワイトボードに貼り付けるだけにしよってすぐに調理室出るよ」

「おい、ほんとにそれだいじょーぶか?」

「たぶん?まあ、スタンガン持つてるしね…それじゃあいつてきます」

「おー」

そして私はリンドウに見送られて調理室へと急いだ。

「……おー、一色。今暇かー？実は司がさー…」

手紙にあった第3調理室に入るとそこには一人の男子生徒がいた。  
「来てくれたんだ…っ嬉しいよ」

「あーえっと、この送り主の人かな？なら返しますね…どうぞ」

しかし相手は受け取らない。

「そんな他人行儀…いつもみたいに名前でも呼んでくれよ」

「は？」

何言ってるんだこの人？私がいっつも一緒にいるのはリンドウと慧君だけ。というかこの人記憶にない、ということは初対面で間違いないと思うんだけど。

「あの、あなたとどこかで会いました？」

「な、なにを言ってるんだ?!君は毎日僕に笑いかけてくれて、僕のために毎日弁当だって作って来てくれた!だから僕はずっと君を見ていたんだ。君を守るために!」

あ、この人やばい人だ。というか毎日感じる複数の視線のうちの一人だった。笑いかけてた？私あなたと初対面だよ？そんなあなたのために弁当を作る？私のお昼を勝手に食べてただけじゃないか。|| ストーカーの回答にたどり着いた。一歩下がる。

「なのはどうして一色なんかと一緒にいるんだ？僕がいるのに、あんなやつといるなんて…許せない」

「は？」

あなた（と他何人か）がストーカーなんてするからわざわざ慧君に守ってもらってるんだよ。また一歩下がる。

「だからあいつと今後関わらないでほしいと思って、君は聞き分けのいい子だから分かるよね？」

「一色はあなたと違ってちゃんと正面から向き合ってくれるし、そん

な独り善がりみたいなことしない。——その前にあなたは一体誰？」

「ま、まだ僕をからかって…：「からかってなんかない。本当に誰？同じ学年の人なの？…私なんかを狙って付け回して一体何があるっていうの？」

私がそう言うと相手は酷くショックを受けたような顔になった後、目付きと表情が変わった。微かに体と声が震えている。

…いや、震えたいのはストーカーと真正面から対峙してるこっちなんだけど…

「…：悪い子だなあ…僕を捨てて一色の方にいこうとするなんて」「っ…」

まずいかもしれない。じりじりと後退るがよろよろと光のない目でこちらを捉えて近づく相手の手には——包丁!!!

「何怯えてるの？一色のところに行けないようにするだけなんだからちよつと痛いけど我慢だよ」

いやいやいやいや!!明らかにちよつとで済む雰囲気じゃないよこれ。こつちもスタンガンを構える。これで安心はできないけど対抗することはできるかもしれない。…対抗なんて言っても私が相手の懐に潜り込んで感電させるのが先か、相手の包丁が私に刺さるのが先か、というくらいでしかないが。

でも相手には効果があったらしい。私が抵抗するどころかまさかこうして武装しているなんて思わなかったのだろう。明らかに動揺して——

「う、うあああああ!!」

向かってきたあああ!?!まずい。どうやら私は膠着状態に持ち込むのではなく相手を逆上させてしまったらしい。

相手のテンポに付いて行けず反応が遅れる。どう考えても私の小型スタンガンよりリーチの長い包丁に死を覚悟しきつく目を瞑って腕で意味のない防御をする。

みんな、慧君。守ってくれたのにごめん——

そう思いながら身構えたが痛みは一向に来ない。

「……？」

ゆつくりと目を開けるとそこにいたのは――

「無事ですか、司先輩」

「や、」

慧君だった。

私を安心させるように優しい笑顔を浮かべ、私に刺さっていたであろう包丁は慧君が片手で受け止めている。

「大、丈夫……」

「それはよかった。さて――」

「一色、慧……っは、放せ!!」

慧君が相手に向き直ると相手は怯えながら包丁を振り回そうとするが、慧君の方が力があるのかほとんど動いていない。

「料理人の命とも言うべき包丁を食材ではなく人に……それも司先輩に向けるなんて、ね」

慧君はそのまま手刀を決めて落ちた包丁を相手が拾わないように軽く蹴って調理室の隅に飛ばした。

「ひー」

「先輩、あなたは勘違いしています。あなたは司先輩を？守ろう？としていたとおっしゃっていましたが、実際に行っていたのはストーキング、ハッキング、盗撮、盗難、そして今回の脅迫……司先輩を追い詰めていただけです」

「う、うそだー！だって彼女は僕に微笑んで……」

「先輩にとっての理想の司先輩ならそうでしょうね、でも実際は違います。司先輩はあなたにストーカー行為をされている間ずっと碌に休めていません。そのうえ足に怪我をしながら極星寮まで来たんです。……これのどこが守っているの？」

「あ、あ……ち、ちがう僕は、僕は……」

そのままへたり込んで相手は動かなくなつた。私もスタンガンの電源を切る、と慧君が私のところに来て来た。

「もう大丈夫ですよ、先輩。――よく頑張りましたね」

《よく頑張った》なんて、こういう状況になることは初めてではないが

そんな劳いの言葉を掛けてもらうのなんて初めてで

「う、ぐす……うえええん」

思わず慧君に抱き着いて号泣してしまった。———これじゃあどつちが年上なんだか分からないなあ……

あれから、二日が経って色々落ち着いてきたので纏めてみようと思う。

あの件の男子生徒はどうやら私の同級生だったらしい。どこで私に興味を抱いたのかは不明だが、私が評議会会議後につけられているのを見てつい便乗したうえに悪化していったらしい(彼の部屋からは大量の私の盗撮写真や盗品が見つかった。でも使いたくもない代物なので静かに全て火葬させてもらった)。この事を受けて私のマンションと一席の執務室のセキュリティは一新された。これでまた安心して生活できる。

ちなみに慧君がなぜ駆けつけてくれたのかと言うと、リンドウが私と別れた直後に慧君に連絡してくれたらしい。ありがとう本当に助かった!!なのでお礼に昼のデザートをちよつと豪華にした。結局おかずの一部も持っていかれたけど…

「ねえ一色、もう解決したからわざわざ一緒にいなくても大丈夫だよ？」

「司先輩は僕と一緒にいるのは嫌なんですか？」

「嫌じゃないけど…」

慧君はストーカーが無くなった(まだ複数人の視線を感じるが実害はあれ以来ない)後もこうして私と一緒にいてくれる。…そのうちファンに殺されるんじゃないかな、私。

「けど？」

「やっぱりやめようよ…ううの。一色が好きな子が勘違いして振られちゃうよっ…」



尤もその前後に裸エプロンという難関が待ち構えているのだが。

ただでさえ「落ちこぼれ」のレッテルを貼られる原因になったのだ。ここまで至れり尽くせりにしてもらっておきながら、慧君が私の世話だけに一生を費やすのは昔から知る身としては良くないと思うのだ。

……私も弟離れの時期かあ。

「……あんまり頼りなくて年上っぽくないから、構ってってくれるのかもしれないけど……もう他の子のところに行って大丈夫だよ」

「いいえ、離れませんよ。絶対に」

「え？」

なんか今とんでもないこと言わなかった？シスコン？師弟愛？

「僕の言っている好きな人は————司先輩ですから」

「」

「返事はそうですね一週間後までにはほしいかな。というわけで——

——覚悟してくださいね、先輩」

一つ減ったところに、それ以上の悩みが追加された瞬間。

### 三十三目 迷走からの終息…?

ストーリーカーの一件が片付いてからというものの、私は別の事で頭がいっぱいだっただ。

『僕の言っている好きな人は——司先輩ですから』

この間言われた事が、まだ整理しきれてない。

一体いつからそう思われていたんだろう？客観的に観ているとその人が恋している表情になる、とはよく言ったものだけど、私は少女漫画どころか漫画そのものに縁がないし、小説もあまりそういう類の物は読まないし持ってない。恋愛ものなんて絵本とか童話くらいなので参考にできるものがない。

慧君が恋の話をしているところとか全然想像できないしなあ……

「…や」

慧君が私を好きだなんてそんな素振りあったっけ？

「司！」

「はうあ!?!…:…リンドウ」

「何ぼーっとしてんだよ。こないだの調理室呼び出しからなんか変だぞおまえ」

「そ、そうかな?」

「…ここに来る間に三回階段踏み外して、五回壁にぶつかって今もぼーっとしてるってなったらそりゃあな」

「うわあー……」

この頃痛い事多いなーって思ってたら結構な頻度だった。とかそれって下手すると三回死にかけてるってことなんじゃ……

「…なんかあったか?一色と」

「へえ?!」

鋭いリンドウの発言に思わず変なこえが出てしまった。にやりと目を細めるリンドウ……あ、これ弄り甲斐のある玩具面白いものを見つけた時の目だ。

「ふーん、なんかあったみたいだな。よーしよし、あたしが聞いてやろう!!」

「……絶対面白がってるでしょ」

「おう！でもこのままおまえ一人で悩み続けても解決しないだろう？」

「それはそうだけどさ…」

「だーいじょーぶだつて！」

「それじゃあ…」

観念した私は言いふらさないように釘を刺してから慧君に告白されたことを話した。

「ほーん、ついに言ったのかー一色のやつ」

「え？リンドウそれどういうこと？」

「ああ、話したんだよ一色のやつと。ほら、去年の月饗祭」

「そういえばそうだったね」

去年の月饗祭…慧君が休憩に入った時のか。

「あの時な、一色に聞いたんだ。まあ、ほぼカマかけたようなもんだつたけど…おまえが思ってる以上にアイツはおまえのこと好きだぞ。その分片思いの期間もなっげーけど」

「あ、あのさ、その、片思いの期間ってどのくらい？」

「ん？詳しくは聞いてないけどおまえと一緒にいた三歳の頃からだとかって言ってたな」

「……」

さ、三歳…それって約十四年間も、ということになるんだろうか。「なんで私気付かなかったんだろう……」

「そりゃあ料理にしか興味なくて漫画とかそういう話に疎いからだろうーが」

「…で、でも所謂デートとかそういうのなかったよ？」

「アホ、一緒にあっちこっち回っただろ、去年の月饗祭」

「……あ」

そういえばそうだつて……。行ける分だけ一緒に回ったんだつた。「てつきり幼馴染として話しやすいから誘われたんだと思ってた…」

「はあ…だめだこりゃ」

「え、じゃあ一色は初めから…」

「おまえを落とすつもりだったんだろうよ」

「落とす……その、恋、に？」

「他に何があるんだよ、誰も猟銃で撃ち落としたりなんかしねーよ。ジビエじゃあるまいし」

よくよく考えると去年手伝ってもらったり、その後デ、デートしたり、無茶しようとして怒られたり……この間助けてもらったり……そういえば安心して泣いちゃったんだっけあの時。

今改めて思ったけど結構慧君に頼ってるな私……このままだと慧君無しじゃ生きていけなくなりそうで怖い。

「で、おまえはどうなんだよ」

「どう、って」

「一色の事、……までされて本当になんとも思っていないのか？」

結局、私はリンドウのその間に答えることが出来ないまま帰路について。とぼとぼと歩きながら考える。

頼り甲斐のある、弟みたいな可愛い幼馴染。だと決めつけていたのは私自身で、本当は何も見てなかったのかもしれない。

「(そういえばこの間の裸エプロンの時も思ったけど、結構がっしりしてたな)」

声も体格も、面影はあるけど顔も。記憶にある弟じゃなくて、いつの間にか全部男の人になっていたなんて。今更過ぎる。

……思えば慧君は自分の気持ちに気が付いてないこんな私を守ってくれてたんだな……感謝してもしたりない。この間のストーカーから守ってくれたとき、かつこよかった……

「あれ？」

今なんて思った私？こんな単純でいいのか私!?えーつとなんて言うんだっけイタイ？ウザい？……チヨロい？

というか顔で好きになるとかどんな面食いだ私。

今の今まで弟扱いしてたくせに何考えてるんだ!!このまま勢いでOKしたとしてもきつと後で幻滅される!!

「はあ……」

血迷いそうな自分にため息が出てしまう。期限は今週中に来てしまおうので、なんとかしなければならぬのは分かっているんだけど……都合のいい言い訳が思いつかない。というか慧君のことを考えれば考えるほど意識してしまおうというか……ドツボに嵌まって行く気がする。

ジメジメしてキノコが生えてきそうな勢いで落ち込む私を遊びに行った帰りの小学生たちが追い抜かしていく。

「子どもの時は、こんな風に悩むことなんてなかったのに……」

と思いつながら前を見ると追い抜かしていった小学生のうちの一人が私の事を心配そうに見ていた。

「お姉さん大丈夫？具合悪いの？」

あれ、そういえばこんなこと昔にも……

『えいりちゃん大丈夫？足痛くない？』

……昔の、慧君を連想してしまった。一緒に歩いて遠出した時。あの後無理しすぎて私だけ筋痛めたんだっけ、それでずっと慧君が付いててくれて……あれ？私、小さい頃から慧君に頼ってた？

みんなに言った『理想の王子様』って一般的な理想形だと思ってたけど、本当は小さい頃からそれが近くにいたから想像しやすかったってこと……？

じゃあ小さい頃の慧君の中身が好きなの私？見た目は今の慧君で？いやでもこの場合は小さい頃の慧君が好きで……いや両方備えてる今の方が……

だめだ、返事を考えるどころか自分が分からなくなっていく。……私って、シヨタコンなの？ノーマルなの？

「大丈夫、だよ」

「そっか、じゃあねー」

私が答えると少年は笑顔で去って行った。それを確認してから携帯を取り出して番号に掛ける。

「リンドウ……私……シヨタコンなのかな」

《は？》

「どうしよう、私捕まるのかな」

《ちよ、待て司、一体何の話…》

「犯罪者にな<sup>ら</sup>り<sup>だ</sup>ぐな<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>——!!」

私はそのまま泣きながらマンションへ走り帰った。

\*\*\*\*\*

「確かこのマンションに住んでるって…」

僕は今、瑛璃ちゃんの住むマンションに来ている。今日がこの前の返事の期限なので返事をもらいに行こうと思ったら瑛璃ちゃんは学園に来ていなかった。十傑の仕事で学園を空けることはままあることだし授業も選択制なのでクラスメイトは気づいていないけど、いつも一緒にいる竜胆先輩いわく休みらしい。

『あー、まあとりあえず放課後にでも様子見に行ってやってくれよ。あたしよりおまえが直接行った方がいいだろうし』

…ということであつたけど。

「(ここに来るまでマンションの近くで何人かの視線を感じた)」

ストーカー被害はまだ完全に収まったわけではない、という事だろう。おそらく僕が感じていたのは僕が瑛璃ちゃんと同じ十傑の一員だからかもしれない。

瑛璃ちゃんが応答してくれなかったのでコンシエルジュの人に事情を話して貸してもらった合鍵で部屋の鍵を開けて入る。

「お邪魔します…瑛璃ちゃん?」

声が返って来ない、音がしない。とりあえずそのまま玄関に立ちっぱなしというわけにもいかないの上がらせてもらう。廊下を歩いていくとリビングに入った。でもそこに人影はない。…家捜しするようであまり気乗りしないけど、ここは一つ一つ確認するべきかもしれない。またストーカー行為が悪化して…とかだったらまずいわけだし、安否確認も兼ねてるから。

そして探して最後にたどり着いたのは、やはりと言うか、彼女の私室——寝室だった。

「瑛璃ちゃん、入るよ」

ノックしてからそう言って部屋に入ると——白い布団が丸まっていた。いや、正確に言うとな瑛璃ちゃんがくるまって白い雪見だいふ

くのような形になっていた。

「瑛璃ちゃん」

「!!っ」

名前を呼べばその饅頭が震えた。くるまっついては顔が見えないのでベッドに近づく。

「学校を休んだって、竜胆先輩から聞いたから来たんだけど…大丈夫かい?..」

「…ん」

もぞりと動いたかと思うと布団から顔を出した。出したその顔の目からは大粒の涙が溢れており、目元はやや赤くなっている。

「いっしき」

ぐずぐずと泣きながら名前を呼ばれた。

「ごめんね」

「…うん」

これはこの前の返事だろう。やっぱり僕らの関係は幼馴染みで打ち止めだったのかもしれない。

小さい頃から、あの僕を救ってくれた時から君の事が好きだなんて君は知らないだろうし、君に構われる創真くんに度々嫉妬していたことも幸か不幸か勘違いされた。望みが薄いのなんて元からで、それでも諦めたくなかった。

だからあの弱っていたところにつけこんだんだ。

…我ながらみつももない。断られても仕方がないんだ。

「私、最低なんだ」

「どうして?..」

「だってシヨタコン…っうわああああん」

「ちよ、ちよつと待って。一旦落ち着こうか瑛璃ちゃん」

瑛璃ちゃんを宥めて再び落ち着かせ続きを聞かせてもらわなければ、話が見えないままで終わってしまう。やっどこさ落ち着いた瑛璃ちゃんは再び言いづらそうに話し始めた。

「い、今まで弟扱いしてたくせに、今更男の人として意識するなんて。いくらなんでも都合が良すぎるし、小さい頃から散々頼って…この

間助けてもらって今更かつこいと思うとか…」

「そんなことでコロツと好きになる自分が嫌…昔から頼りきつてその慧君を理想として基準にしようとする自分が嫌…今の慧君が好きなのーマルなのか、小さい頃の慧君が好きなの、っシヨタコンなのかよく分からなくなっていく自分が嫌」

「…こんな最低なやつで本当にごめんさい」

最後に言いきる辺りでもう既に彼女は泣いてしまっていて、僕も信じられない言葉に一瞬気後れした。

因みに瑛璃ちゃん、たぶんそれはまだシヨタコンではないと思うよ？

——でも

「ううん、いいんだよそれで。だって僕も君の言う『そんなこと』みたいなことで君に救われて、好きになったんだから」

「…え？」

「僕はね、あの飾り切りの時に瑛璃ちゃんと話さなかったら…きつと料理人をやめた。僕を認めて僕に料理の楽しさと自由を教えてくださいるのは君なんだ」

「でもそのせいで『落ちこぼれ』って…」

「それは誰かの評価。それでも今の僕を認めてくれる人はちゃんというよ。それにいちいち気にしていたら自由な料理ができないし、ね？」

「……」

「ねえ、好きだよ瑛璃ちゃん。あの時からずっと。……ごめんね、返事がまだまとまらないなら今日じゃなくてもいいから無理しないでゆっくり考えて」

さつき瑛璃ちゃんの内心を聞いたこともあって、やや精神的に余裕ができた。焦らなくてもいいんだ。ゆっくりといつも通りの距離で僕は瑛璃ちゃんの僕に対しての『好き』をより確実なものにしていけばいいんだから。

「私も、好きだよ」

「え」



「…まだ、慧君の言う「好き」かどうか分かんないけど…小さい頃の慧君も今の慧君も両方とも好き」

「瑛璃ちゃん…」

「ごめんね、返事、出来なくて…でもお願いだからたとえ私が救いようのないやつだったとしても…嫌いに、ならないでっ…うわああああん!!!」

また泣き始めた彼女をあやすように頭を撫でる。

「大丈夫、嫌いになんてならないから」

「……ほん、とう?」

「うん、約束するよ」

「…ありがとう」

「これからもずっとずっと彼女の隣にしよう。もう絶対に離すもんか。」

「さて、じゃあお祝いに今日の夕食は僕が作るよ」

「え、いいの?でもせっかく来てくれたんだし…」

「いいのいいの。ゆっくりしてて、この通り…」

「気合い十分だから!!」

そして僕は裸エプロンの格好になった。こういう時のためにエプロン持って来ててよかった。

「み、——!!!?」

「あははははは!」

瑛璃ちゃんがベッドから出てきても、夕食が出来上がるまで部屋の隅でまたくるまりながら待っていたのはまた別の話。

### 三十一 皿目 極星寮

慧君とのことが落ち着いてから、極星寮に行くことが増えた。

「こんにちは」

「あ、司せんぱーい!!」

寮の子たちはもう私が来ることになれたのか普通に当たり前のように扱ってくれる。えりなも戸惑いながらだけど寮に馴染んできているようなので何よりだ。

「あの、聞きたかったんですけど、なんで司先輩は極星寮を出たんですか?」

ギクツ

「あ、それ俺も気になってた。一時期寮生だったっていうならふみ緒さんの腕試し合格したんすよね?なら学校の試験とか課題だって大丈夫だったはずっしょ?なんでそのまま居続けなかったんすか?」

ギクギクツ

よ、よりによつてそれを聞いてくるのか……

「えっと、食戟し続けたからかなー……」

「?どういうことですか」

「いやー単純に私が弱かったというか……」

「弱いって、りんどー先輩に負け無しだって聞いたんすけど」

「な、なんて言ったらいいかなー……」

冷や汗だらだらで目を逸らすがいつの間にかみんな集まってきたしまった。に、逃げられない。

「そのお……もうそういう輩はここに来てないんだし言ったらどうだい司」……ふみ緒さん」

「あの頃と違ってあんたの味方も増えたんだ。いい機会じゃないか」  
「……それもそうですね。一色にも大体のことしか言っていないし」

正直すべての始まりとも言える思い出したくない日々だったりもするけどね。

「私はね、中等部一年の一年間だけ極星寮に住んでたんだ。だから一色とは入れ違いでみんなとの面識もなかった……まあ何事もなければ

そのまま居座ってたけど…」

「何かあったんですか？」

「有り体にいうと……襲撃された？」

「ええ!? しゅ、襲撃!？」

「私は田所さんとかとは違って旅館とか料理店の出身だったわけじゃなくて一般家庭の出だし、それにこの隔世遺伝の髪色とかで悪目立ちしてたらしくて。入学式の次の日から食戟挑まれてさ…最初は断つただけけど、それから毎日ここに部下とか黒服引き連れて食戟受けるように脅迫されて……ふみ緒さんが追い払ってくれてただけど、屈強なゴリゴリした人が来るようになって…それでなくても授業中に嫌がらせされてたからついに限界がきて受けたの。でもそしたら今度は食戟の果たし状がひっきりなしに届くようになってよく分からない手紙とか荷物とか…私の観察日記的なものも同封されて…うう、思い出したら気持ち悪くなってきた…」

「食戟で勝つたびにファンが殺到してねえ…風呂を覗こうとするような不届き者もいたもんだから当時の風呂場の窓には鉄格子と窓ガラスフィルムを貼ってたもんさ」

「うわぁー……」

みんな引いてる!! えりなも新戸さんも震えてる!!

「そういえば自分のまかないに血混ぜられて食べなかつたって…」

「ご、ごめんなさい司先輩! そうとは知らずに聞いてしまったって…」

「いいんだよ、どうせいつか分かることだから……一色?」

いつもだったらこういう時フォローをいれてくれるはずの慧君が何も言っていない……と思ったら裸エプロンでヘルメットにゲバ棒とツルハシ?

「あ、あの、一色? 一体何の装備?」

「ああ、気にしないで。用事が出来たからちよつと出てくるよ…ふみ緒さん、当時押し掛けてきていた生徒の名簿はありますか?」

「ほとんど押しの強い顔ぶれは変わらなかったから要注意人物ってことで作ってた気がするよ。ちよつと待ってな」

「ありがとうございます」

「いやいやいや！本当にどうするつもり!?」

「大丈夫ですよ、司先輩に累の及ぶ事はありませんから」

いやあるよ！名簿の話が出た時点で嫌な予感しかしないよ!!

「ほら、一色。これだよ」

「はい、じゃあいつてきます」

「待ってやめて！その人たちのところに行く前に一色が捕まるから!!」

私の筋力じゃ引きずられていくだけなのでここはみんなで止めた。さすがの慧君も寮のかわいい後輩たちに懇願されたのが効いたのか大人しくなってくれた。よかった、いや本当に。

「……そんな感じで私は中等部の一年だけをここで過ごしてセキユリテイの万全なマンションに引越して今に至るんだ……まあ、それもこの間破られて一新したんだけど」

「なら司先輩も極星寮に戻ってくればいいじゃないですか」

「あ、一色先輩ナイス！」

「たしかに先輩の時と違って人数もそれなりにいるし、どうですか？」  
みんな進めてくれるのは嬉しいんだけどね……

「まだちょっと解決してないことがあって、それさえ終われば……って言っても私が学園に居れる期間なんてもうほとんどないけど」

それでも、と受け入れてくれるみんなに満更でもない私だった。

\*\*\*\*\*

「それで、司瑛璃の身辺調査は？」

「は、変わらずあのマンションを住居としていますが、どうやら例の寮に出入りしているようです」

「…極星寮か、なるほど。あそこには逃げ出したえりな、彼女の眼鏡に適った幸平創真、そして幼馴染である一色慧がいるからね。そのうえ彼女自身も元は寮生だ」

十傑以外の抛り所というわけだ。えりなと彼女が目をつけている

少年はどうとでもなるとして、問題は一色慧の方か。叡山君に聞いてもあまり情報を掴ませず真意の見えない人物として嫌悪されていたようだし…そうだな。

「——至急、叡山君に繋いでくれ。話したいことがある」

### 三十二皿目 疑心暗鬼つて怖い

ストーリーカーが落ち着いて極星寮での日々に癒されながらも、十傑の激務は変わらない。

私の机の上には書類の山が私を取り囲むように鎮座している。

「提出期限、延びないかな…」

「無理だな追加だ」

「そっかー、そうだよねー…」

女木島の一言にあしらわれながら今日も仕事に励む。慧君やみんな（リンドウ以外）は要領よくこなしてるのに私ときたら…

「そういえば叡山君は？」

「見てねえな」

「そっか」

あの評議会会議の後辺りからあまり会ってないし、前より私用で学園外に行っていることが多いみたいだから気になるんだけど…外にパイクを持つにあたって忙しい時期なのかもしれない。来年は三年生になって卒業後のことも考えなきゃならないわけだし。叡山君のことだから引く手数多だと思っただけ。

まあ学園生活に支障をきたさないならそれでいいか…なんて思っていたら執務室の扉が勢いよく開いた。入ってきたのは——久我だった。

「司さん！」

「久我、どうしたの？」

「テレビ見た?!校内放送のテレビ!!」

「見てない、けど」

「なら見て、今すぐ!!」

言われるがままに急いでテレビを付けた。

映し出されたのは——

「食、戟？」

叡山君が3—0で食戟に勝利する姿だった。でも

「審査員が、料理に手を付けてない」

更に言えば叡山君の料理は見るからに手抜きだ。これではいくら十傑といえど相手の料理の方が断然美味しそうに見える。どういふことだ？

叡山君は渡されたマイクを持つとカメラに向かって話し始めた。

『今日これより、学園内の組織の仕分けを行う。よってこの甲山鉄次率いる研究会の取り潰し及び本人の退学。異論のあるやつはかかってきてもいいぜ？——まあ尤も？この映像を見てそんなことができるならだけどなあ？』

テレビを消す。十傑に何の提言も無しにこんな大規模なことを…

「女木島、久我。すぐに他の十傑たちも召集して、緊急の評議会会議を開く」

「了解」

みんなが集まるものの、ただ一人、叡山君だけは来なかった。

「みんな、緊急の評議会会議に集まってくれてありがとう。議題は言うまでもないと思うけど今回テレビで流れた叡山君の独断による仕分けの事。：私は十傑全員に声を掛けてもらったと思ったんだけど。久我、叡山君は？」

「知らない。俺が司さんに頼まれて一色とおさげ呼んで最後に行こうとしたら、クラスの担任が叡山は早退したって」

「そ、ありがとう」

「どうか何この無茶苦茶なやり方。独断してももたちどころか司にも話いつてなかったってこと？」

「久我に言われてテレビ見るまで知らなかったよ」

「それにえーさんのやつ、近頃外に出ずっぱりでほとんど学園いなかったしなー。寧々はなんか知らないのかー？」

「いえ、まず十傑以外での関わりなんて時々授業で一緒になるくらいですから。それに最近は授業にも出てなかったようすし…」

となると学園内での手掛かりはなしか…

「にしても随分急ですね、学園内の組織の仕分けなんて。普通は薙切くんのように一団体ごとに食戟を挑んで規模縮小や取り潰しにして

いくものだと思いますが…」

「ま、腐っても叡山のやつも十傑の九席だからねー、わざわざこんな騒ぎ立てなくても生徒の一人や二人、研究会を正式に潰すなんてことも出来たんじゃね？アイツに至っては口八丁で丸め込むなんてこともできるだろーしね」

「久我」

「だってホントのことじゃん。だから余計に訳分かんなくなってるんでしょ？」

「学園内部ではないとなると、外部の大物との繋がりが？」

「かもしれないね。…それに今回の食戟はあまりにも腑に落ちない点が多すぎる。叡山君に点数を入れていた審査員たちはどちらの料理にも手を付けていなかった。それどころか明らかに叡山君の料理が手抜きで相手の料理の方が美味しそうに見えるのに叡山君に票を入れた。まるで最初から決まっていたようにね。」

「……審査員を買収しやがったってことか」

「あの…」

すると弱々しくえりなが手を挙げた。

「もしかしたら、叡山先輩の後ろ盾になっているのはお父様……薙切薊かもしれません」

「！ああそつか、新総帥就任の書類とか著名とか持ってきたのえーぎんのやつだったもんな！」

「ええ。まだ確実とは言えませんが……」

「たしかに、その可能性は否定できないね」

私がそう言うときみんなが一齐に私の方に視線を向ける。

「この間の不意打ちの会食の時、彼は私を新設する機関……「美食機関」に勧誘してきた。彼にはそれ相応のコネがあるみたいだし、外部と多くの関わりを持つ叡山君と何らかの形で接触があったとしても不思議じゃない」

「不意打ちの、会食……？」

「聞いてないぞー司ー」

「ご、ごめん。でもあの時は今より余裕なかったから、言いそびれて



……」

みんなにちくちく言われて改めて「ああ、自分って頼りない上に馬鹿なんだな……」って思った。

「とにかく！必ず十傑の誰かと一緒にいろよ、ただでさえあの親父さん前々からおまえにストーカーしてただろーが」

「……そうだね」

あの控室の……いやリンドウいわく去年の月饗祭の時からだもんなあ……なんかまた寒くなってきた。

と思っっていたらえりなの顔色も悪かった。

「す、ストーカー？あ、あのお父様が……」

あ、これまづいかも。

「あ、え、えつと！現在の一席としての私の品定めみたいなこととしてたのかもね！」

「でも不意打ちの会食で欲しいってスカウトされたんだろ？」

「不意打ち……ほしい……ストーカー……」

私がフォローしようとしてもリンドウが容赦なく話を挟ってきた。えりなはパンク寸前の機械のようにぶつぶつと呟いている。

「……はあ」

まだまだ続くであろうこの混沌とした会議や私周辺の警戒に私は人知れず溜息を吐くのだった。

### 三十三三目 緊急時にこそ人の本性の一端が顕れる。

「叡山くんが極星寮に来た!？」

あの混沌とした会議の後、何かあってからでは遅いということでは極星寮に泊まることになった私の声は食堂に響いた。

「はい……それで退去の事とか色々話して帰って行っちゃって」「そう……」

今日会議に来てなかったのは極星寮や研究会を潰す準備のためだったのだろうか。……たしかに私とのいざこざや十傑へのアプローチが不発に終わってしまった今、学園を掌握するのなら芽を摘むような行為を行う事で話題性を向けるというのも分からなくはないし、十傑が認めない中で出来る事は限られているのだから手段を選ぶ余地もない……でも……

「……」

「司先輩?」

「あ、ごめん。なんでもないよ」

話し掛けられて我に返った。いくらなんでも考えすぎか……?。

でもこういう時の私の嫌な予感って外れたことないし……

——こういう時って、考えるより直感で動いた方が好転することもあるんだろうし、そうだな。

私はみんなの輪から外れると携帯を取り出して相手呼び出した。

『はい、一色です』

「一色にももう情報がいつているかもしれないけど、極星寮に叡山君が来たらしいの。それで一色に頼みがあるんだ」

『なるほど、叡山君が……それで、頼みっていうのは?』

「今日の食戟で審査員をしていた三人と、出来ればここ最近叡山君と接触していた人物を特定してほしい。お願いできる?」

『……分かりました。調べてみます。ただ後者の方はひよっとしたら情報そのものにプロテクトが掛かっているかもしれないので確約できませんけど』

「出来る範囲でいいの。危ないようなら無理しないで報告してくれれ

ばいいから、薙切薊に察知されて面倒なことになってもあれだし」

『はい。じゃあ審査員の方から調べてみますね』

「ありがとう。じゃあまた後でね」

『はい』

通話はそこで途切れた。顔は割れているし、管理局の記録もあるかもしれないからそこから辿っていけばいいとして……

「私も、ちよつとは先輩っぽく動かないとね」

「やつぱりこうなったか……」

案の定幸平は叡山君に食戟を申し込んだ。受理されたのは今朝、情報と一緒に慧君から聞いて私も準備を急いだ。

でもまあ使うまでもないのかもしれないけど。

「にしても幸平、今回はどんな料理つくるのかなあ」

また面白くて美味しそうな料理作るんだろうなあ。——食べたいなあ。

まあ今はそれどころじゃないし……後で作ってもらおう。

「俺のツレとか知り合い連中にちよつかいかけたら許さないっす。あんたらにとつちや俺らは格下なのかもしれないですけど舐められてるだけで過ごすつもりはないすから。売られた喧嘩なら買うし、容赦なく蹴散らしていくんで！」

かっこいいなあ幸平。

それじゃあ、私も準備は出来てるし行こうかな。……確認してから。

「中継、終わった？」

「！瑛璃先輩」

「おー、司ー」

「食戟お疲れ様、幸平。というか仕事ほっぽり出してどこ行ったのかと思えばここに來てたの、リンドウ……」

「おう、うまかったぜ幸平の手羽餃子」

「幸平、帰ったらそれ私にも作って」

「いーつすよ」

「ありがとう……私の方からこの食戟について色々言いたいことがあるから幸平は先に帰っててもらえる?」

「……分かりました。じゃあ先に行ってます」

「うん、気を付けてね」

そう言って幸平を送り出して審査員たちと対峙する。

「さて、幸平も居なくなりましたし私たちも始めましょう。皆さんにも予定が有るでしょうから手短且つ簡潔になるよう努めさせていただきますので」

私が向き合った時点で顔色が悪かった審査員たちはますます顔をひきつらせた。

「まず前回の食戟についてですがあの後管理局と外部と私で話し合った結果、甲山鉄次二年生の退学は取り消しとなりました。食戟の記録については甲山鉄次本人の要望により記録されることとなります。ただし扱いは食戟のルール改定による例題としての非公式な形になります」

「ま、待ってくれ!昨日の食戟がなかったことになるなどそんな……」

「昨日の叡山九席の料理は美味しかったですか?」!

そこにいる全員が黙り込んだ。そう、言えるはずがない。あの時審査員たちは全員その場にある料理に手をつけなかった。

「——私達は話し合いと食戟という手段によりありとあらゆる決まりをつくってきました。学園内の事は勿論のこと、更にいえば私達十傑評議会も例に漏れず成績と同等若しくはそれ以上の評価として食戟の戦績は重要視されています。この意味はお分かりですよ?」

「し、しかしそれではあまりにも」

「弱者にとつては厳し過ぎると?——全くそうさせているのはあなた方も含まれているのですよ?」

「な」

「あなた方は即戦力のブランドが付いた人材がほしい。私達はそのニーズに応えているのです。実際、あなた方の企業に送った学生や卒

業生は実績を残しています。学園の構造に関しては私共としても幾分か改善の余地はあるでしょうが……それは私達が話し合う事であり、あなた方の問題ではないはずだ」

まあそんな善意なんてものは無いのだろうけど物は言い様である。本音を言えば私だつてどうとも言えないしどうだつていいんだけど。

「食戟は食べなくては意味がないというのにそれすらすることないなんて……それは料理人に対してのリスペクトが足りない以上に料理とそれを構成する食材に対しての冒瀆に他なりません」

「!!」

「いただきます」はただの挨拶ではなく作ってくれた料理人への感謝と食材になった命を頂ける事の感謝だということを忘れていてはないのだろうか。食材への冒瀆は『生かしてもらっている』人間として最低最悪の行為だ。

「前回の食戟、そして今回の食戟であつたとされる不正行為に関しての処遇は追って連絡させて頂きます。それまで審査員の皆様は遠月への出入り禁止、ならびに遠月傘下の権限の停止。叡山九席については約一週間の謹慎処分とします……いいですね」

だれも私に言い返すことなく、この時間は終わった。ただ、私とリンドウ以外のその場にいる全員が白を通り越した土気色の死人染みた顔色になつていたことだけはたしかだった。

その後書類や他の仕事を終えて寮に戻ると——そこは既に出来上がつていた。

食べ散らかした跡地には裸エプロンの慧君だけしかいない。もう夜だし寝てしまつたんだろう。

「あ、司先輩お帰りなさい！司先輩の分もありますよ！」

「その前に一色、その、は、はだ、裸エプロン」

「はいー」

くるりと綺麗に一回転する慧君。やっぱりそうだよ、見違えじやないんだよね……

「司先輩？」

「な、なんでもない！なんでもないから!!けどあの、その……………」

「は、恥ずかしい、っていうか。目のやり場に困る、から」

おそろく私は赤くなっている。だって恥ずかしいんだよ今の慧君に目を向けるのもこういうこと言うのも！私は変態じゃない!!

前はあんなこと言ったけど……………本当に慣れられるんだろうか私……………ちよつと不安になってきた。

「うーん……………じゃあなるべく先輩の居るときは服を着るように……………善処します」

「……………うん、ありがとう」

はつきりと確約は出来ないんだ……………でも、今日はまあもういいかな。

「安心したしね」

「何かいいましたか？」

「なにも」

こうして、今日は慧君の作った料理で締め括られたのであった。

翌朝

「やあ、皆おはよう！」

「一色先輩が……………」

「エプロンの下に禪を履いてる……………」

「二「レアだ!!」「二」

「そういうことじゃない!!」

結局根本的な解決には至らず、いつの間にか元通りに戻っていました。

※善処…「無理だけど頑張ります」的な意味。

## 三十四皿目 ホンネ

叡山君や審査員たちのことは私の一存ではどうすることも出来ない。というかひよつとしたら出来るのかもしれないし、確実な手段としては評議会で過半数による決議があるけど今はそれどころじゃない。

いや本当に。

「今年も北海道か」

進級試験が、もうすぐそこまで迫っているのだから。

「やっぱり例年通りバス・列車移動の礼文島が最終、と」

資料を見ながら確認していく。……とりあえず危なそうなルートはなさそうだ。よかった。

関東と違つて北海道は雪が壁になつて当たり前の豪雪地帯なのでそれにさえ気を付けておけば大丈夫だろう。

ただ問題は……

「薙切薊に早くも感化される講師陣がいることか」

分かつている限りの人間、グレーな人間は除外してなるべく公平な審査をしてくれる人間を入れたつもりだけど……矢面で活動していた叡山君が行動出来なくなっている今、水面下の薙切薊がどうでてるのか分からない以上警戒することに越したことはないだろう。

「何より見逃すとは思えないしね」

えりなの方は大丈夫だろうか？極星寮で過ごすことで明るくはなつてきたけど、それ以上にこの頃あの子にとって精神的にくる出来事が多かったわけなのだし。

慧君に聞いてみようかな。

「一色」

「なんですか、司先輩」

「最近のえりなはどう？寮の皆に上手く溶け込めてる？」

「はい。新たに『えりなっち』っていうあだ名で呼ばれてすっかり馴染んでいます」

「そっか、よかった」

えりなのプライドの高さからひよつとしたら……なんて思っていたのは杞憂だったようだ。極星寮の皆がえりなについていてくれるのであれば大丈夫だろう。

「先輩も雍切君が気になるのであれば極星寮に泊まってはどうぞでしょうか？」

「え、でも私は……」

「遠慮しなくても大丈夫ですよ、先輩だったら皆大歓迎ですから」

と、いうわけで。

「ご馳走様でした」

こうして私は今日も極星寮で夕食を頂いている。

皆の反応？うん、慧君の言う通り皆快く受け入れてくれました。もう私にも馴染んできた。まああれだけ醜態を晒せば威厳も何もあつたもんじゃないしね！

「あ、あの、お姉さま」

「！えりな」

「その、お話が、あるのですが——」

「それは私一人の方がいい？」

「はい……」

こくりと頷いたえりなを見て私も頷いた。

「なら——一緒にお風呂入って話さない？」

極星寮の共同浴場は広い。広さでいうならそこらへんの銭湯よりかずつと大きい。……その代わり男女兼用ではあるけど。

「今日はもう皆上がったみたいで良かったね」

「そう、ですね」

とても言い辛そうに俯きながら相槌を打つえりな……せつかく二人きりなのに会話の間が持たない。

「ねええりな、極星寮での生活は楽しい？」

「ええ!? あ、そのなんというか、はい。皆には親切にさせていただいてい



るので」

「そっか、よかった。私ももつと気が利かせられればよかったんだけど咄嗟にここを選んでえり人には有無を言わせずって状態だったでしょう？うまく馴染めているのかちよつと気になってたの」

「……いえ、本当に皆良くしてもらっていて。そりやあ味見役だとか他にも色々巻き込まれたりもしましたけど……屋敷や講義では味わったことのない経験がいくつもあって、少なくとも後悔は全くありません。それにやつと洗濯機を回せるようになったんです!!」

「せ、洗濯機？……そう、ならよかった」

「あ、すみません」

「ううん。そこまで言ってもらえたならよかった」

ふふ、と笑う私を見て赤くなるえりなだったが、すぐに表情が切り替わった。

「あの、お姉様。今回の事はお父様が申し訳ありませんでした。お姉様にとんだご迷惑を……」

「えりなは何もしてないんだから気にしないでいいんだよ。それに、私がどれほど恵まれていたのかも自覚できたいい機会だったし」

十傑の皆や極星寮の皆にふみ緒さん、それから慧君。本当に皆には助けられてばかりだ。

「聞いても、よろしいでしょうか」

「うん？」

「なぜお姉様は、こんなに私に対して親身になって下さるのですか？」「……そうだね、可愛い後輩だからとか妹みたいだとか理由は色々あるんだけどさ」

理由は色々あるのだ。後輩で寧々のような妹的な存在で、こんな私を慕ってくれてとかとか。でもやっぱり……

「私と似てるから、かな」

「私が、お姉様と？」

「そ、ちよつと長くなるかもしれないんだけど……聞いてくれる？」

「は、はい！」

「私はね、この髪と目の色で生まれてきたから良くも悪くも目立って

たの。それを気にした両親、特に父親が結構教育熱心だったらしくて、習い事も学業も全部一番でなければだめだった。だから私も言われるがままに頑張った。頑張ったんだけど——それがいけなかった。いやむしろ結果的にはよかった、のかな？」

「どういうことですか？」

「当時の私にとっては両親のいう事が全てで……『他人の物を奪ってでも頂点に立て』と言われるがままに行動したら保育園でトラブル起こしちゃって。当然怒られたんだけど私にはどうして両親に怒られるのか分からなくて取った理由を言ったらそのまま距離を置かれるようになったの。それでこのままだと家庭そのものが危ないっていうことで一色のところに行くことになったんだ」

「そんなことが……」

「まあ、結果的にはよかったんじゃないのかな。私は一色や寧々たちと出会えたしこうして料理人への道に進むための進路への指針も出来た。両親も一時的に私がいなくなったことで家庭や自分たちを顧みることができた。お父様があのままだったらきつと、私は今ここにいないから」

「……」

「立場も境遇も全く違うからお門違いって言われても仕方ないけど。どうしてもえりなのことは放っておけなくてね。まああんまり役に立ててないのが現状なんだけど」

「ーそんなことありません!!お姉様は屋敷から出る時も、ここに来てからもずっと私を助けてくださいました!!」

「……そう思ってもらえてるなら、私も嬉しいよ」

それからえりなとは他にもいろんなことを話した。新戸さんの事、十傑の事、少女漫画の事、そして今日幸平と話した事——やっぱり話を聞いてみてここに連れてきて正解だったみたいだ。

「あ、も、もうこんな時間!?申し訳ありませんお姉様」

「いやいいよ。長風呂にはリンドウによく付き合わされてるし。それと、明日のえりなの講義は私も参加するから」

「ええ!?!」

「どうやら試験官をはじめとした関係者の何人かがきな臭いらしいから、大規模な試験に紛れて皆の妨害をしてこないとも限らないし。……実際、目に見えて反抗しているのはこの極星寮の皆と私たち十傑なわけだから。備えあれば憂いなし、でしょう?というわけではない? えりな」

「……ええ、もちろんです。こちらこそよろしくお願いします」

「うん。私はもう少しここにいていいけど——えりなはもう上がった方がよさそうだ。顔真っ赤だよ」

「あ……はい。では先にご覧いただきませう」

「体に気を付けるんだよ」

そしてえりなを送り出した後一人湯船で考える。

薙切薊の事、十傑の事、進級試験の事——進路の事。

そういえば進路についてなんて真面目に考えた事なかった気がする。

候補としてまず上がるのはリンドウと一緒に未開の地に行つて新食材発見の旅をする。二つ目は個人店を経営する。三つ目は遠月に就職する。

一番安定してるのは三つ目だ。その前に遠月からオフアールがあればの話だけど。二つ目の場合は資本金も今までの賞金や仕事の報酬や定期的なレシピの使用料とかそういう蓄えがあるから大丈夫。ただ私一人で回せるってなると月饗祭の時のように規模はかなり小さくなるだろう。一番自由なのは一つ目。一番振り回されるのも一つ目だけど。

「——そういえばまだ一色に返事返してないんだった」

なにもかもなあなあそのままこうして卒業間近まで来てしまった。今になってこうして押し寄せてくる辺り、学生までの負債は学生のうちに清算させようということなのだろうか。

……一人でいると情報の整理がしやすい代わりにどんどんマイナスなことも浮き彫りになるんだよね。よし、考えるの終わり。もう湯船から上がったらさっさとシャワー浴びて寝よう。

慧君の事は考えると思考が煮詰まるから特に——

後ろの入り口が開く音がして思わず振り返るとそこには慧君が

「え」

私は全裸、慧君も腰にタオルを巻いただけでほぼ全裸。お互いに状況把握が出来ていないのか固まったまま。

初めに言ったようにこの大浴場は男女兼用で一つしかない。ということは必然的に男子の時間と女子の時間があるわけで――

「ご、ごめんなさああああああい!!」

先に状況を飲み込んだ私は慌ててタオルをひつつかむと前を隠して一目散に大浴場から出た。

そう、私が入寮した時は私一人だけだったので失念していたのだった。

当然あの時の大浴場の使用時間は既に男子の時間に切り替わっており、悪いのはどう見ても私だ。慧君に悪い事しちゃったな……もしかすると私のせいでお婿にいけなくなるんじゃない?!

「ごめんね一色……」

神様、私あなたに嫌われるようなことしましたっけ？

やらかしてしまったことはもうどうしようもないけれど、せめて懺悔はさせてもらおう。……本当にごめん。

### 三十五皿目 甘さはまだ微糖

「さて、全般的な事はえりなと新戸さんからの講義で賄うとして。私は今回の試験で予想される実技課題についての特訓を受け持つよ」

「ええ!? 司先輩もやるの?」

「うん。今回の試験で私たちに対する妨害が無いとも限らないから、念には念をね。もし即興でなんとかしたとしても味で落とされたりしたら今までの努力が水の泡だ。せつかくえりなからもらった武器をより万全なものに仕上げる。いいね」

「はいー!」

「……ということ、今からさっきのえりなの授業の復習も兼ねてじやがいもで生地を作ってもらいます。しっかり水回ししてよく捏ねてね。ミスや制限時間内に出来なかつたりしたら、そのときは制限時間内に上手く出来上がるようになるまで何度でもやり直しさせるから」

『ひい!!』

さっきまで意気込んだ皆の威勢はどこかにいってしまい、恐怖に取りつかれたような真っ青な顔になっていた。いや結構余裕を持って制限時間設けたと思うんだけど……。

「司先輩も雑切さん並みにスパルタなのを忘れてたわ……」

「司先輩の人でなしー!!」

「口より手を動かさなさい。じゃないと終わらないよ?」

「うわーん!」

その繰り返しでついに迎えた進級試験当日。

「じゃあ私たちはこれで。全員がこうしてまた集えることを祈ってるよ」

「はいー!」

「うん、いい返事」

えりなと新戸さんと田所さんはいいんだけどね……

「わー、雪だー!!」

皆雪遊びに夢中だから、きつと聞いてないなこれ。

「……じゃあ、後ろの皆のことも、よろしくね」

「あ、あなたたち！」

まあえりなが皆をまとめてくれてるみたいだから大丈夫か。

ここからは私たちはそれぞれ別ルートになってしまおうので一旦お別れである。

そして慧君……

この間の事があってから目が合わせられない。

慧君はいつもと変わらずニコニコしてるから気にしてないんだろうけど、貞操観念的にあれはまずいと思うんだよ私は。

「一色」

「司先輩」

「この間はごめん」

「いえ、僕のほう「たとえその気がなかったとしても責任取るから!!」……え？」

「もし一色がお婿に行けなかったり、行く当てがなくなったりしたら私になんとかするから……見ちゃった私の言うことじゃないかもしれないけど抱え込まないでね」

「えーっと、司先輩？」

「うん、何かな？」

「それは「おーい司ー!もうそろそろ私たちも出発だぞー!」

「分かったー、今行くー!じゃあそういう事だから、詳しいことは後程」

言いたいことは言ったのでリンドウたちの待つ方へ走った。あとは慧君とまた一緒になった時にこれからの事について話せばなんとかなるだろう。

そんなふうにいるながら寮の皆と離れた私がすることは――

「何してんだよ司、携帯とノート見比べて」

「将来的に三人養う事になった時の概算を割り出してる」

「は？」

「こういうお金に関することは早めしておくに限る。」

私たちの進級試験は順調に進んでいき、寮の皆に対しては妨害もあつたらしいけど私たちの傾向と対策講座により快進撃を続けていた。私たち十傑に対して何もなかったのはまだ私たちが実権を握っているからなのかもしれない。

自由行動になったことで私は何もすることがなかったの一人で座って景色を眺めている（リンドウは寒さのせいで行動不能だ）。

この学園に来て本当にいろんな事があつたな……

入学早々食戟をすることになって。

せっかく寮に入ったのに一年足らずで退寮する羽目になって。

十傑入りして。

寧々ちゃんと慧君と再会して。

幸平と出会って。

慧君に、告白、されて。

「終わりにたくないな……」

あんなに憂鬱だった忙しない学園生活も終わりは刻々と迫ってきている。私は悔いなく卒業できるのかな。

「司先輩」

「はうえ!?……って一色か、どうしたの」

「司先輩が珍しく一人でしたので。よかったらどうぞ」

「ありがとう」

慧君からあつたかいコーヒーを受け取る。あつたかい……。

「もう終わっちゃうね」

「あつという間でしたね」

「うん。でもその分結構いろんなことあつたよね。幸平のこととか」

「……先輩、創真君の話を出すのってわざとですか？」

「え?……あ」

そういえば慧君は私に告白してくれてたんだった。男子もそういうの気になるんだろうか。

「あー、その。ごめん、ね」

「いいえ、別に気にしてませんよ……たしかに彼が来てから学園は変

わかりましたし」

「……うん」

気にして……るよね。うん。

「ねえ、一色」

「はい？」

「一色がもし私以外って言われたらどんな子が好み？」

「……司先輩以外、ですか。そうですね……長い髪でちよつとしたところが可愛らしくて、優しくて偏見で僕をみないでいてくれて、出来れば料理が出来る人で……すみません。やつぱりどう考えても司先輩一択です」

「そ、そっか」

「逆に司先輩は僕じゃだめですか？」

「!？」

逆に聞かれるなんて思ってたー!!今一番キツイ(答えにくい)質問だよそれ!!

「その、だめでも嫌でもないし、寧ろいいんだらうけど……」

「けど？」

「この間の、あの……お風呂のこと、思い出したら……恥ずかしくて目も合わせられない、から」

「!」

「も、もちろんこの間言ったみたいに責任は取るよ!一色と一色の奥さんと子どもはとりあえず一人って計算で私が人間三人を養うとしたらいくらくらいだろうとかちゃんと計算もしたし!だから心配はないよ!」

たしかにこれも伝えたかったけど、なんかあの時のことを思い出したら思考がうまく回らないというか、自分でも何て言ってるのか理解が追いつかないというか!!

「先輩、それは普通嫁入り前の先輩が男である僕に要求すべきものであって、僕が先輩に要求するものではないです」

「で、でも私どこかに嫁ぐ予定もないし!こんな面倒なやつだから、一色の方が大事かなって思ってる」



「……どうしてそういう！——先輩。先輩それわざとなんで  
すか？」

「わざとやるために徹夜するほど私、暇じゃない」

「——!!そうだった、瑛璃ちゃんは元々こうだったんだっただけ！」

「なんだかよくわからない言い合いになってきた。あれ、よく見たら  
慧君もなんか顔が赤いような？」

「いや、あの慧君がそんなわけないか。私も目が合わせられないから  
一瞬しか見えてなかったし。」

「と、とにかくそういうことだから!!安心して!ね」

「誤解を解かない限り僕としては納得のしようがないんですが」

「誤解も何も見ちゃったんだからさ」

「ですから」

「あのーお客様。司瑛璃様と一色慧様でよろしいでしょうか？」

「はい？」

「そろそろ出発の時間でして、申し訳ありませんが……」

「あ、わかりました……」

よく周りを見てみるともう制服を着た学生はほとんどいなかった。  
もしかして見かねて声を掛けてきてくれたのだろうか。こっちのほ  
うが申し訳なくなってくる。これ以上待たせるのも悪いので急いで  
駅に向かい乗り込んだ。まではよかつただけ……

「あれ？」

「人の気配がしない……」

他の車両も回ってみたが誰も乗っていない。どういうこと……

「もしかすると……」

「相手の罫にかかったみたいですね」

「やっぱりそうだよ。慧君がいてなんとか冷静になるように自分  
に言い聞かせてるけど、一人だったら今ほど落ち着いてはいられな  
かっただろう。」

『やあ、聞こえているかい。司瑛璃第一席、一色慧第七席』

「!あなたは」

車両に備え付けられたテレビに映ったのは——薙切薊だった。

## 番外編

### 一口目 1 食事という名の事件

「流石豪華客船。厨房もしっかりしてるなあ」

遠月を介しての依頼により私は今夜この客船のディナーを任されているので下見も兼ねて先に乗船している。

依頼者はたしか……鈴木財閥だったわけ。さすが世界有数の財閥だ。わざわざ遠月に依頼するなんて。

「この客船の完成記念。だったわけ」

なんでもこの客船はありとあらゆる最新技術をつぎ込まれた最新鋭の客船なんだとか。だからプレオープンも兼ねてセレブや著名人を招待して大規模なパーティーをするらしい。

でもいくら定評のある遠月からの派遣だっていつでも

「よりによって私が副料理長とか」

一体何人ここに収容されると思っているんだ。私は他人と一緒に料理するのが苦手だというのに。

なんでも財閥の相談役が手抜きは出来ないと私たち十傑を推して一度会食で私の料理を食べたことのある会長夫妻が私を指名したのだとか。

「……成るようにはかならないか」

自分で言っていて虚しくなるけどこれも仕事だ。現実を受け止めてしっかりと任務を遂行しないとね。

と気合いを入れていた私だったけどさ……

「まさか殺人事件に遭遇するなんて誰が思うだろうか!!」

被害者はこの客船の主雇用の方を担当していた人事総括の永倉吉信さん。私は遠月から直接派遣されてきたので知らないけど結構横暴な人だったそうで今回の人事にしてもかなり強引に進めたらしく、多方面で恨みのようなものを買っていたらしい。

この点だけ見れば私は無関係だ。

しかし問題は……

「(死因がアレルゲンの過剰摂取によるショック死……)」

つまり私たちが担当していた料理で起こったことなのだ。

しかも他のシェフは皆一緒作業していたけど私はほぼ除け者状態だったからなあ……同じ場所で作業していたとしても証言してもらえないってこと自体望み薄っぽうだし。

いわゆる黒に近い灰色の状態なのだ。

「犯人が分かりました」

「ほ、本当かね毛利くん！」

「勿論です。永倉さんを殺害した犯人は——貴女だ、司瑛璃さん!!」

やっぱり……そうなるよね……推理とか必要ないくらい状況証拠が盛りだくさんあるもんね。

でもまだ調べてる途中だよね!?なんでそんな不完全な状態で犯人指摘しようとしてるの?!

「貴女は彼を米アレルギーだと知りながらも素知らぬ顔で料理を提供し殺害した!」

「ま、待ってください!私はそんなことしていません!アレルギーのことだってお客様全員分を把握しています!」

「犯人は皆そういうものです」

だめだ、この場にいる全員が私だと思っている。

でも私だってやってもいないような罪を着せられるなんてごめんだ。

なにか、なにかないのか。反論できるような要素は……

「ちよつと待ったー!!」

「!」

聞き慣れた声に思わず声のした方を見る。そこには——リンドウたちがいた。

「な、なんだね君たちは!」

「なんだも何もねーよ」

「僕らは初めからここの招待客としてこの場にいましたからね」

「リンドウに一色……なんでここに」

「司が最新型の豪華客船に招待されたっていうから司の名前出して身内専用の優待券使った！」

「極星寮の方でもでも誰が行くのか話し合ってたんですけど、なかなか決まらなくて、結局ジャンケンで僕が勝ったので僕が行くことになったんです」

「な、なるほど」

だから最近何時にも増して上機嫌だったのか。と私が納得したことで場の空気を元に戻そうと刑事さんが咳き込んだ。

「ゴホン。お知り合いですかな？」

「あ、はい二人は同じ学園の同じ組織に所属する私の仲間です」

「遠月茶寮料理学園高等部三年。十傑評議会第二席——小林竜胆」

「同じく遠月茶寮料理学園高等部二年。十傑評議会第七席の一色慧です」

「なるほど、ご学友、ということですか」

「はい」

「それでなんだって言うんです？司さんが犯人ではないとでも？」

「そのまさかだっけいったらどうする」

「なにい?!」

納得がいかないのか私を犯人と断定した毛利さんはリンドウを睨みつけた。

「証拠はあるのか証拠は!!」

「毛利君、落ち着き給え！」

「証拠っていうけどそういうあんただって状況証拠でしか犯人特定の理由わかんねーんだろ」

「僕らの知る司先輩はそんなせつかく作った料理を凶器にするようなことをする人ではありません。食材を最高の状態で最高の料理として提供する。そんな料理の事に関してプライドの高い彼女がすることだとは思えません——再捜査、していただけますか？」

心強い二人の登場により私は犯人（ほぼ確定）↓犯人（仮）へと浮上したのだった。

## 一口目 2再捜査

「広ーい！凄く素敵！」

「でしょでしょ。なんとたって最新鋭の豪華客船なんだから」

俺たちは今園子の誘いで鈴木財閥の出資する客船「ハイリガー」にいる。園子の友人ということと特別優待なんだとか。

「で、なんでオメーらまでいるんだよ」

「あら、私たちは博士に付いてきただけだもの」

「そうですよ」

「コナンばかりごちそう食い放題なんてずりーぞ！」

「あゆみたちだってパーティー出たいよ！」

「まあまあ皆、大人しくするんじやぞ」

「えー」

「まあそうね。ここにいるほとんどは鈴木財閥に関わりのある大手企業の重役やその身内、果ては政財界の大御所なんかもいるみたいだし」

「流石鈴木財閥、ってことか。それに世界最新鋭の客船だからな」

「ええ、それもあるでしょうけど、それよりも彼らの興味を惹くものは別にあるみたいよ」

「どういうことだ？不思議に思っていると上機嫌で立ち話をする大人たちの声が聞こえる。」

「そういえば聞きました？なんでも今日の料理を担当するのはあの遠月の学生さんなんですって！」

「ええ存じていますわ、それも評議会の第一席なのでしよう？私今日という日を心待ちにしていましたの」

「そういえば君たちはMs ツカサの料理を口にするのは初めてだったか」

「バーネット様はご存知なのですか？」

「ああ、前に一度だけ会食だね。彼女の作る料理は神の賜り物と言っても過言ではないよ」

「まあー！」

遠月？ミスツカサ？

「今回の客船で出る料理が目的なのか？」

「ええ、今日この会場で提供される料理のほとんどは遠月の——世界有数の料理学校・遠月茶寮料理学園の生徒が提供したレシピだよよ」

「けど学生なんだろ」

「あなたがそれを言えるのかしら」

「うぐ」

「まあいいわ。それに遠月学園はそんじよそこらの料理学校とは違うわ。なんせ徹底的な実力主義の教育理念で毎年退学者を出しているくらいなもの」

「退学って……んな大袈裟な」

「嘘なんかじゃないわよ、現に遠月学園に在籍してただけで業界では圧倒的に支持される。卒業出来た日には出世コース間違い無しでしょうね。最近東京にオープンしたSHINO, S TOKYOのオーナーの四宮小次郎や霧のやの女将・乾日向子も学園の卒業生よ」

「ふーん……」

だからああやってお偉方が浮足立ってるわけか。

遠月茶寮料理学園ねえ……一体いくら積んだのやら。

「副料理長に従えと何度言ったら分かる!!」

「っ!？」

いきなり大声がして思わずその方向を見る。

すると怒り心頭になって怒鳴る険しい顔をした男と怒鳴られている白いコックコートをきた男がいた。

「し、しかし」

「しかしも何もない！あの小娘をここに呼ぶのに一体どれほど苦労したと思ってるんだ！もういい、下がり給え!!」

「は、はいー」

そしてそのままよろけるようにしてコックコートを着た男は去って行き、怒鳴っていた男もその場を離れていった。

「ねえ園子、あそこにいた人たちは？」

すると園子は苦い顔になりながらも蘭に聞かれたからか説明し始めた。

「さっき怒鳴ってたのは今回の人事総括の永倉吉信さん。それで怒られてたコックさんは料理長の戸田幸人さん。今回の人事のことで厨房の方はかなり揉めたらしくて、永倉さんが無理矢理推し進めたんだって」

「厨房が揉めたって?」

「この客船がいかに最新且つ最高かっていうのをプレオープンも兼ねたこのパーティーで示したかったらしくて、特に永倉さんはそういうのに妥協しない人だから、こないだのお父様とお母様の会食の話を聞いて遠月に依頼したらしいの」

「遠月ってひよつとしてあの遠月グループ?」

「そ。そのメインの遠月茶寮料理学園で一番料理の上手い生徒をわざわざ連れてきたらしいのよ。それで急遽そんなことになったもんだから色々しわ寄せとかがあっちこちで起こってるって聞いたわ」  
なるほど、だからあんなふうに……

「あ、でも料理の味は保証するわよ。確かに周りの人たちが期待するように遠月の子も作るレシピも殆どその子から提供されたものだけど、この日のために腕のいい人たちに来てもらってるわけだし」  
「そっか」

園子が言うなら大丈夫だと蘭は頷き、俺もその場を後にした。

それからしばらくした頃、事件が起こった。

永倉さんが食事の途中で苦しみだしたのだ。症状からして何らかのアレルギーに過剰反応を起こしてしまったのだろう。そのまま息を引き取ってしまい、到着した警察は殺人事件として捜査……していたのだが。

「(いくらなんでも犯人の断定早すぎるだろおっちゃん!)」

アリバイがなく、担当していた料理という事やこの日のためにスケジュールを滅茶苦茶にされたことなど確かに色々あったようだが、それでは説得力に欠けるしなにより彼女以外にもまだ候補はいるのだ。まず真つ先に疑われていた副料理長の司瑛璃（つかさ えいり）さん。

彼女が今回被害者の永倉さんによって急遽入れられた遠月学園の生徒。

今回のレシピやコースの構成など料理関係に関してを一手に引き受けていたらしい。そのうえ急遽入れられたものだからスケジュール管理において学園と彼女は奔走していたのだとか。

「私はやっていません。確かにレシピを作るにあたって食物アレルギーの有無などの情報はもらいましたけど、よりによって料理で人殺しなんてしません」

次に料理長の戸田幸人（とだ ゆきひと）さん。

今回の人事変更で一番永倉さんに振り回されていたのを俺たちを含め何人か見ているらしい。

「そうですね、現に私が彼女からいただいた今回のレシピには米が別の物で代用されていましたし、全員そのレシピで作っているのでありえませんが」

そしてウェイターの間ⓧ薫（まさき かおる）さん。

彼に関してはアリバイがあやふやだというのと、永倉さんを快く思っていないかった人物の一人であるということから。

「つーかなんで自分まで……死因って料理なんですよね、なんで飲み物と出来上がったの持つて行くだけの自分まで疑われてるんですか」「すみませんが、もう少しお待ちください」

「待つても何も、その女なんでしょう犯人つて。さつき探偵さんもそう言っていましたし捜査するだけ無駄じゃないんですか?」

「し、しかしですね」

「どうやら警察やおっちゃんたちは被疑者を落ち着かせるのに手こずっているらしい。」

「(一回直接厨房を調べてくるか)」



「ねえ、そのきみ」

「へ？」

「これからどこへ行くつもりなんだい？」

声を掛けてきたのは司さんと関わりのあるという男。たしか——  
一色だったか。

「え、えつと。僕、おじさんに頼まれて厨房の写真撮ってこないといけないんだ」

「へえ、じゃあ僕も一緒に行ってもいいかな」

「で、でも……」

「邪魔はしないから」

やばい、この人顔は笑ってるけど目は笑ってない。子供相手にする表情じゃねえだろこれ。

「分かったよ。でも僕、厨房に行つてこいつって言われたんだけど場所が分からなくて……」

「それについては大丈夫さ、司先輩に付き添ってる竜胆先輩から地図データを送ってもらったから」

それじゃあ行こうか

そういう笑顔の男に、俺は付いて行くしかなかった。

### 一口目 3 真相と後日談

厨房に着くと一色は辺りを物色し始めた。俺も疑われるわけにはいかないので写真を撮っていく。

厨房や近場の冷蔵庫にはこれと違って手掛かりになるようなものはなかった。やはり死因が死因なだけに決定的な証拠は見つけづらいな……

そう思いながら奥へと歩いていくと不自然に盛り上がったゴミ箱が視界に入った。

「(どうということだ?)」

今まで歩いてきた厨房のゴミ箱は全て中身が空だったのにも関わらず、ここのゴミ箱の中身だけ捨てられていないなんておかしい。しかもゴミ箱の内容物が見えないようになるのかやや乱雑に紙やボール紙、キッチンペーパーなどで蓋がされていた。

「(とにかく開けてみない事には分からないからな)」

案外呆気なく外れたそのの中身を見て俺は自分でも気づかないうちに声を上げていた。

「一色さん、これ見て!!」

「どうしたんだい——それは」

俺の大声に振り向いた一色は俺の開けたゴミ箱の中身を見て絶句した。無理もない。本来ならばそこにはないはずのものが入っていたのだから。

ゴミ箱の中に入っていたのは——おそらく本来出されるはずだったもの。永倉さんの命を奪ったものと全く同じ料理が見るも無残な姿に変わり果てていたのだから。

「奥の方にあつたゴミ箱の中身が盛り上がったから蓋になつてた紙を剥がしてみたんだ。それにこの蓋にされてた紙……」

「これは……司先輩のレシピ」

ぐしゃぐしゃになつていたそれを見やすいように伸ばして調理台の上に広げた。

「ここ、黒く塗りつぶされて米って書いてあるよ」

これだけ見れば司さんがわざとしたようにも見せられるだろうが、わざわざ一緒にまとめておく必要はない。ひよつとしたら司さんが犯人になるように仕向けられているのだろうか？

「司さんが料理してるとき一緒にいた人とかつていないのかな？」

そう聞くと一色はなんとも言えない顔になった。

「たぶんそれはないんじゃないかな」

「どうして？料理っているんな人たちが一緒に厨房使ってるんでしょ？」

「司先輩は過去に調理実習のパートナーに嫌がらせされたり他にも色々あつて極力誰かと一緒に調理しないようにしているんだ。一緒に料理しても問題ないのは僕ら十傑のメンバーか彼女に認められた一部の生徒だけなんだ」

マジかよ。そんな難儀な人だったのかあの人。

「あの、前々から気になってたんだけど一色さんたちのいう『十傑』ってなんなの？」

「ああそうか、ごめん。説明し忘れてたね。十傑っていうのは——」

十傑とは遠月茶寮料理学園の生徒の中から選ばれた成績上位者十名で構成される委員会です正式な名前は『遠月十傑評議会』。

十傑は学園の最高決定機関であり、学園の持つ権力と財力の一部を手中にしている存在で、十傑の発言は教師よりも強い権限を持っている。

料理の研鑽のためならば学園の——ひいては遠月の国家予算並みの予算を使う事を許され、さらに言うなら学園の運営方針や、学園長を交代させる事も十傑メンバーの過半数が賛成すれば可能だという。まさに学園の最高決定機関であり財力と権力を掌握する実質的な支配者たち、らしい。

『料理が全て』な学園において、行使出来る権限はかなり大きいんだ。席次が上になればなる程増大していく仕組みだよ」

「……凄いなだねお兄さんたちって」

「僕なんかまだまだだよ。本当に凄いののは司先輩さ」

「司さんが？」

「そう。彼女は現第一席だからね」

「ええ!？」

「っていう事は実質学園のトップじゃねーか!!」

「僕ら十傑は学園の顔としてよくこういう場で腕を振るったり、コンクルの審査員だったり様々な仕事をこなしているのだけれど。今回のことはいきなりだったものだから司先輩もさすがに参ってたなあ。『レシピの印刷ちゃんとしてる暇ないから全部私の手書きのをその場で印刷してもらおうしかないんだけど大丈夫かな……もし読みにくいかでちゃんとレシピ通り作ってもらえなかったらどうしよう……』ってね」

「あ、あはははは……そ、そうなんだ」

「うん、彼女は完璧主義者だから特にね」

恐ろしい真実ばかりが一色の口から明かされていくのに対して俺は呆けて笑いながら同意するしかなかった。

おっちゃんも俺も、無知は罪だと痛感せざる負えない。

「——だから彼女が永倉さんを料理で殺したとは思えないんだ」

「え」

「彼女は自分らしさを乗せない究極の料理を追及しているんだ。常に食材への気遣いを忘れずに寄り添って食材を、命を尊ぶ彼女はそれが台無しになることを誰より嫌がるから。そんなことを自分からやるような人じゃないんだよ。ましてや命を生かすための食事で殺すなんて」

「……」

信条と完璧主義……一色の言い分を信じるのなら確かにこの犯行は司さんがしたものと到底思えないものだ。予定が狂ったとしてもそれをちゃんとやり切ろうとしていた節もある。なら一体だれが……?」

「そうだ、司先輩なら何か手掛かりになるものを知っているかもしれない!」

「え、それってどういうこと」

俺が言い切る前に一色は携帯を取り出すとある番号に掛け始めた。

《《こちらりんどー先輩だぞー》》

「竜胆先輩、今どこにいますか？」

《《おー、一色。あたしたちは会場の隅っこで椅子借りて休んでるところ。警察とか探偵とかはちよつと離れたところにいる》》

「……何かあつたんですか？」

《《いや、特にこれと言って進展はねーんだけどあのなんて言つたっけウェイターのやつ。アイツが待ちくたびれて警察と司に当たり散らしたんだよ。そんでこの料理人を中心に益々司が悪いみたいな空気になつてき。ちよつと司も精神的にあんまりよくないから一旦引き上げたんだ》》

「……そうですか」

《《で、そつちは？》》

「僕の方は厨房で司先輩のレシピのコピーと捨てられた料理を発見しました。あの、確認したいことがあるので司先輩に聞いてもらつてもいいですか？」

《《ん、ああ。司ー》》

《《代わつたよ》》

「司先輩!?大丈夫なんですか」

《《大丈夫とまではいえませんが、こうして質問に答えるくらいならね。それで聞きたいことつて?》》

「——はい。司先輩は今日盗聴器と録画カメラ、持って来てますか？」

《《あ、ああうん。念のために持って来てたと思うけど。でも何も映つてないと思うよ。今日も基本的に私一人で作業してたし》》

「それでもいいんです。設置した場所を教えてくださいませんか?手掛かりになるかもしれないので」

《《……そつか。それならたしか——》》

「ねえねえ目暮警部」

「なんだね？」

「謎が解けたから被疑者の三人とすぐに厨房に集まってほしいっておじさんが」

「そ、それは本当かね!？」

「うん。でもあんまり大事になっても困るかもしれないから刑事さんたちと被疑者の人たちだけでいいって」

「わかった今すぐ向かおう」

そしてところ変わって厨房には既に麻醉銃を受けて眠っているおっちゃんと目暮警部をはじめとした警察関係者、被疑者の戸田さんと間崎さん。そして最後に一色に付き添われてきた司さんがやって来た。——これで全員揃ったな。

「それで毛利君。真犯人が分かったというのは本当かね」

『もちろんです警部殿』

「はいはい、どうせそこの女でしょ？」

「君！口を慎みなさい!!」

「ちっ……はい」

『さて皆さんに集まっていたいただいたのは他でもない。永倉さん殺害の件についてです。司さん戸田さん間崎さん、あなた方にはそれぞれに大なり小なり動機がある。料理に触れる機会もね。実際、司さんに至ってはその料理に関して全てを一任されていたようです。そうですよね、司さん』

「は、はい。レシピも手書きではありましたがコピーして全員に配りましたし、コースの構成も殆ど私が考えました。それで今日万全を期して厨房に入ったんです」

『貴方が担当していた料理は難易度が高く並大抵の料理人には手に余る代物だったのだとか。だから他人と一緒に料理が出来ないあなたがその一品を全員分作っていたというのは間違いありませんね』

「……はい」

「ちよ、ちよつと待ってください毛利さん」

『どうされました、高木刑事』

「他人と一緒に料理が出来ないってどういうことですか？」

『司さん、話していただけますね』

「……………はい。私は中等部の時に嫌がらせで料理に異物を混入されて以降、親しい人間としか共同での調理が出来なくなりました。ですから今回もそうさせてほしいと永倉さんをお願いしたんです」

「そんな……………」

『しかしそれを黙っていないなかったのは他の配置換えに納得していなかった料理人たちだ。そうですね、戸田さん』

「はい。司さんの事情を知らなかったものですから……………それに無理な配置換えで手が回らなくなることも考えてよく永倉さんに掛け合っていたんです。……………尤も、最後まで聞き入れてはもらえませんでした」

『そう、そして戸田さんの予想は当たってしまった』

「ええ、メインの方が予定より遅れてしまい……………魚料理を担当していた司さんが盛り付けを終わったのを機に頼み込んでメインの方に加わってもらったんです」

『そしてそうしている間に司さんが作った魚料理が運ばれて行き米アレルギーだった永倉さんはショック症状を引き起こした……………この時間帯、あなた方はどこに居ましたか？』

「メインの方に追われてたので厨房のオーブンのところにいましたけど……………」

「私입니다。お互いが証人に成り得ます」

『ではその時間帯、あなた方は例の料理の前にはいなかったと』

「はい」

『間崎さん、あなたはどうかなんです？』

「は？だからウェイターとして配膳……………」

『おかしいですねえ、あなたは人手が足りないときの補欠で基本的には会場の飲み物の給仕と食べ終わった食器の回収の仕事だとシフト表ではなっているのですが』

「か、関係ないだろ！あの時は厨房も何もかも忙しくて猫の手も借りたくらいだったんだよ！」

『なるほど、ではあなたは魚料理には関わっていないと』

「だからそう言っただけ——」

『分かりました。ではここに居る皆さんに見ていただきたいものがあります。コナン』

「はい」

厨房の奥から取って来た盗聴器と録画されたカメラのデータの機材にセットし起動させる。

そこには、間崎さんが誰も居ない司さんが使っていた厨房へ入ってきた映像から、薄手の手袋を付けて米粉を料理のソースに混ぜ合わせ配膳台に乗せて去って行く姿が映っていた。その途中で一つ崩してしまつたらしくコピーされたレシピを塗りつぶして訂正しそれで蓋をする形でゴミ箱に捨てている姿も鮮明に映っていた。

『間崎さん犯人はあなただ』

「なぜ、こんな犯行に？」

「なぜって？ムカつくからだよ！あの偉ぶった永倉のやつもこの女も！人より才能も地位もあるからって見下してきやがって!!だからやったんだ、一瞬で俺らみたいなの、俺らより底辺になるように。あんたがあのまま間違えたままこの女を警察に突き出せば完璧だったのに。途中で変えやがってこの役立たず!!」

「なっ」

「あなたは本当に見下されていたんですか？」

その場にいる全員が間崎さんに対してなにか言おうとしていた——ののだが。

それは一色の声で霧散した。

「はあ？よくあるフォローかよ、バカじゃねえの「いえ違います」……は」

最初は全員が犯人と同じように司さんのフォローなのかと思っただけ聞いていた。しかし一色は違うという。

「真崎さん、本当に司先輩はあなたのことを見下して……いえ見ていたんですか？」

「どういう、意味だよ」



「そのままの意味です」

「一色ー司ーもう終わったかー」

「あ、リンドウ」

「帰ろうぜー私もう腹へった」

「分かりました、先に行つててください」

「おーいこうぜ司」

「う、うん。じゃあ先行つてるね」

「はい」

そして二人を見送ると一色は真崎さんへ視線を戻した。

「なぜあなたは司先輩に見下されていると思つたんですか？あなたが前に言つていたようにウェイターのあなたと料理人の司先輩の間は薄いはずなのに」

「それ、は……」

真崎さんは言葉に詰まった。しかし冷たい表情の一色はそれを見て呆れを含ませた表情になった。

「なるほど。確かにあなたのような人は過去に何度か司先輩は遭遇しています。ストーリー行為や傷害沙汰など、ありとあらゆることに遭つています。ですが、誰一人として彼女の記憶には残っていません。真崎さん、司先輩はあなたに話しかけてきましたか？あなたと目を合わせましたか？彼女は——あなたを認識していたんですか？」

「——っ！」

「真崎さん、司先輩は料理と食材を考えて調理しますが——他人を考へて調理なんてしていません。それどころか視界にすら入れていない事がほとんどなんです。評議会の席次を懸けた食戟……料理対決の場でさえ彼女は対戦者どころか審査員のことさえ考えていない。彼女の中にあるのは料理のことだけなんですよ」

「そ、んな」

間崎さんだけでなくその場にいる一色以外の全員が息を呑んだ。

それではまるで……

「ひ、ひとでなし……」

誰かが呟いた。すると一色は穏やかに微笑んだ。

「では、言うべきことも言いましたし僕もこれで失礼しますね」  
そう言っておつちやんと警察、間崎さんを見る目はさっきの穏やかな表情とは裏腹に氷のように冷たいものだった。

一週間後の一席執務室

「そういえば司先輩この間の事件、どうなったんですか？」

「んー？解決したよ」

「でも昨日警察の人に呼び出されてましたよね」

「ああ、なんか捕まった人が私と面会したいって言ったらしくて」

「それで、ですか……大丈夫でしたか？」

「うん。なんか話してるうちに相手の口数が減って行って半ばに差し掛かる頃には既に声出してくれなくなってるね、どう会話を成立させたらいいのかわからない状態になっちゃって。結局面会時間の八割くらいを残してそのまま帰ってきた。——あ、そういえば一色、あの後あげた私のレシピ本ってどうしたの？」

初心者向けの段階的に難易度が高くなっていくタイプの本だ。幾分か改造はしたけど中身は一、二ページくらい付け足しただけで大して内容は変わっていない。たしか慧君も一冊持っていたはずなので今回渡したそれを持つ必要はないと思うのだけけれど。

「あれなら然るべき人に渡しましたよ」

「え、でもあれってあの時のレシピも——」

「でも月饗祭も終わった今、僕らが出来るお礼はこういうことぐらいしかありませんし、大丈夫だと思いますよ。娘さんは料理をする人らしいですしきつと無駄にはなりません」

「そ、そう？でも私手紙書いてないよ」

「その辺も僕名義で出したので大丈夫です」

「さ、さすがだね」

流石慧君。仕事が早い。

「ねえ司先輩」

「何？」

「司先輩は、いざとなったら人を殺しますか？」

慧君からきたのはなんとも哲学的な質問だった。でも答えは決まっている。

「殺さないよ」

「何故？」

「だって人間は食べれないでしょう。倫理的に。自分の身になるわけでもないものを殺す必要なんてないよ」

そう、食べる必要のないものは。食べられないものは殺す必要はない。殺す時間労力後始末どれも無駄な消費だ殺してそれを食べられるわけでもないのに。得られるものがないというのに。

「なら倫理的にそれを許されたなら？」

「許されたら？……————そうだね、私だったら……」

一口目 ≡ 4 好奇心は猫をも殺す

「では次に帝丹小学校課外授業受け入れの件について」

「はい、まず帝丹小学校ってどこなわけ？」

「帝丹小学校は米花市米花区米花町にある小学校よ。どうやら今回はその一年生が来るみたい……資料にあったでしょう。読んでないの？」

「だって俺別に子どもとかどうでもいいしー」

「はあ……先輩、久我の事は気にせず続けてください」

「あ、ああうん、じゃあ続けるね。それでその子たちは一日体験入学っていうことで軽い校内見学と簡単な調理実習、最後に少し話して質問とかに答えて終了……の流れなんだけど。今回は正式な遠月のイベントじゃないから私たちは引率の先生たちの案内役に二人くらいでいいみたい。だれかやる人いない？」

「子供とか面倒」

「ももはそのまま紛れ込みまうもんなー」

「リンドウうるさい」

「しかし背の高い俺や女木島がいったところで怖がらせてしまうのではないか？」

「となると必然的に行けるのは限定されるか……」

「じゃあいけるとすればリンドウ、寧々ちゃん、慧君、久我……たしか叡山君とえりなはそれぞれに仕事があるから学園にはいないだろうし、私は商談と一部書類の決裁があるから初めからの参加は無理だから……」

「じゃあそれぞれ前半と後半に分けましょうか。前半はリンドウと久

我、後半は寧々と一色で」

「ええ!? りんどー先輩と一緒?!」

「おう、なんか文句あんのかよーくがー」

「ぐえ、くび、首締まって」

リンドウに思いつ切り玩具にされる未来しか見えない(というか今も既に玩具にされている)。でも寧々ちゃんと一緒になって喧嘩が絶

えないよりはいい組み合わせだと思っただよ。うん。

「司先輩は今回どうするんですか？」

「私は商談とか仕事が入ってるから基本的には出ないよ。でも早めに学園に戻るつもりではあるから何かあった時は執務室か私の携帯に連絡お願いね」

「わかりました」

これで分担も決まったし、後は心配ないだろう。にしても米花町か……なんか引つ掛かるんだよね……

とりあえず決まった以上考えていてもどうしようもないのでこれについて考えるのを放棄することにした。

「……」

慧君の意味ありげな微笑みが何となく怖かったことだけは記しておこうと思う。

当日、私は予定より早めに商談や外部での仕事が終わりに執務室に帰って来ていた。

十傑としての仕事とか書類はこういう空き時間を活用してやっておかないと後々後悔することになるのだ。

「これでこの書類は終わり、と」

気付けばそろそろお昼近いので一応形だけでも休憩はとっておくべきだろうか。と席を立つと扉が若干開いていた。

そしてそこからこちらをのぞき込んでいる。小さな人影。

「どうしたの？迷子？」

「あ、えっと、そのお……」

近寄ってドアを開けて目線を合わせると恥ずかしいのかもじもじとうつぶわいてしまう。うーむ困った。子供の相手ってあんまりしたことないからなー……と思っているとその子は学園の入場パスを首から下げていた。

ああなるほどこの子、今日の一日体験入学の小学生か。

「……とりあえず中に入って何か食べる？ちよとど休憩しようと思っ

てたところだからお菓子とお茶があるの」

「わあ、いい、いいの?」

「どうぞ」

そうして子どもを招き入れるとおやつとして作っておいたタルト  
タタンと甘めのミルクティーを差し出すと勢いよく食べ始めた。

「美味しいー!」

「口に合ってたよかったよ。ところで君の名前は?見たところ今日の  
日体験入学生みたいだけど……」

「歩美。吉田歩美っていうの。おねえさんは」

その時吉田さんの言葉を遮るようにして私の携帯が鳴った。

「ちよつとごめんね」

「う、うん」

「——もしもし」

《司先輩》

「寧々。ちよつどよかった実は」

《すみません、今回の体験入学の児童が数名行方不明になってし  
まって……》

「ああ……おそらくそのうちの一人の女の子なら今私の執務室にいる  
よ」

《え!?……りよ、了解しました》

うんわかるよ。だって私の執務室って案内する棟とは別棟どころ  
か一番遠いもんね。……この子どうやってここまできたんだろう。

「じゃあ、他の子たちも探すから名前と特徴教えてもらえる?」

《はい——》

寧々ちゃんから教えてもらってメモしていく。

なんでも一班丸ごといなくなってしまったらしくついさつき点呼  
の際にそれが発覚したらしい。学園は生徒の人数も多いし、それ以上  
に敷地も広大だから迷子になったらほぼ遭難と変わりなかったりす  
るからなあ……

寧々ちゃんの方も他の皆に連絡を回してくれるそうなのでひとま  
ずは……

いやもし集合場所に行つて戻つてない子がいたら校内放送するか。小学生の行動力をなめてはいけなないと最近よくテレビでもやってるし。

「お姉さん?」

「ああごめんね、今君たちを引率してた先生たちから連絡がきてね。君を連れてきてほしいって」

「えーでもまだ食べ終わってないのに」

「なら残りのタルトタタンはお土産用として君にあげるよ」

「いいの!?!」

「うん。ちよつと待つてね」

タルトタタンをラッピングして手渡す。それなりに可愛らしく出来たが、店に出すものではないので出来栄えについては気にしないでもらえると思う。

「じゃあ行きましょうか」

「はい」

そしてそのまま集合場所に到着すると子どもを引き渡した。

「あの子たちは?」

「それがまだ……」

「わかった。私の方から校内放送で呼び掛けてみるよ」

「ありがとうございます先輩」

「僕も付き合いますよ」

「いや今回は大丈夫。放送するだけだし。また迷子になる子が出ないとも限らないからこの場をよろしくね」

「……分かりました」

慧君と寧々ちゃんにその場を任せて放送室へと急いだ。

『皆さん授業中に失礼します。緊急の校内放送です。今日一日体験入学生として来て頂いている帝丹小学校一年生の江戸川コナン君、小嶋元太君、円谷光彦君、灰原哀さん——この四名を見掛けられましたら至急十傑評議会司瑛璃まで連絡をお願いします。繰り返します——』

それから私が執務室に戻って数分で連絡がきた。

「はいこちら第一席執務室」

・あー瑛璃先輩で合ってます？

「ああ幸平、どうしたの？君から連絡って珍しいけど」

・実はそのー、先輩の言ってたっぽい子らを見つけたんで今俺ら授業終わったところなんで集合場所に連れていきますわ

「ありがとう。私も今から向かうから」

そうやって私も再び執務室を出た

——のはよかったのだが。

「司先輩も来たことだし、説明してくれるわよね？」

なんでこんな凍てついた空気になってるのここ!?

寧々ちゃんが問い詰めると件の子たちは俯いていた。

状況が分からない私は慧君に説明を求める。

「私のいない間になにかあった？」

「司先輩のいない間というか、彼らの場合迷子になってからというか……」

「……詳しく聞かせてくれる？」

「ええ……」

慧君と寧々ちゃんが幸平から子どもたちをあずかった時に聞いた話によるとどうやら彼らは私のところにきた子を探して同じく迷子になっていたらしい。

皆でいつものように迷子になった子の行き先を推理してしているうちに、大柄な子が空腹に耐えかねて食材や料理を食べてしまったのだとか。それに気付いた全員でその子を注意したものの、そこに入っていた料理が複数あったことから結局全員食べてしまったところから授業が終わって移動していた幸平が遭遇し今に至るということだ。

「だからあんなに寧々が厳しいのか」

「いえ、確かに食材が足りなくなるとは死活問題ですし、スチコンを開けたことで中断された料理もありますけど……彼らが食べて食材が足りなくなると授業を変更せざるを得なくなったところや調べて散らかしたまま放置された教室もあって苦情が来ているんです」

「……なるほど」



そういうのって私たちの方に回ってくるようになってるからなあ……

「この度は本当に申し訳ありません！」

「いえこちらの監督不届きもあります。頭を上げてください……それに子どもたちに事情を聞きたいので」

「！」

「だ、だってよお朝食を損ねたから腹へって仕方なくて……」

「すみませんでした」

「ごめんなさい」

「だそうですよ、司先輩」

慧君に促されてその子たちの前に立つ。……あれ、メガネの子どこかで見えたような？なんか顔色悪いけど大丈夫だろうか？

いや、皆に怯えられてはいるんだけどメガネの子は一層際立っていた。

「その前に一色、不足分の食材の手配をお願い。寧々はそれぞれ被害のあった教室の担当者に聞き込みして壊れた備品とかがないかの確認、もし酷い有り様なら業者に入ってもらって」

「はい」

これでとりあえず大丈夫だろう。

「さて、あとは君たちについてなんだけど」

「！！！！」

「ま、まってー！」

その子たちと私のあいだに入ってきたのは執務室にきた子だった。「待って天使のお姉さん！皆は悪くないの、歩美がお姉さんの後を付いて行っちゃったから……」

天使？

「ええと、君が私の後を付いてきたってことで合ってる？」

「う、うん。何もかも真っ白で綺麗で天使様みたいだと思ったの。それで見学の時にお姉さんが歩いていくのを見て追いかけてなくちゃって……ごめんなさい」

うん、それはよくある幻覚だから忘れたほうがいいと思う。でも必

死に伝えようとしてくれているので言わないでおくのが吉だろう。

「とにかく子どもといえど行動の責任はあります。君たちは家に帰ったら今日の事を正直にご両親に説明すること、いいですね」

「えー……」

「ちゃんと言えますね？」

「」「はい……」

とりあえずこれで今回はなんとか収まり、あとは何事もなく終わった。

あとでちゃんと誤解を解いておかないとな……

オマケ

「あれ、このスチコンに入ってた私のおやつと試作品は？」

「それも被害に遭ったスチコンの一つです」

「え」

## I F あるトリップ人のしくじり

春。

待ちに待った学園生活が今幕を開けようとしている。

私、堺琴音（さかい　ことね）は今日から遠月学園高等部一年生にして極星寮生である！

……ここだけの話、私は転生トリッパーである。夢の中で神様的な人に会って願いを叶えてもらったのだ。

ズバリその願いとは『食戟のソーマの世界に転生』である！そして転生特典として料理の才能をもらった私は今のところ敵なーしいや、あの高飛車なえりな様とかには関わってないけど。だって怖いもん!!

中等部からいるから入学も簡単だったし、本編はここからだ!!

あわよくば推しメンの司先輩とゴールイン……なーんちゃって☆  
……………なーんて思ってた。思って、いた。

高等部の入学式、までは。

『在校生代表——十傑評議会第一席・司瑛璃』

え？司……えいり？えいしじやなくて？

そして透明感のある高い美声。あれ？石田ボイスじゃない？

壇上に上がったのは美しい長い銀髪に陶器のような真っ白の肌をした——まるで女神のような容貌の女子生徒だった。

成り代わりかコノヤロー!!

そして私は情報収集することにした。

司瑛璃。遠月学園高等部三年生。一年生の秋に十傑と互いに退学と席次をかけた食戟をして圧勝しそのまま第五席になる。その後二年生に上がると同時に三席になり、当時の一席と四席を打ち負かしたことで一席になる。

講師たちの間ではその苛烈とも取れる料理への姿勢から『講師潰し』と恐れられている。

成績優秀、百戦錬磨、才色兼備……というのが総合的評価。

そんな功績を持ちながらも彼女自身は控えめな性格であり、自ら進

んで十傑以外の輪の中に入ろうとはしない。

……こんな完璧超人、メアリースーっていうか僕の考えた最強キャラ以外いねーだろ。うん。

……私も人の事言えないけど、キャラ狙いなのかこの人。夢小説に悪女とか猫かぶりのキャラはほぼ付き物といっても過言じゃないけどさー……

とりあえず高等部に上がりたての今、学園を敵に回すのは神様のギフト付きの私でも不味いのでここは静観を決め込んでおく事にした。はず、なんだけど。

「幸平創真は君から見てどんな生徒？」

「……はい？」

なぜか私は今、その苦手な先輩に話しかけられている。教室に射し込む夕日に照らされた彼女は同性の私から見ても嫌味なくらい美しい。

「ああごめんね急に。私は」

「三年生で十傑評議会第一席の司瑛璃先輩ですよ。知ってます。それで、そんな先輩が一介の一年生である私になぜ質問を？」

かなり刺々しい対応になっている。あれ、おかしいな。基本的に穏やかな性格で相手に先入観を持たせないって設定が働いてない。

「君のクラスメイトの幸平創真の事を知りたくてね。それでこのクラスに来たんだ」

「へー、なるほど。先輩は幸平君にご執心なんですね」

「執心っていうか……まあそうだね。彼に興味を惹かれているのは確かだよ。えっと、教えてくれるかな？」

「お答えする義務はありませんよね？」

「まあそうなんだけど」

「ならすみませんが私はこれで。今日は行くところがあるので」

「そうだったんだね。ごめんね時間取らせて」

「失礼します」

取り繕う事もなく私は教室を出た。

司瑛璃——彼女は申し訳なさそうな憂いを帯びた苦い笑顔でさ

え美しかった。

## IF あるトリップ人のしくじり2

あの夕日差教室の一件。あれから私は司瑛璃さんとは会っていない。

とにかく司先輩のポジションに彼女がいるということは司瑛士はこの世界に存在していないということである。

……なんのためにこの世界に転生したんだろう、私。

もういつそのこと次点だった一色先輩に乗り換えてしまえば攻略が楽なのかもしれない。一色先輩は私のギフトがなくても基本的に寮生皆に優しいし。あの脱ぎ癖を差し引けば正統派イケメンだし。完璧超人だし。原作には慧寧要素もあったけど、その辺もギフトでなんとかしてしまおう。

それも間違いだと気づくのも早かった。

秋の選抜に向けてお題のカレーのために皆が奔走するなか、私もスパイスの買い出しから帰って来た時——学校の調理室に移動しようと廊下を歩いていたときのことだ。ちょうどそこには一色先輩がいて、窓の外に視線を向けていた。

「――」

「（一色先輩？窓の外なんか見てどうしたんだろ？）一色先輩……」

私の声は最後まで続くことなく舌に乗る前に消え失せた。

だって、一色先輩が見ていたのは——司瑛璃さんだったから。

いつもならこっちが話しかけるより早く気付いて私たちを驚かせてくるような一色先輩なのに、今は私に気付くことなくただじつと彼女を見つめている。

「――瑛璃ちゃん」

眩くように優しい、けれど切ない声で司瑛璃さんの下の名前を呼んだのだ。司瑛璃さんの名前を呼ぶ人はこの学園にはほとんどいない。あのいつも一緒にいる十傑の人たちでさえ名字で呼ぶのに。なぜ一色先輩は名前で呼ぶのだろう。

その瞬間、もう既に悟っていただろうに。私は考えないことにした。

選抜が終わって私もなんとか勝ち残った。最初はあんなに楽しみにしていた紅葉狩り会も、司瑛璃の存在を知った時点で気が重い。

実際彼女は前に話しかけてきたくせに私に対してなんの反応もなかった。目線や仕草で意図的に避けられているわけではなく、本当に覚えていないようだった。なんて人なんだろう。

結局紅葉狩り会も彼女が中心になって終わってしまった。

月饗祭、チャンスだと思って極星寮の芋煮会メンバーになった。最初はよかった。でも司瑛璃さんがやって来た途端その場の空気が変わった。一色先輩は彼女をエスコートして一番いい席に座らせる。あそこはだれにも座らせなかった席だ。逆ハー要素ここに極まり！なんてお気楽な事は言えない。だって一色先輩は真剣だった。

「ねえ涼子。あれってさ、絶対一色先輩一席の先輩のこと好きだよね」「けど完全に弟扱いだったわね…」

「一色先輩フアイト!!」

同級生の声が刺さった。

そのあとだつてえりなを連れてきたのは彼女だったし、度重なる無茶を叱るのは一色先輩だった。私たち寮生には絶対にしないような激しい怒り方。皆はただ呆然としていたけど、私は寂しかった。私はあんな激情をキャラたちに向けられた事があつただらうか？

「(あーあ、つまんない)」

せっかくこの世界にきたのに。せっかく最強のスキルをもらったのに。恋人一人作れやしないなんて。あの人ばかり持て囃されて。………あの人さえいなければ私だつて。

気付けばもう夕方だった。

皆はもうそれぞれ放課後を満喫していることだろう。

私はいくあてもなく廊下を歩いていった。するとどこからかい匂いがする。……誰か料理してるのかな。でも部や研究会で使っているのはこことは別棟だった気がするんだけど。

気になって行ってみると——そこには今一番会いたくない司瑛璃さんがいた。

料理を作っている。それも汗だくになりながら。何皿も何皿も。

なんて異様な光景だろう。

「そこにいるのは堺ちゃんかー?」

「ひえ!」

後ろを振り向くと竜胆先輩がいた。

「え、あ、あのこれは……」

「ああ、司のやつ? 気にすんな、毎週のことだから」

「ま、毎週!」

「おう。堺ちゃんも聞いたことあるだろ司の『講師潰し』の噂」

「は、はい」

「で、これ以上講師を潰されちゃ敵わないってことで講師相手に練習できるのは五皿までって制限が出来たんだ。司のやつは納得できなくて嘆願書とかでかなり抵抗してたけど結局通らなくてな。あの講師陣のほつとした顔は今でも忘れらんねーよ」

そんなの司瑛士の設定にあっただろうか。

「だからそれ以降はこうして週一で私がガス抜きしてんだよ。ちゃんと料理のチェックもしてるけどな。つとそうだ。堺ちゃん今日時間あるか?」

「はい……?」

「よーし、なら一緒に司の料理食べようぜ」

「え!?! いやあの私は……」

「だーいじょーぶだって。味は保証するからさ!!」

そのまま竜胆先輩に押し込まれて教室に入ると司瑛璃さんと目が合った。

「あれきみは……」

「……どうも」

相手はなんとも思っていないはずなのに、こっちはなんだか気まずかった。

出てきた料理はとても美味しくて。言葉が出なかった。この学園に六年間居続ければいずれこうなるのだろうか。

「あの」

「なにかな?」



「一色先輩とのご関係はなんですか」

「一色との関係？ 仲間で幼なじみ」

「おさ、ななじみ？」

「うん。昔ちよつと色々あつて、三歳の時から一色の家にお世話になつてて。そのあと寧々の家にも付いていつて。だからどうしても姉弟感覚が抜けないんだよね」

あはは。と笑うけど、あなたはそうでも一色先輩は違う。あれはれっきとしたあなたへの恋心を滲ませた目だ。

「あの、なんでこんなふうに大量生産するんですか」

「もつと上手く作れるようになりたいから。」

いやまあそうかもしれないけど……

「だよなあ、なんだつて自分の調理の邪魔されたくないからつて調理室貸し出しの優先権のことありきで十傑目指してた節あるもんな」

「だつて十傑の抑止力で嫌な事減るかなつて当時は思つてたんだよ」

「なー、やっべーくらいエゴイストだろうー？」

キャラ……いや素で人でなしなのかなこの人つて。

「あの、なにかお手伝いできます事つてありますか」

「いやなにもないよ、だから座つてて。料理のダメ出ししてくれればいいから」

「え、でも」

「いいから座つてようぜ。司は基本的に厨房を一人でしか回せないんだから」

「え、えつと。下準備くらいは手伝わないと申し訳が……」

「真面目だなー。けどあいつは中等部の時のトラウマであたしら以外の人間と組めないんだよ」

「トラウマ？」

原作の司瑛士は相手にミスされると思うと集中できないと言つていた。でも彼女はトラウマだという。ミスされて滅茶苦茶になつたとかだろうか。

「あー、まあ司もあつち行つたしいいか。……司はさ、あーいうやつだから中等部のころから人たらしでな。結構変なやつらにもつきまと

われてたんだ。そしたらある調理実習の時に運悪くそういうのと一緒にになったらしくて。昼が近いからって多目に作ったのを食べていって話になってさ。司の分に自分の血液足らし入れてたらしいんだよそいつ。幸い食べる前に騒ぎになったんだけど……それ以来あいつは極力一人で調理するようになったんだ」

「そんな、ことが」

「話したの司には内緒な。あいつこの話苦手だから」

「……」

司瑛璃さんを見る。相変わらず横顔まで綺麗な人だ。

思っていたのとは全く違った。いくら上に行くことが確定していたとしても、キャラたちに会えるとしても、そんな目に遭ってまで料理を続けようなんて思うだろうか。

それでなくても彼女には美貌がある。転生したのなら生臭いものを下ごしらえしたり、水仕事で手が荒れるような料理をしなくても、モデルや女優になって有名になることで食べる側になりキャラと会う機会なんていくらでも作れたはずだ。

ということはいやきつとそれ以上に料理を愛しているのかもしれない。

彼女は成り代わりじゃない。この世界での司瑛璃——いや司瑛璃なんだ。

だからなにも間違っちゃいない。私が『司瑛璃のいる』食戟のソーマの世界』を指定せずただ『食戟のソーマの世界』を指定したからこうなっただけ。誰も悪くない。私がしくじっただけだった。なら上手いかなくて当たり前だ。前提が違うんだから。

それを確信した。してしまった。

なら私は？

神様のギフトで何もかもうまくいくようになって、ついここまでやってきて。

大して努力もしなかった。彼女のように汗だくにもならずここまでできた。

アイディアだってネット検索するみたいにぱつと出てくる。だか

ら。

こんなものただの僻みでしかなかった。彼女は何も悪くないのだから。

「おい堺ちゃ……」

浅ましい自分。もうどうしたらいいんだろう。

そんなことばかり頭の中で回り続ける。

竜胆先輩の声が聞こえたような気がする。でも返事をする前に私の意識は閉じた。

「……は」

目を覚ましたのは保健室だった。……このまま元の世界に戻ればよかったのに。

「よかった、目が覚めて。ここは保健室だよ、あのあと倒れたんだよ君」

「司、先輩」

一番今申し訳なく思う人がそこにいた。

「すみませんでした」

「こつちこそごめんね。リンドウに無理矢理連れてこられたんでしょ？リンドウの食事は普通とは違うから。無茶させちゃって」

「……ちがいます」

「?どうしたの」

どうやら本当に覚えていないようだった。

「いえ……あの、聞いていいですか」

「うん?」

「どうして料理人になろうと思ったんですか?」

「小さい頃の私の支えで、その料理のおかげで今の私があるから」

「……それで辛いことがあっても、なりたいたいですか」

「……うん。だって料理ほど私にとって楽しいものも好きなこともないから。ただそれだけ」

司瑛璃先輩は素でこんなことを言える人なのだ。

……そりゃあ、負けるに決まってるか。

「先輩、私ちよつと悩んでたんです。でも今日先輩と話して前進できた気がします。……何から何まですみませんでした」

「え、いや元々リンドウと私が巻き込んだんだしそんな……」

「それで、またよければ誘って下さい。小林先輩ほどは食べられませんけど」

「いいの？」

「はい——それでいつか先輩の料理を越えてみせます」

真つ直ぐな貴女を目標に、私も真つ直ぐに目指し続けよう。

ほしいものは手に入らなかつたけど、それでもそれに代わるものを手にしたのかもしれない。

ありがとうございます、司先輩。

しくじり——再起——リスタート。

それが私の料理のオリジン。

「——執行官」

「はい？」

「堺執行官。目的の店に着きました」

「ああ、では後程」

「は」

随分前の思い出を夢見ていたように思う。

あるレストランの前で車から降りる。ここの下調べはもう既に済んでいる。あとは実際に食べるだけだ。教典を小脇に抱えて私は今日も仕事をこなす。

私はWGOの執行官——堺真琴一等執行官である！